

近代ロシア社会再考(続) : 「科学と文化」の時代における労働者をめぐって

高田, 和夫
九州大学比較社会文化研究院国際社会文化専攻・欧米社会講座

<https://doi.org/10.15017/8656>

出版情報 : 比較社会文化. 9, pp.85-136, 2003-03-01. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :



近代ロシア社会再考(続)

—「科学と文化」の時代における労働者をめぐって—

高 田 和 夫*

キーワード：科学，文化，都市，ペテルブルグ，啓蒙，飲酒，居酒屋，娯楽，労働者，
ザヴォツキエ，労働運動，サークル，労働者＝インテリ

目 次

- I. 問題の所在 近代ロシアの都市と農村——二元論と関係論
- II. 近代ロシアにおける「科学と文化」の時代性
 - 1. 「科学と文化」の担い手——政府とインテリ・専門家
 - 2. 「科学と文化」の時代的雰囲気
 - 3. 「科学と文化」の象徴としての出版
 - 4. 「科学と文化」の発現様式としての「ヴ・ナロード」(以上前号)
- III. 近代ロシアにおける都市の風景(以下本号)
 - 1. 序言——ペテルブルグという都市空間
 - 2. 都市の風景
 - 3. 都市の労働住民
 - 4. 都市の時間
 - 1) 教育啓蒙
 - 2) 飲酒と居酒屋
 - 3) 娯楽
- IV. 工場地区と工場労働者
 - 1. 工業化と工場地区
 - 2. 工場地区の生活
 - 3. 「ザヴォツキエ」の出現
 - 1) 労働者の回想記
 - 2) 労働者の区分基準
 - 3) アレクセーエフの場合
 - 4) カナトチコフの場合
 - 5) 革命諸派の立場
- V. 1870年代ペテルブルグ労働運動
 - 1. サークル運動における労働者
 - 1) サークルの時代
 - 2) 「独学と実践活動サークル規約」
 - 3) ラヴローフ派サークル
 - 2. 「労働者＝インテリ」をめぐって
 - 1) 「オブノルスキー・パラドックス」
 - 2) 労働者集会と労働者組織
 - 3) 「カザン・デモ」の真相
 - 4) 「ロシア労働者北部同盟」の結成
- VI. 結語

III. 近代ロシアにおける都市の風景

本論の大きな課題のひとつはこの「科学と文化」の時代にロシアに登場した新しい工場労働者のなかにインテリと区別することがむつかしほどの知的能力を備えた部分が出

現したことの意味合いを歴史的に理解することにある。そのための準備的な考察は前段で幾分か行ったのであるが、以下では彼らが主体的な活動を見せたペテルブルグという街の様相にこだわることから始めてみたい。ペテルブルグという都市空間こそが「ザヴォツキエ」と呼称されること

*国際社会文化専攻・欧米社会講座

になる一群の、「進歩的」とみなされることが多かった、労働者たちを初めて生み出しえたと考えられるからである。そうした空間がなければ、かくも固有な社会集団がロシアにおいては登場することはなかったであろうとさえ思われる。本章では前編で確認した全国的な雰囲気を巡る話からさらに一步立ち入ることにする。

1. 序言——ペテルブルグという都市空間

ペテルブルグという都市空間が極めて人為的に創出されたことはよく知られるとおりである。その背後に秘められたピョートル一世の意図について史家によって多大な紙幅がこれまで割かれてきたこともそのとおりである。比喩的に言えば、ペテルブルグはロシアにあって「ヨーロッパ」を体現しようとした空間であった。半ば当然のように、それはモスクワを中心とした真のロシアにとり歓迎される存在では必ずしもなかった。このことはペテルブルグのいわば宿命であった。つまり、地理的だけでなく、文化的にもこの街はロシア帝国の辺境ないしは周縁にまずは位置したのである。ペテルブルグがロシアの行政的中心であるとするれば、モスクワはその魂であるとか、さらにはそれぞれがロシア帝国の首都とロシアの首都、あるいは権力のメトロポリスと情緒的伝統のメトロポリスなど対比的に議論されることが多い。そうした数々の言説のなかで、市民的的精神（いわば *civic spirit*）はペテルブルグがモスクワより強く、そこではパブリック・イニシアチヴと市民的自由が顕著であり、それはあたかも「ゲルマン圏の縁にいるロシアの前哨（a Russian outpost on the fringe of the Germanic sphere）」とでもいいうる¹⁾といった規定に筆者はより多くの関心を抱くものである。

この都市空間がロシアの大地に向けて放出する一連の価値体系は必ずしも帝国各地で受容される自明な性格を有していた訳ではない。ここを窓口に西欧から移入された多くの文化的情報はこの街に居住するインテリたちと出会って解釈され直し、新しいイデオロギーとなって社会的に伝播されようとした。明らかに、この過程で生じたことは外部からの異文化導入であり、それはロシア的に独自の仕方で行われ、その結果として複数のヴァリエーションをとることになった。本論での議論は、この都市空間が単に「ヨーロッパ」との親近性ないし親和性を有したことを強調するのではなく（それは単純化され過ぎて、歴史的な検証に耐えない仮説であろう）、つまり、そのようにして繰り返されるヨーロッパ固有の歴史性の強靱さを一方的に指摘するのではなく、むしろその特殊ロシアの様相を指摘することにあるといつてよい。²⁾

この街には新規性を生み出す素地があったように思われる。周囲を森と沼に取り囲まれたペテルブルグにはドイツ

人やフィン人など多くの外国人たちがいて、国際性豊かな場所であった。現に、この都市空間に広大な解放感をもたらしながら、大きくゆったりと貫流する河川ネヴァの名称はフィン語で沼沢地を意味したのである。1881年市センサスによれば、多い順にロシア人83%、ドイツ人5.7%、ポーランド人2.5%、フィン人2%などである。少し下った1890年で、言語別ではロシア人87.1%、ドイツ人4.6%、ポーランド人2.3%、フィン人1.8%、ユダヤ人1.0%などであり、宗教別では正教84.7%、プロテスタント9.0%、カトリック3.8%、ユダヤ教1.6%などである。³⁾ 大雑把な言い方になるが、市人口の15%が「非ロシア」と見てよいであろう。こうした多民族性はこの都市に於ける住人生活の多様性に対応するものであった。つまり、知的な能力と豊かな経験を求められる職業分野が多くあって、そこでは非ロシア人の比率がにわかに高まり、民族的に混合された性格が顕著であった。医師、技師、教師あるいは行政関係者などでは非ロシア人ないしは外国人の比率が高く、なかでも医師、技師においてはロシア人は少数派になる傾向さえあった。⁴⁾ このことは、熟練を要する金属工についてもいえた。この意味で、彼らは少なくとも相対的にはより国際的あるいは民際的な環境にあったといえる。例えば、つぎのような記述に出会うことは珍しくないのである。——シャボワロフが見習で入った鉄道工場の職場にはいろいろの国の人がいた。生粋のロシア人までが朝、工場にくると、ドイツ語で「[グーテン・]モルゲン」といった。そこでは、ドイツ人やフィン人は飲むには飲んだが、ロシア人ほどではなく、彼らは西欧風の服装をして読み書きができ文化程度が高かったから、ロシア人たちを馬鹿にしていた。ロシア人は機械を製作できない、ここのはみな外国製ではないかといった。⁵⁾

さらに、より注目すべきことにここは全国から人を引き付ける魅力を備えていた。多くの人にとり、ペテルブルグは「約束された地(zemlia obetovannaia)」であった。ゲールツェンはその回想記にこう書いている。「彼[スタンケーヴィチをさす]はペテルブルグに行きたいと思ったこともあるだろう。そこにはある種の活動が沸き立っていて、劇場とヨーロッパへの近さが彼をそこへ招いたのである。」⁶⁾ また、社会評論家N・シェルグーノフ(Shelgunov)は、19世紀後半のペテルブルグを回顧して次のようにいう。

ペテルブルグはすでに以前からその顕著な独自性を発揮して、思考したり学んだりしたい者を引き付けたのである。そうしたことは早くもベリンスキーの時代に始まり、彼はモスクワからペテルブルグへとやってきたのであった。しかし、特にそうしたペテルブルグの引き付ける力が強くなったのはゼヴァストーポリ[クリミア戦争をさす]の後からである。今は元気のあるあらゆる人が

ペテルブルグに引き寄せられている。……実際のところ、当時のペテルブルグ以上に、学んだり、さらによく思考し、感じたり、試みたりすることができる場所はないのである。そうであるから、ペテルブルグへ引き付けられた者がロシアの様々な端から、つまり、サラトフから、ニジニ〔ノヴゴロド〕から、トゥーラから、コストロマーから、シベリヤからやってくるのだ。そして、ペテルブルグはその著名な社会評論家、批評家、教授、学者をつくりだすのである。⁷⁾

代表的なナロードニキとされることが多いM・F・フロレンコ（Frolenko）の場合、彼は1848年にカフカースのスタヴローポリに生まれ、70年に当地のギムナジアを終えた時の進路選択で何よりも優先したことはペテルブルグへ出ることであった。そこは大学、学問、教授、文学などにおいて他に比類なき存在であり、何よりも街自体が輝いて見えたのである。彼はペテルブルグに出れば、「真の知識（nastoiashchee znanie）」を獲得できると思ったと回想している。まさに時代は知識に飢えていたのである。もっとも、上京した彼が入学した軍事学校や高等技術専門学校の授業はまったく関心を引くところとはならず、その欲求は町の「文学の夕べ」や非合法的な文庫に出入りする日々を過ごし、検閲済み書籍の普及活動に精を出すことによって満たされたのであるから、彼は「真の知識」の在り処を書籍に求めたのであり、さらに活字による知識の伝播力に何の疑いも差し挟まなかったと思われる。⁸⁾ また、ある一般的な労働者（といってもこの人は1880年代に「人民の意志」派労働者組織で活動した人であるが）は「ただ首都で暮らしたかった」がために70年代初頭に出てきたのである。彼はそこでパンを食べられれば良かったというのである。⁹⁾

こうした吸引力がどの辺から発しているかを正確に特定することは歴史家にとり至難の業であるが、この都市空間のあり方を考える際に、この論点はとりわけて重要であろう。おそらくそれは幾層にも歴史的に積み重ねられた諸条件によって自ずからもたらされたものに相違ないであろうが、それでも時代、時代で主たる作用を企てるものは変化したと考えるのが比較的妥当なところであろう。むしろの事に、本論はその時代相を「科学と文化」によって規定し直してみようとする試論である。

この時代、生産諸力の再編成の面でもやはりそれに特徴的な新しい近代工業（鉄鋼・機械など）の設置が進んだのであり、それにともない社会諸関係は一定の変更をこうむることになった。この点で明解な色調をこの国で随一に呈したのがペテルブルグであったとみてよいが、その重工業経済史の諸相に逐一、触れるまでもない。むしろ、ここではそうした一大変化がこの都市に歴史的に備わったいわば進

取の気性によるところが大であったことに着目すればよいのである。例えば、日曜や祭日ともなれば、顔色が悪くとうてい豊かな様子には見えない者たち、つまり、重労働の店員や仕立て屋、あるいは安い賃金の事務員たちがネフスキー大通りを冷やかして歩いて流行に慰められたり、少しばかり贅沢な気分に浸ったりすること¹⁰⁾にもそれが現れていたとみることができるのである。この街はロシアにあって最も当世風な（西欧的な）生活がなされた中心なのであった。私たちの用語でいえば、「科学と文化」の時代をこの国で最も体現しえた都市がペテルブルグであった。

こうした雰囲気醸し出されるためには、ペテルブルグ自体がその線にそって自己変革に努める必要があった。例えば、この時代、1855年、ペテルブルグ大学に全国唯一の東洋語学部が創設され、1861～95年の間に同市だけで60種以上の新しい技術雑誌が創刊されたことなどからもうかがわれるように、¹¹⁾ この町は明らかに文化的に新境地を拓き、その最先端を行こうとした。また、生産活動面では特徴的なことに、多くの外国人が工業化に直接、参加した。1866年の時点で、かれらは市内の工場の四分の一近くを所有していた。彼らの中には、綿工業家クヌープ（Knoop）のように、ドイツ系で英語を話すロシア人であるようなコスモポリタンの人間が多い。ペテルブルグが受け入れた西欧流の経営と科学技術革新とが、ロシア帝国の工業化の基調を整えたとさえいってよいほどである。¹²⁾ 1870年にペテルブルグで開催された、「第1回全露工業博覧会」と「第1回全露祖国産業に関心ある工業家大会」に結集した工業家や専門家たちはロシア近代社会史に登場した新しい主体であった。¹³⁾ この時代、ペテルブルグはこのように可能性に満ちた町であった。

農奴解放を契機によりやくして、ロシアで遂行されはじめた近代化への歩みは多方面に及ぶ作用を伴うものであったが、本論はその発現の様相を労働者の世界に求めて観察しようとする試みである。したがって、直接、対象とする局面は自ずからかなり限定されるが、ここで取り上げる幾つかの論点はロシア近代のあり方全般を考察するさいに重要な位置を占めるはずである。労働者と革命的なインテリとの関係論は本論でも展開するように非常な広がりを持つテーマであるのだが、私はここでは何よりもまず、ペテルブルグ市であったからこそ「ザヴォツキエ」（後述）なる一群の労働者主体が登場してくる環境がありえたことを示すことから始めてみたいと思う。

2. 都市の風景

まず、新しい主体の登場舞台となった「労働者地区」の市中における対照的で特徴的な所在に注目しよう。そのためにはまず都市の全景を一瞥する必要がある。ペテルブル

グという街は何よりも水と一体である。ネヴァ川は、モスクワ川とは相違して、幅広く水量も多く、河岸に立って風景を眺める者に開放的な作用さえ及ぼすほどだ。しかし、それは同時に規則的に氾濫して（1721年から1899年の間に記録に残るほどのものは134回ある）、¹⁴⁾ 不衛生な都市環境を生み出すのに力があった。時期的にみて、本論の注目に値するのは1865年のチフス流行と1871年から翌年にかけてのコレラ流行である。後者はペテルブルグ市だけでも6000人を越える死者を出し、さらにロシア史における最初の「ヨーロッパ的」ストといわれる、ペテルブルグに近いクレンゴリム綿紡績工場争議を引き起こす背景事情になった。¹⁵⁾ もう一つの水路は市中心部を縦横に走る3系統からなる運河であり、中でもマリンスカヤ運河は沿ヴォルガ地方(Povolzh'e)と繋がって重要であった。この都市が消費する物資はこれら二大水路と鉄道によって運び込まれた。外部世界と結んだ鉄道路線は、1837年建設のツァールスコエ・セロー線、同じく51年のニコラエフスカヤ線、52年のワルシャワ線であったが、特にニコラエフスカヤ線が大切な役割を果たした。さらに1870年に開通したフィンランド鉄道は郊外のヴィボルグ地区にフィン人やスウェーデン人を運び入れたのである。¹⁶⁾ とくに、フィン人は民族的な習慣も持ち込んだから、ペテルブルグ全市で目立つ存在であった。¹⁷⁾ この国の鉄道建設の第一のブーム（1868～78年）は欧露部を商業的なネットワークで繋ぎ、農村を工業製品にたいして開くことになった。¹⁸⁾ 全体を見ると、貨物輸送の6割が水路、4割が鉄道といったところであり、¹⁹⁾ 「科学と文化」の時代に鉄道を本格的に加えることで首都における近代的な輸送体系は整えられたのである。

この街の都心部の風景を特徴づけたもう一つの要素は、なによりもそれが木ではなしに鉄細工の美しさで構成されていたことであり、創建当初からの都市計画が改訂されつつも放棄されずにあったことである。エレガントな宮殿、壮麗な劇場、厳かな教会、立派な博物館などは帝国としての格式を示すほどに念入りに作り上げられ、公園と庭園、大通りといった都市空間を仕切る道具立てはますます洗練されようとした。1762年につくられた「サンクト・ペテルブルグとモスクワの石造り建築委員会」が首都の核心部分の建設を厳しく統制してきた。²⁰⁾ 1844年以来、冬宮の高さ（11サージェン、23m余り）以上の建築が禁じられたことが、²¹⁾ ペテルブルグにある種の重厚感さえ醸し出す作用を果たし、ネフスキー大通りに代表される幅広く力強く直線的に伸びる街路は近代的な計画性を象徴したのである。19世紀前半までに、中心部のカザン広場（後出）を含む5つの広場のアンサンブルは規模と調和性によってこの国の建築史上最も注目されるひとつとなった[124頁の都心図を参照]。²²⁾

しかしながら、近代化は必然的に都市に建造物を増やし、

1870年から1900年にかけて4000増えて全体で2万4000棟になった。²³⁾ この19世紀後半にペテルブルグにおける建築は役所や宮殿関係といった従来型のものから近代的な都市機能に資するための商工施設、公共施設、さらには住宅へと重点を移したので、町の相貌は変わり始めた。都心で賃貸アパート(dokhodnyi dom)の建設が盛んになり、周縁部ではより安価な住宅建設がなされるようになった。²⁴⁾ アパート数（ここで言う「アパート」には、複数の部屋から成り立つもの、一部屋のもの、そして一部屋をさらに分け合うものの3種類があった。90頁も参照のこと）は、建物の高層化も力があった。8万7779戸から15万4882戸へと増加したが、1アパートあたりの住人数は1869年の7.0人が1900年には7.4人に増加するなど住環境はむしろ悪化した。しかもこの間、家主は施設の改善なしにその賃貸料を上昇させたのである。²⁵⁾

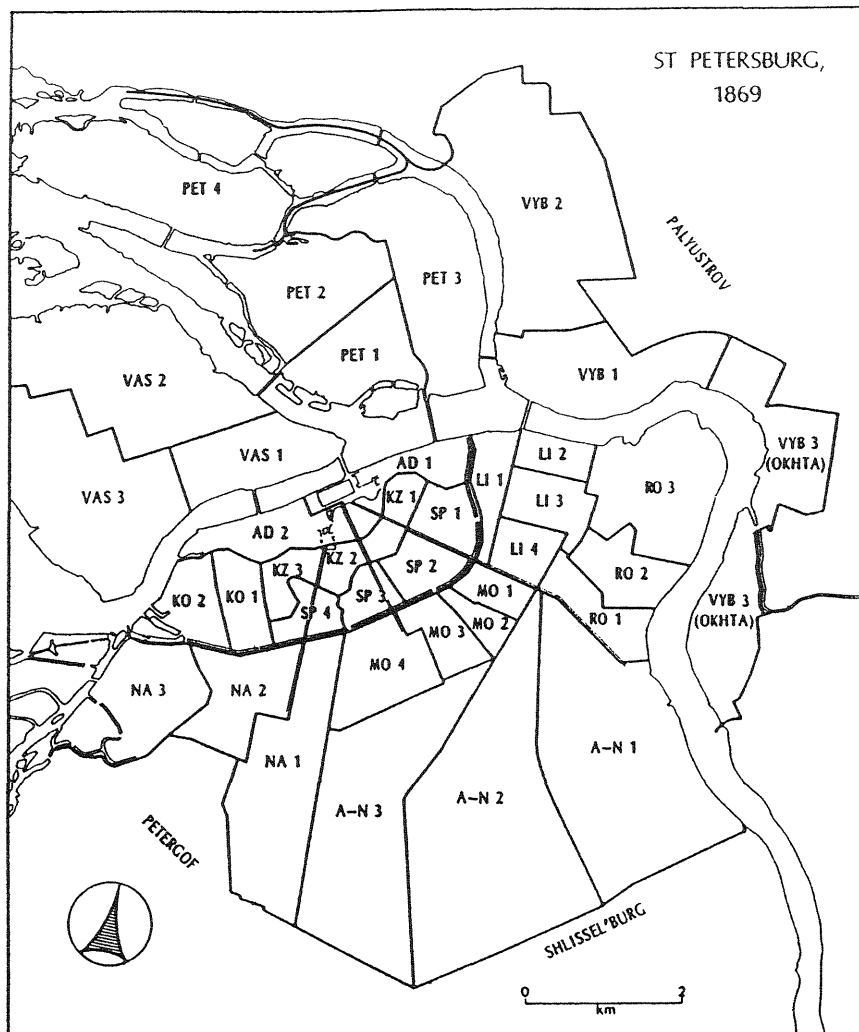
ペテルブルグに公衆浴場が登場したのは1870年代初めであったが、その数は少なく、それを見かねた特別市長トレポフはわざわざ「首都における浴場業の調査と整備に関わる委員会」を立ち上げ、急増している都市下層民たちの健康の維持に気を掛けた。ようやく1879年7月にこの街に公衆浴場を開設することは義務であるとする決定が下されたが、慢性的な不足状態は続いたのであった。²⁶⁾ このようなエピソードからもうかがえるように、この時代には、旧来の整えられた歴史的建造物に加えて、実に多様な機能と外観をとまなう「近代的な」建物が出現したのである。いわば、その代表格が工場であったが、その様相については後段で触れよう。それらは基本的には街の風景の中に渾然一体として溶け込んでしまうはずであったが、ベースとなる本来的な都市空間は当然のことに中心部に限られていたのだから、その周辺にはそうした「近代性」のみが突出するような場所も現れたのである。いってみれば、全体としては「古く由緒ある」近代と「新しく粗野な」近代とでもいいうる二つの近代が衝突する局面が登場したということである。

この街が整然とした区画で仕切られたのはその人為的な都市建設の成果であったが、特にエカテリーナ2世は10からなる行政警察区分である区(chast')制度を導入して、それに完璧を期そうとした。区はさらに幾つかの街区(kvartalあるいはuchastok)でもって構成された。1865年には行政警察区が改称されただけでなく、その数が増えた。都心部のアドミラルテイスカヤ区が分割され、アドミラルテイスカヤ、カザンスカヤ、スパスカヤ、コロメンスカヤの4区になり、さらにカレトナヤ区はアレクサンドル=ネフスカヤに改称された。²⁷⁾ 19世紀後半、都市生活は旧アドミラルテイスカヤ区を中心としてヴァシリエフスキー島の東部およびネヴァ川左岸（オブヴォドヌイとリゴフスコイの両運河まで）に集中する傾向をみせ、そこに全市民の過半(50

数%)が居住した。²⁸⁾ 1880年5月に、レスノイ、ポリューストロフスキー、シリッセリブルグスキー、ペテルゴフスキーといった郊外部分がペテルブルグ市に編入された。²⁹⁾ ここで吸収されたのは都市中心部（ツェントル）に比して明らかに粗野で洗練されてはいなかったが、これこそが近代化と工業化がこの町に持ち込んだ部分であった。こうして、この町は行政的文化的商業的機能を備えたより中心的な地帯と「手工業的かつ商業的な (remeslenno-torgobyi)」地帯の二つに大きく分けられることになった。さらに、生活水準からみれば、「設備が整って快適かつ洗練された (blagoustroennyi aristokraticeskii)」中心があって、それを「商工地帯 (torgovo-remeslennyi raion)」が取り巻き、さらにその外側に「周縁部分 (okrainy)」(「労働者の場末 (rabochaia okraina)」と換言しうる) があるといった、少なくとも3層社会をイメージすることが可能になった

たのである。本論が依拠することが多い資料集の序言を19世紀末に執筆した、ペテルブルグ首都警察主席医務官I・エレメーエフは次のように市経営の問題点を整理した。通りと広場の土壌の汚れ、川と運河の水の汚れ、合理的な下水道の未整備、人口過密と空部屋不在、下層階級の給食不足、塵芥排出手段の不十分さ、子供病院の不足。³⁰⁾ 私なりに換言すれば、これら諸点は本論が対象とする「科学と文化」の時代に出揃ったのであり、それらが未解決のまま据え置かれたということである。

都市の風景は、したがって、区によりかなりの変化を見せることになった。すでに触れたように真の都心部はともかくとしても、都心に近い区でもすこし細かく観察すれば、その内部にかなりの差異を見い出せるようになった。例えば、アレクサンドル＝ネフスカヤ区では第1街区には3階から5階立ての石造りの建物 (dom) が多く、第2街区は



ペテルブルグ区分図 1869年

〔典拠〕 J. H. Bater, *St. Petersburg*, 470.

〔略語〕 AD: Admiralteiskaia; KY: Kazanskaia; SP: Spasskaia; KO: kolomenskaia; NA: Narvskaja; MO: Moskovskaia; A-N: Aleksandro-Nevskaia; RO: Rozhdestvenskaia; LI: Liteinaia; VAS: Vasil'ievskaja; PET: Peterburgskaia; VYB: Vyborgskaia; N-D: Novo-Derevnia

古びた石造りの1, 2階建てがほとんどであり、さらにステクリャンスイ工場の周辺のように、古びて全く衛生的な配慮に欠ける木造立てばかりのところというように建築物に少なくとも3つのカテゴリーを見ることができたのである。³²⁾ この区の住人の稼業を荒く分類すると、第1街区ではようやく半数が何らかの「稼業をしていた」(ここでこのように訳す promyslovyi は本来は農民の副業を示す用語であることに注意されたい) のだが、第2と第3街区ではそれは8割を占めたことから容易に想像できるように、肉体的労働住民が多くいるところでは背の低い木造立てが多かったのである。こうしたことは中心部から遠く離れネヴァ川を挟んだ対岸のヴィボルグ区においてはさらに明瞭であった。そこは圧倒的に木造家屋が多く、率にして建造物の85%以上とほとんどを占めた。「鉄細工を施された」中心部は基本的に石造りであり、木造は25%以下で、所によってはほとんどなかったのである(1869年現在)。³²⁾

建造物からうかがわれるこうした都市の風景の変化は、そこに住まう住民の社会的な相貌によって裏付けられたものでもあった。ナルヴァ区では特に第3街区が他の2街区と大変に異なる様相を呈した。そこには26もの工場が所在し、中でも労働者4000人を擁するゴム工場があった。その上、夏季に港湾作業が開始されるとそのためにここの労働者は2000人から3000人も増えたのである。工場労働者の一部だけは工場付設の宿舎に入っていたが、大半は労働者だけが入る住居(例えば、スタロ＝ペテルゴフスキー大通りの第14番館だけでも100もの貸部屋[uglovyie kvartiry]があった)に居住していた。この第3街区にはエカテリンゴフスキー公園があって、そこは特に祝日に労働人民が野外遊楽(gulian'e)をするお気に入りの場所であった(野外遊楽については本章4節の3で触れる)。³³⁾ あるいは、スパスカヤ区第3街区も同区の他の3つの街区とは異なり、営業活動に携わる住民が目立った。ここでは営業は金属加工、皮革、繊維、木工、食品、被服、印刷、商業、運輸、居酒屋などを指すのである。同街区の貧しく密集した非衛生的な環境にはクスターリ小営業者と日雇い下層労働者が多い。彼らは日給15から20カペイカではとうていまともな生活はできない。靴屋、帽子屋、仕立て屋、毛皮職人などは渡りをする鳥のように、春に故郷の村に戻り、秋になると首都へ出てくることを繰り返している。その逆に、早春にやってきて晩秋に戻るのが石工、ペチカ据付修理工、大工、野菜作り、土工などである。夏季に働く労働者の流入は2月末から始まり4月末まで続き、9月から11月初めまでの間に出ていく。他の労働者の一群は同じ期間に首都から農村へと逆のうごきをする。こうした移動する労働者のほかに、街区にいつも住んでいる一群のクスターリがいる。彼らはようやく暮らしを立てており、しかも大半は酒びたりだ。このようにして、

「流浪のプロレタリアート(brodiachii proletariat)」が生み出されているのだ。しかも、この部分は道徳的に最低なまでに荒廃している。自分の家族、家、村を捨て、街の通りで物乞いをしたり盗んだりしているのだ。とくにそうしたことをする連中の巢窟はザバイカルスキー大通りの第4号館で、それはViazemskie kadetyの名で知られている。³⁴⁾ ここにわずかに紹介したこのようなことからだけでも明瞭なのは近代化や工業化が都市の風景を劇的に変容させる力量を備えていたことである。ここではペテルブルグの街を生み出したいわば「古典的な」近代がより現代的なそれによって駆逐されようとするプロセスを見い出すことができるであろう。

1869年のセンサスでは市内に1万9432の住居を数えたが、特徴的なことにそれらの多くはおおよそ9万2000のいわゆるセラー・アパートメントに再分割されていた。ここの住居はkvartiraをさし、セラー・アパートメントとしたのはkomnataである。全市平均で、一つの住居に27.7人が生活していた。この点で最悪であったのはかのセンナヤ広場の周辺であり、そこでは247人が入っていた。³⁵⁾ こうした地点は市内に何箇所もあり、そこはさらに非常に特徴的な様相を呈していたのだが、「悪名高きスパスカヤ区第3街区」では1km²当り、7万2000人が文字通りに蟄集しており、それに続くのが約1万人ほど少ない「カザン区第2街区」であった。³⁶⁾ これらにおける住環境は想像を絶するものとしきれないであろう。後にも触れるが、ペテルブルグの住宅事情は全般的に厳しく、新参者はことのほかに苦勞を強いられたのであり、とくに彼らが多く集まる場所は貧民窟でさえあった。したがって、近代化と工業化の深化が貧困をこの街に招来するのに力があつたことは多くの人の目に明示的に映ったはずであった。住民1000人あたりの死亡率は市の周縁部にいくほど明らかに上昇する傾向にあった。その最大値は55～59.9であり、この水準は他と比べて格段に高い。つまり、市全体の死亡率は1000人当りで1870年の33が1890年には26と下がる傾向にあった(出生率は、29のまま変化なしである)。それに比べると、70年の時点で倍近い高率である。周縁部にいくほど生存のための環境は悪化していたといわなくてはならない。³⁷⁾ これらのことはこの街に暮らす人びとに何らかの作用を及ぼしたに相違ないのである。

ペテルブルグでは公共交通手段の整備は遅れがちであった。馬車鉄道はようやく、1860年代初頭から「ネフスキー＝サドーヴァヤ＝ヴァシリエフスキー島馬車鉄道会社」により建設された。しかし、夏季には、農民である乗り手は農村へ戻ってしまったから、運行本数はその間4割も減少した。市電が導入されたのは五年革命後の1907年からである。労働者の圧倒的部分は、別に見るように、自らが探し当て

た住宅に入っていた。モスクワ地方のように、工場主側が労働者宿舎を用意することはペテルブルグでは例外的なことであった。仕事場と住宅との往復に時間と何よりも金がかかることを嫌って、労働者たちはいわば職住近接を心がけたから、労働者たちが公共交通手段を利用することはもとより少なかったのである。平均すると一般労働者の毎日の移動距離は1000メートル以下であったと推計されている。この職場＝住居関係は都市化と工業化によっても基本的に変わることはなかった。³⁸⁾ 全体としてペテルブルグ労働者の都市内部での移動性（モビリティ）は大変限られていたと考えられる。従って、大袈裟に言えば、彼らが工場が相対的に少ない都心部にその姿を表すこと自体が十分にひとつの事件たりえたのである。逆に、「労働者地区」に相応しくない装いの人物が出没することも同様の効果を周囲に及ぼしたはずなのであった。この「労働者地区」といった用語がこの時代のペテルブルグでいかに普及したかについては不勉強な今の筆者には明言できない。しかし、都心から離れた周縁部にこそ工場の多くが所在したのであり、労働者と工場とを近い位置関係においたのであるから、ある地域名を聞けば、特定のイメージが思い浮かぶほどのことはあったのであろうと想像されるのである。

3. 都市の労働住民

ペテルブルグは、改めていうまでもなく、ロシア帝国を近代的に経営するためにつくられた首都であったから、そのために貴族をはじめとする諸身分が配置され、19世紀末のセンサスでは数少ない「サービス・文化」型の都市として整理区分されたことはすでに本論の導入部に触れたとおりである。³⁹⁾ しかし、ここでもほかの都市と同様に、都市経営のための基礎的労働力は外部から調達することを常とした。まず、その社会構成を身分別に一瞥しよう。

表1 ペテルブルグ市住民の身分構成（1865, 69年）

身 分	1865年		1869年	
世襲貴族	40,543人	7.5%	54,398人	8.2%
一代貴族	39,484	7.3	40,186	6.0
聖職者	5,258	0.9	6,113	0.9
名誉市民	7,702	1.4	6,990	1.0
商人	21,336	4.0	22,333	3.3
町人*	97,198	18.0	123,267	18.5
職人**	17,535	3.3	17,678	2.6
農民	145,370	27.0	207,007	31.0
軍人	83,970	15.5	123,126	18.4
外国人	15,948	3.0	21,335	3.2
フィン人	9,530	1.8	17,205	2.6
雑階級人	19,887	3.7	17,771	2.7
その他	35,641	6.6	9,798	1.6

〔典拠〕 J.H.Bater, *St Petersburg, Industrialization and Change*, London, 1976, 194.
〔注〕 町人*は meshchane の、職人**は tsekhovye の訳語

この表から明らかなように、1869年をみると、貴族（世襲と一代）14.2%，町人18.5%，農民31.0%，軍人18.4%が住民の4大身分であることが判明する。ここで最大級の農民（身分）は、農業ではなく基本的には工業を担当した部分とみなして基本的に誤りはないであろう（労働者という身分は存在しない）。

農奴解放以前からペテルブルグは主に非黒土地帯のヤロスラヴリ、トヴェーリ、コストロマーの3県から多数の出稼ぎを受け入れていた。つまり、農民たちはモスクワより遠いこの町に引き付けられたのであるが、そうなるについては交易関係や地主の意思などが作用していたであろう。ふつう、ペテルブルグへの出稼ぎ人は「ピーテルシチク (pitershchik)」と呼ばれ、これが出稼ぎ一般をさす用語としても流通していた。⁴⁰⁾ これはすでに上で触れた、この街が有した人を引き付ける力のひとつである。これら3県のうちトヴェーリ県は農業に適さない気候や土壌であり、ペテルブルグと黒海とを結ぶ水運で好位置にあり中継地として物流に活路を見出したのだが、クスターリ工業などの非農業的な職種は未発達であり、農民たちは未熟練のまま、何の技能もなしに出稼ぎに出ることが多かったのである。これにたいして、ヤロスラブリ県の場合、1870年代初めで国内旅券発行数はノヴゴロド県に次ぎ全国第二位を誇り、同県農民数の14%に相当するほどであった。この県の農民の出稼ぎ先は工場労働のほか、中でも居酒屋稼業 (traktirshchiki) が盛んで、ペテルブルグ（およびモスクワ）ではそれは皆、ヤロスラヴリ人 (iarnoslavtsy) であるといわれたほどであったし（もっとも、1894年、政府による酒専売制の導入は彼らに大きなダメージを与え、多くが帰村を強いられた。居酒屋については後に詳しく触れる）、さらにはポシエホンスキー郡のごときは仕立て屋稼業で有名なほどに地域的な特化を見せていた。⁴¹⁾

19世紀後半になると各県からの出稼ぎが首都で特定の労働に従事するパターンが確立するが、トヴェーリ県からの

表2 出身県別農民身分の読み書き率（1869年）

出身県	農民数	読み書き者数	読み書き率%
ヤロスラヴリ	45,180	16,056	37.5
トヴェーリ	34,402	21,133	64
ペテルブルグ	27,012	18,983	72.5
ノヴゴロド	18,254	13,388	76
コストロマー	12,530	5,960	50
プスコフ	8,168	6,164	79.5
リャザン	7,361	4,209	60.5
モスクワ	6,925	3,106	49.5
スモレンスク	6,314	4,254	71.5
ヴィテブスク	5,476	4,124	81.5

〔典拠〕 Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 237.

出稼ぎ農民たちの場合は手に職がないからなかなかそうはいかず、その動きは組織的ではない。しかしながら、彼らが出稼ぎ先のペテルブルグで有利な高収入にありつくために、何よりも読み書き能力をつけようと努めたであろうことは表2からもうかがわれるのである。この表によれば、17万人余りの農民身分の内、9万7000人ほどが読み書きできる（全体平均56.7%）ことになる。トヴェーリ県は平均を上回り、ヤロスラヴリ県はむしろそれを下回っている。読み書き能力なき者はペテルブルグではわずかに「カペイカ分だけ飲む」ような惨めな生活を強いられることが多かったといわれる。やがてトヴェーリ県はヤロスラヴリ県を抜いてペテルブルグ最大の出稼ぎ供給県になるのだが、地元には職がなく、農業は人口を養えないほどの僅かな生産力しかなく、しかも諸税の納入が滞れば、彼らは出稼ぎに励むほかなかったであろう。そうするには農村共同体の強制力も働いていたかもしれない。いくら地理的に都合のよい位置にいたとしても、鉄道や蒸気船といった新しい輸送手段の導入を前にして農民たちは打つ手も無しに御用済みになった役畜を売却するほかなかったのである。こうした部分が出稼ぎを単なる「パートタイム」ではなく、むしろ本業とする予備軍となるであろう。⁴²⁾ トヴェーリ県の場合とは対照的に何らかの技能を備えることが多かったヤロスラヴリ県の出稼ぎ人は読み書き能力を前面に押し出すまでもなかったとも思われるが、それでも彼らの読み書き率は県内に残る小営業従事者のそれよりも1.5倍から2倍は高かったのである。⁴³⁾ 結局のところ、ペテルブルグはそれなりに「出来る」農民を各地から集めていたことになるのである。

ペテルブルグは出稼ぎ農民の受け入れに長い伝統があった。実際、その歴史は古く、1840年代、市人口45万のうち15万がオブロク支払いのための出稼ぎ農民であった。⁴⁴⁾ 流入の規模は大きく、彼らの到着が同市の死亡率を高める作用までしたのであった。天候が彼らに与える影響は強く、とくに夏季の過剰な死が1860年代、公衆の間でたえず話題となった。1890年センサスで市内生まれ（korennoe naselenie）と市外生まれ（prishloe naselenie）の比率は1対2であるから、この町には「よそ者」が倍もいたのだし、その大半を占めたであろう農民身分は、1869年32%、1881年41.9%、1890年50.3%、そして1897年57.6%と市民に占める割合を一方向的に増大させたのである。⁴⁵⁾

ロシアの近代都市では農村農民の大量移動は年間を通して一定のリズムをもって繰り返えされた。彼らは流入したままになるのではなく、流出（帰村）もしたのである。ペテルブルグの場合、夏季と冬季で市人口は凡そ20万人の差が生じた。具体例をいえば、1888年6月15日時点で72万7223人を数えた人口は同年12月15日には90万2023人になり、89年7月15日の71万9052人は同年12月15日には92万4466人に

なり、90年7月15日には73万1338人になったのである。この傾向は郊外（prigorod）部分を加えても確かめることができる。時間の経過とともに、市の総人口は増えるが、移住してくる者の割合は変わらない。このように、季節的移動（いわゆる seasonal exodus）が保たれる限り、都市化が進展する一方で、農村の習慣や価値観はこの都会から消え去ることはなかったと見ておくのがよいであろう。1910年になっても、この町の実に12万5000人が農作業に出たのである。⁴⁶⁾ もちろん、業種によって、出稼ぎの季節性は変わった。建設業労働者の場合は、大方の出稼ぎとは逆に、夏季にペテルブルグに來たからその数は冬季の約7割増になった。畠山によれば、1888年6月で、夏季流入就業者は約4万人でその半分が建設業関連であった。⁴⁷⁾ 工業化にともなう社会変動のダイナミズムは季節的な住民移動をいくらかは和らげる作用を及ぼしたであろうが、全体としては社会的習慣や経済的な必要性は伝統的な移動リズムを基本的に維持したのである。

ペテルブルグ市人口の増加は、19世紀中ごろまでの100年間を平均して年4000人以下の水準であったが、1850～70年には2倍以上になり、さらに70年代の経済成長期には加速され、80年代不況期に伸びは少し鈍化した。それでも1万5000人水準である。こうした人口増は基本的に自然増ではなく、流入による増加に起因している。1880年代初めになって死亡率が急落を見せた。これは公衆衛生観念の発達や労働人民の物質的生活条件が改善されたことに拠ることが多いとされるから、⁴⁸⁾ 時期的に見て遅くともこのあたりまでにペテルブルグ公衆一般が「労働問題」の所在を認知するようになったと推測されるのである。これは、本論が主に扱おうとしている時代的特徴を構成する重大な要素のひとつである。

ここでペテルブルグ市人口を一覧する表を掲げよう。これは男女比を示していることにも注目されたい。

この表から明瞭に観察できるのは歴然とした性差であるが、傾向的には徐々にその差は狭まっていき、女が48%を占めてほぼ半々になるのはようやく1910年代になってのことである。そうした全体傾向があったとしても、働き手の年代を取り出せば、性差は相変わらず遥かに大きかったこ

表3 ペテルブルグ市の人口

年	総 数	男 (%)	女 (%)
1858	496,656	64.2	35.8
1862	532,297	60.5	39.5
1869	667,207	56.7	43.3
1881	861,303	54.6	45.4
1890	954,400	53.8	46.2

〔典拠〕 Ocherki istorii Leningrada, 173を少し加工した。

とも同時に着目しなくてはならない。つまり、女を100とした時、1869年、1881年、1890年の順で、男は10～20歳では165.0、152.0、152.3と、20歳～40歳は152.2、139.1、134.0とそれぞれ推移した。⁴⁹⁾ 40歳で切っているのは、当時の労働可能年齢がそのあたりまでであったからである。ペテルブルグ労働住民の大半は「10～40歳カテゴリー」におちついたのである。労働者の年齢構成を1900年センサスで確かめると、全体で16歳までが9%、16～20歳が21.2%、そして21～40歳までの層が54.6%であり、ここまでで85%ほどになるのである。⁵⁰⁾ 市中に流入したのは、20歳台から40歳台の男子が主体であり、しかも彼らのある部分は工場がある市周縁部に集中する傾向を示した。都心部から離れるほど住民に占める男子の比率が上昇する傾向があった。1869年現在、とくにヴィボルグ区は最上位の65から70%を示したのであるから、⁵¹⁾ この一角に足を踏み入れる者は明らかに別の場所にきた印象を抱いたはずである。

さらに、この町には既婚者が一貫して少なかったことに注目する必要がある。男子の場合、既婚率は1863年で19.2%であったが、1900年の時点でも21%とほとんど変わらない。⁵²⁾ 国際的に見ても、この町は結婚数が少ないのである。『ブロックガウス=エフロン百科事典』はわざわざそのことをヨーロッパの主要都市と比較する表を掲載しているが、⁵³⁾ 1881～85年、住民1000人あたりの婚姻数は、ロンドン8.8、パリ9.3、ウィーン8.7、ベルリン10.4であり、ペテルブルグは6.8とはるかに小さい数である。（この問題は104頁で再度、触れる。）

4. 都市の時間

すべての人間は限られた時間しか生きることはいできないが、その時間の使い方については自由化が進む方向で人類史全般はゆっくりと進んできたであろう。強いられた労働に人生のすべてを捧げざるをえない人は減少する傾向にあるということである。ロシアにあってもこの「科学と文化」の時代にそれは社会的によりやく顕著になったと思われるが、この点で農村と都市は際立つような相違を見せるようになった。いや、正確には、本来的に都市と農村では時間の流れ方が異なっていたのだが、この時代になってそれを実体験する（可能性がある）人が飛躍的に増加したのである。⁵⁴⁾ このことはロシア社会における余暇の発生としてとらえることもできようが、それだけでなくペテルブルグ市民たちが積極的に何かに働きかけて主体的に時間を過ごすようになったことに着目したい。この町ではこの時代にそうした意味で時間が人により複合的な性格を帯びるための装置を準備しえたと考えられる。そのことを幾つかの局面に見よう。

1) 教育啓蒙

全国的に見れば、ペテルブルグ市は教育に熱心であったといえるであろう。1874年現在の教育施設とその生徒学生数は次のようであった。初等教育は全464施設（学校）で、男子1万0534人、女子1万0188人と男女数で差がない。中等教育は男子が32施設7501人、女子38施設8011人で、むしろ女子教育が数的に優勢である。ペテルブルグ帝国大学は歴史文献学部98人、物理数学部412人、法学部594人、東洋語学部46人で合計1150人であったが、さらに自由聴講生が73人いた。このほか、いわゆる特別教育施設として分類された正教会、教員養成、医学、軍事などの高等教育施設があったが、議論の必要からそのわずかな事例に触れれば、同じ74年に、外科医学アカデミーが1355人、高等技術専門学校が698人（ただし、72年は1135人）、さらに帝室芸術アカデミーが357人といったところであった。⁵⁵⁾ 印象的なことを言えば、帝国随一を誇った高等教育は当然のこととしても、女子教育が盛んであることに象徴された教育熱がこの街の雰囲気的一端をつくるのに貢献していたと思われるのである。

少し時代は下るが、1890年の5歳以上のペテルブルグ市民を対象とした読み書き率調べによると、男74%、女54%、全体平均65%が読み書きができることになっている。同年の就学調査によれば、15歳以上1000人につき、初等学校修了が男234人、女153人であり、家庭教育だけの者が同様に131人、141人である。これとは別に（おそらくいかなる教育も受ける機会がなく独学で）「読み書きのみ」という選択肢があり、それも同様に253人、125人いる。したがって、男で600人余り、女で400人余りが、つまり、15歳以上のペテルブルグ市民全体の半数余りが、いずれにせよ初歩的な言語運用能力を持っていたと推測することができるであろう。ペテルブルグでは大人になれば読み書きはできるはずだとする社会通念がもう少し前の時代において成立していたであろうと推測される。住民に占める労働者の割合が高い地区ほどその読み書き率は低下する傾向が認められるから、⁵⁶⁾ この街では単に労働者であるがために、場合によっては蔑視されることがあるのを覚悟しなくてはならなかったであろう。ここでは読み書きできないことはむしろ目立つことなのであった。その労働者に関してさらに付言すれば、年齢が若い層ほど読み書き率が高くなる全体傾向がある中で、業種的にこの分野でも「エリート的な」扱いを受けることが多い金属加工業よりもさらに高率を示すのが多数であったことには注目してよい。木工、食品加工、印刷、商業、宿屋、酒販業、クリーニング業などはその事例の一部になるであろう。⁵⁷⁾ これらのことは「科学と文化」の時代としてこの時期を扱ってみたい理由のひとつにもなっている。さらに、上の1890年センサスによれば、高等教育修了者は

同じ1000人につき男32人、女4人であったから、彼らの「超エリート」ぶりは明らかである。⁵⁸⁾したがって、大学生と農村からやってきたばかりの無筆の出稼ぎ農民との組み合わせは、この面で最も対照的なのである。本論文前段での指摘を繰り返すようになるが、これは「ヴ・ナロード」運動の背景にあった基礎的な社会関係論である。

1870年、国民教育省は初めて文化啓蒙のために資金約8000ルーブリを出す決意をして、成人向けの学校に支出したが、他の省庁も同様な試みを始めた。⁵⁹⁾この国では、人民教育は人民自身に任せるとした実に自由かつ無責任な観念が歴史的に流通してきたのだが、その流れを大きく転換させるというのである。ペテルブルグ市では1872年に特別市長F・F・トレーポフが主導して「人民読書会整備常置委員会(Postoiannaia komissiiia po ustroistvu narodnykh chtenii)」が設置され、最初の3年に市内9箇所で読書会を666回行い、それには市民6万人が参加したのである。⁶⁰⁾このように、俄然、「科学と文化」の時代に上からの文化啓蒙活動が盛んになった。上例からも伺われるように、上からの仕掛けにたいして敏感に反応する確かな部分が市中に存在したことは無視できない。

その一方で、いわば下からのものは農奴解放に前後する時期から発生していた。たとえば、それは郡市レベルで公共図書館を建設する動きにもなって現れたのであるが、⁶¹⁾ここではとくに1859年から62年にかけてこの町を中心にして展開された労働者を対象とした日曜学校運動に注目してみよう。これは伝統的な博愛的活動あるいは後年の「小さな行為」的リベラリズムとも結びつく性格を有し、クリミア戦後から農奴解放に至る過程で認められることが多かった社会的自覚および下層階級への同情をよく反映したものであった。教育こそが労働者に社会的な上昇をもたらすであろうと考える人たちがロシアにも現れたのである。この経路を使って、啓蒙することに社会的な認知が下されたともいえるであろう。1860年末、ペテルブルグとキーエフに合計して23もの日曜学校があった。ペテルブルグでの中心人物はN・V・スターソヴァ(Stasova)(ロシア・リアリズム芸術の熱烈な提唱者であったV・V・スターソフの姉妹)であり、彼女は「ペテルブルグ労働人民住宅改善協会」に参加したが、そこで日曜学校のことを元キーエフ大学教授であるV・パーヴロフ(Pavlov)から教えられたのである。学校ではペテルブルグ大学生が教師役をやって、読み書きを教えることを基本とした(これは「ヴ・ナロード」の先駆的形態のひとつであろう)。この運動は長続きせず、すぐに熱が冷めてしまい、1861年には出席者は激減した。それでも、当局はかような「自由な」学校の存在を嫌悪し、カリキュラムの統制まで図ろうとした。そして、1862年5月、パーヴロフが革命家ゲールツェンとの関係を疑われて逮捕

され、学校自体潰されたのであった。⁶²⁾しかし、この日曜学校運動の伝統は維持され、例えば、1870年3月には同市内のヴラジーミル都市学校校舎を使って、ヴラジーミルスカヤ・ニコリスカヤ女子日曜無料学校が開設された。生徒は読み書き能力により3クラスに分けられ、当初は2、30人で出発したが、やがて100人から150人程度にまで増加した。彼らの多くは労働者の子弟であり、中にはすでに工場などで労働する者もいた。市内各地から生徒たちは「学校好き(liubvi k shkole)」で通ってきたのであるが、ほとんどは何よりも読み書きの修得を目的としていた。彼らの中の恵まれた者には4年から5年間も通学する者がいたのは、読み書き以上に何らかの知識を身に付けるためであったろう。ここには小さな図書室があり、そこではとくに教訓的物語(nravouchitel'nye skazki)が好まれたのである。⁶³⁾

このように、上からにしろ、下からにしろ、ペテルブルグは教育啓蒙の雰囲気覆われていた。すでに本論文前段で触れたように、各種の学術団体や学会がここを中心にこの時期に成立したこともこうした風潮を助長したであろう。図書館や博物館が「有益な知識(poleznye znaniia)」の普及を目指して整備されるようになったが、それだけでなく無料読書室(chtal'nia)、学生サークル、同郷人会の非合法(あるいは非公認)読書室までふくめて読書関係施設が増加したことは強調するに値する史実である。「公共図書館」の入館証(bilet)発行数が1860年の3000から1895年には1万4000へ増加したことからもうかがわれるように、市中には読書を尊ぶ空気の中で一定数の「読書人」が形成されたとさえ思われるのである。⁶⁴⁾

文化啓蒙のための仕掛けがロシアにおいてもこのようになりかなり大掛かりとなったことは正確に認識すべきであろう。⁶⁵⁾近年のパルホメンコは文化啓蒙のための組織をつぎのように分類している。⁶⁶⁾①社会教育的な(Obshcheobrazovatel'nyi)もので、日曜学校、労働者コース、人民大学など、②社会啓蒙的な(Obshcheprosvetitel'nyi)組織で、図書館、人民読書会、博物館、自習会など、③人々を固有の関心で集め、芸術能力を発展させるコーラス会や写真会のようなもの、④文化的娯楽組織で、人民劇場、映画会、クラブなど、さらに⑤多機能的な組織として、人民大学協会、人民の家など。ここで逐一、事例を挙げることはしないが、これらの多くがこの時代のペテルブルグに登場したと見て大きな誤りはないのである。

こうした事態が出現するには政府による都市政策がそれなりに作用していたことも無視し得ない。1870年6月10日都市法が1872年にペテルブルグ市に導入され、都市の権利義務関係が拡張された。1874年、政府はペテルブルグ市会に小学校を移管したから、⁶⁷⁾この機会を捉えて市は学校教

育に精を出すことになった。その移管時に市営小学校はわずかに17でしかなかったのが、20年を経た1893年には300になったのである。⁶⁸⁾ だが、市営の人民図書館が整えられてくるのは、本論が主たる対象とする時期よりも少し後からのことである。つまり、市は5年革命期までに少なくとも16の無料人民図書室を開設したのであるが、最初の2つはようやく1887年に作られたのである。⁶⁹⁾

さて、ペテルブルグの労働者の間で「学校 (shkola)」という用語が特別な響きを持って流通し始めたのは1870年代初めの時期であったと考えてよいであろう。それは社会革命に身を投じようとする学生たちが「ヴ・ナロード」に備えて労働者の支持を得ようと考えたことから始められた彼らの諸関係が徐々に進化する過程で観察されたことである。労働者側が求めた知識、学生側が与えようとした変革思想、これらの受け渡しが行われるはずの中心的な、無論、地下の場が学校であった。⁷⁰⁾ それは外見上は制度的な真正正銘の学校であったりもしたのだが、ここで注目すべきはこのような仕方学校なるものが実態的にも用語上も活用されたことであり、そうすることが自然なほどに学校が社会に広く認知されたことである。これは「科学と文化」の時代がもたらした顕著な現象のひとつである。

2) 飲酒と居酒屋

次に視点を大きく転換して、余暇を「無為に過ごす」代表的な局面とされることが多い飲酒を取り上げて見よう。ロシア労働史家ゼルニクは、農奴解放後に飲酒はさらに広まった。そのために、人民の間には「道徳的変容 moral transformation」さえ起きた。とくに首都では飲酒が盛んに行われた。1865年、ペテルブルグ市内には1840もの居酒屋 (kabak), 562 の宿屋, 399の酒飯店, 229のワイン・セラーがあった（合計すると、3030）というのである。⁷¹⁾ あるいはペテルブルグ市史の専門家であるペイターは、飲酒と無秩序は19世紀中ごろまでは警告の対象にもならなかったが、1860年代に状況が一変した。飲酒施設が増え、それは1869年の2400が72年には2700にまでなった。1869年には3万4600人もが飲酒が原因で逮捕されたと指摘するほどである。⁷²⁾ 何故、農奴解放後にかくも大きな変化が起きたのか、それについて彼らは立ち入って議論していないが、「科学と文化」の時代に社会的に飲酒が大層に盛んになり、当局がそれを問題視せざるをえないところまでできたことは確かのようなのである。

この時期に飲酒が世間に流行していたことは、別に彼らに限らず比較的容易に具体例を示すことができる。四句大斎の折、礼拝所からの帰途に正教信者たちは酒場へ立ち寄り騒ぐのが常態化した。それだけでなく、警察当局が辻々に「参詣者は火酒やビールのビンを押収さるべし」と公示

したほどだから、「精進落ち」以前の問題として飲酒が盛行であったのはよく伺われるのである。さらに、法事の後で空き瓶を集めそれを金に換えて、白パン、菓子、それに本まで買ったという記述もあるくらいだから、その際の飲酒量はかなりのものであったろうと想像することもできる。警察当局は、こうした動きに対抗するために、教会、修道院、墓地から280フィート以内に飲食店を開くことを禁じた。⁷³⁾ 「お参りに行くといつては、〔それをだしにして〕飲んでいた」人びとの中で信仰と飲酒が区別されることなく重なり合っていた様子を想像できよう。そして、飲酒問題が警察の管轄になったことも興味深い事実である。手短かにいえば、1860年代のペテルブルグは不摂生と不健康に終わった。警察による逮捕件数は1861年の6万9000件が1869年には19万件に急増したのであるが、⁷⁴⁾ その中で飲酒による逮捕者は1869年で3万4622人を数えた。これは逮捕者総数の約2割に相当するほどである。⁷⁵⁾

こうした惨憺たる状態であったから、早くも1857年に政府は首都住民の健康を気遣って、公衆衛生委員会 (Komitet obshchestvennogo zdравиia) を発足させた。これは1866年に廃止されて、翌年に市レベルの新しい委員会がつくられた。⁷⁶⁾ ペテルブルグ市会は1868年にペテルブルグ公衆衛生保護協会を組織することを後援した。⁷⁷⁾ 公衆各方面も座視し続けることができずに、有志が立ち現れて、1877年、ロシア人民保健協会 (Russkoe ohshchestvo okhraneneiia narodnogo zdравиia) を立ち上げた。アル中に関する記事で、各種医学雑誌の紙面は埋めつくさるようになった。ロシア正教会は、アル中は犯罪を生むとしてそれを糾弾した。さらに、労働者の劣悪な住環境がアル中を生み出すとする見方まで登場した。因みに若きレーニンはアル中を労働者の貧困ではなしに、1894年の政府による酒専売導入に結び付けて考えようとした。これらそれぞれは事態の一面に触れるに過ぎないが、明確なことは、1860年代後半から、とくに70年代に入って、社会的行為としての飲酒が多方面から注目を浴び、非難されるようになったことである。⁷⁸⁾ すでに見たように、警察は人民の道徳生活 (narodnaia npravstvennost') を問題として、人民の飲酒を制限しようとした。特に休日、それも野外遊楽の際の（このとき、人々は精一杯、着飾って、都心の広場に向かう）酒類販売を完全に禁止しようとしたのである。⁷⁹⁾

かくも飲酒が問題となるについては、市内にそのための関連施設が「充実してきた」ことがあった。既に触れたように、シリッセリブルグ郊外区だけでも、1892年には69の小さな酒販売屋があり、さらに住民652人に1つの居酒屋 (kabak) と17の公衆食堂 (stolovaia) あるいは喫茶店 (chainaia) があったように、⁸⁰⁾ 酒場関係施設は市内各地に高密度な存在をみせたのである。1865年、周縁部のヴィ

ボルグ、アレクサンドル＝ネヴァ、ペテルブルグの3区では、住民200人当たりひとつの居酒屋があった。⁸¹⁾ 食堂などは、市内に1860年代中ごろには、900以上が存在した。その過半（529）は下級の飲食店あるいは居酒屋（traktir）であった。⁸²⁾ 高級レストランが並んでいたのは、基本的にネフスキー大通り、大モルスカヤ通り、小モルスカヤ通りに限られ、リテイヌイ大通りなどいくつかの通りには部分的ではあったが、そうした施設が存在した。⁸³⁾ これら施設は市内で地域的に特徴的な分布（偏差）がみられたということである。

ここで幾つかの事例を引きながら、この街における居酒屋の具体相をみよう。都心部のアドミラルチェイスカヤ区には13の居酒屋があったが、それらは建物の1階ないし2階にあり、うち5つは1、2階両方を占めていた。大半のところでは、平民階級（prostoi klass）専用の空間が用意され、それはいわゆる庶民部屋（chernaia polovina）を構成していた。一方の側は賓客部屋（chistaia polovina）と呼ばれた。⁸⁴⁾ 居酒屋によっては、両者は大理石の階段や小テーブルによってはっきりと仕切られていた。特にそうした施設では庶民部屋は完全に軽視されていた。そこは部屋の調度品や家具などの趣味が悪く、全体に不潔で汚れていた。どこの居酒屋にもビュフェがあり、そこには各種のヴォトカやビールのほかに、さまざまな前菜類が50種も置いてあった。庶民部屋と賓客部屋の双方に共通する調理場があったが、そこで前者用に作る料理は後者用の三分の一か二分の一の価格であった。庶民部屋を利用するのは、御者、屋敷番、使い走り、職人、労働者たちである。居酒屋の従業員たちは居酒屋がもっている部屋を住居にしたが、それがない場合は外部の他人の部屋を借りたりして、朝の7時から夜11時まで休みなしに働かされた。ある居酒屋では20人から25人の召使が日に500人から600人、時には1000人の客を相手にしたのである。⁸⁵⁾ カザン区の居酒屋の場合、賓客向けのもの、いわゆる平民的な居酒屋でなおかつ賓客部屋を伴うもの（これは上の街区の事例に等しい）とそれを伴わないものの3種類があった。レストランは普通は賓客用である。これらを数的に見ると、居酒屋は順に3、5、5、11であり、レストランは第一級が4、第二級が7である。賓客向けの居酒屋とレストランは広々としていて、設備も照明も良いのであるが、平民向けの居酒屋はそれと対照的である。これらは1階（ないし2階）ではなしに地下にあり、部屋数も5、6と少ない上に、設備も老朽化して悪く、不潔である。提供される料理も貧相であり、使用される食器類は不衛生である。何せ、同じ調理場を使って都市最貧民向けの仕出しをしているのだ。そこで、出される料理は押して知るべしである。⁸⁶⁾

もうひとつ、スパスカヤ区の居酒屋を垣間見よう。大抵

の客はいわゆる常連さんである。同区で最も人口稠密な第3街区に最多の居酒屋があるが、その住人は商業階級か工業階級である。ここにあるセンナヤ広場とゴルストキナ通りにある二つの市場を円形に居酒屋が取り巻いている。平民が訪れる居酒屋は安タバコ（makhorka）特有の匂いと煙、そして塵芥に満ちている。すべての居酒屋は2つに分かれている。つまり、やはり庶民部屋と賓客部屋である。ここではよく前者が2階で、後者が1階である。賓客部屋の最初の部屋にはビュフェがあったりするが、3ないし4の大部屋と2ないし4の個室から成っている。これに対して、庶民部屋のほうは設備の悪い2ないし4の部屋だけである。⁸⁷⁾

これらの事例は居酒屋という場で明瞭に観察されたロシア近代の社会的区別（差別）を示している。私たちはこうしたレベルにまで降りることで初めて社会通念の在り処を知ることができる。この場合、キー・ワードとみなされるのは chistaia と chernaia という形容詞であり、並行して使われる prostonarodnye という形容詞は後者と同義的である。これら二つの社会層が「一緒に飲む」ような機会はなかなかなかったであろうと思われる。上に見た居酒屋の構造はそのことを物語り、暗示している。次に見るように、居酒屋が単に飲食だけの場所ではなく、交流と意見交換の場でもあったことを考えれば、このことはロシア社会史にとり無視しえない意味合いを有するのである。

さらに、居酒屋稼業（traktirnyi promysel）として一括される範疇を見ると、興味深いことに気付く。このグループは4つに分けられており、以下の第1と第2は圧倒的に（9割以上）ロシア人が従事しているのだが、第3と第4になると、ロシア人の割合が7割台に低下して非ロシア人経営者がふえるのである。つまり、第1は「旅館、ホテル、カフェ、レストラン」であって、ペテルブルグ全市に370店を数え、従業員平均数は17.6人である。第2は酒飯店で530軒、2.7人。第3が「旅籠屋、料理店、小料理・ビアホール、軽食堂、娯楽施設（ダンスホール、レストランアター）、家具付貸室（meblirovannye komnaty）」で542店、2.1人。そして、第4が貸間に該当し、これが全部で3383あり、その85%は従業員なしに女主人ひとりで切り盛りしている。⁸⁸⁾ このように、ペテルブルグの大掛かりな店と酒屋はロシア人がおさえているが、中小の店と貸間業には非ロシア人がかなり進出しており、おそらくは日常生活でそれらが非ロシア人の需要に応じていたのではないかと想像されるのである。⁸⁹⁾ すでに触れたように、この稼業に多いのがヤロスラヴリ県からの出稼ぎであり、ペテルブルグでは彼らがほとんどを担当している。ここでは少しばかりではあるが、読み書きが求められるから、農村学校などでそうした準備をしてくるのである。この稼業に愛着と自負心を抱

いている彼らに言わせれば、これをやめて工場労働へ移るのは落ち目になることを意味し、出稼ぎ新参者ほど工場へ入ることになるのである。⁹⁰⁾ このように、明らかに人々の間に工場労働は卑しいものとする感覚が有ったことが窺い知れるのである。

さて、その工場労働者にとり、飲酒は格段の意味合いをもった。労働者の世界では飲酒が付き物であった。普通、痛飲するのは土曜日(ないし給料日)の夜である。勤務後、労働者たちはまず、公衆浴場へ行き、そのあとゆっくりと飲み始める。そして、結果的にいわゆる「ブルー・マンデー」、ロシア語では ponedel'nichan'e になることが多い。⁹¹⁾ 労働者は決して一人では飲まない。彼らの間で、飲むことは決定的に集団的かつ社会的な行為である。同じボトルから飲む、あるいは奢るといった日常的行為が彼らの社会的諸関係を決定する重大要因である。もし、工場の中で隠れて飲むことになれば(工場外で飲酒するのが通例である)、月1回ないし2回の給料日であることが多い。それも土曜に重なれば、確実に飲み、時に日曜と月曜の3日間飲み続けて酔いつぶれることが多い。給料日に賃金が半ば自動的に酒代に変わってしまうことを何とかして回避させようと、労働者の妻たちは工場の門で夫を待ち構えることが常態化していた。もっとも、労働者の中には妻帯者は少ないから(妻を農村に残す場合も多い)、そうした邪魔などなしに、酒の誘惑に身を委ねることができたのである。⁹²⁾

ふつう、酒を飲まない者(あるいは社会通念的に飲まないと思なされている者)、つまり、婦女子と「労働者=インテリ」(この人間類型については後段でさらに触れるが、この点で彼らが一般労働者とは区別される存在であったことには注意されたい)は労働者としての十全な資格を認められない。これは「飲む・飲まない」の二分論であり、一般労働者は「飲む世界」にあり、「労働者=インテリ」などは「素面の世界」にあるとみなす「常識的な」対照性が特徴的である。実際の人間関係にあってはこれほどすっきりと分けられるわけではないが、両者の間には飲酒を挟んで相互に「向こう側」を意識したであろうことは想像できるのである。⁹³⁾ このように、酒と居酒屋は都市社会史的に重要な位置にあったことをまず確認しよう。

労働者が飲酒するのは工場敷地内よりも外部の居酒屋がふつうであるから、彼らの社交の場は自然、町へと広がっていたとみなさなくてはならない。昼食時に外へ出て飲んでくる習慣もある(これは革命前後でも変わらない)ほどに、全体としては社会的結合の場として工場の位置は小さくなる方向にあった。⁹⁴⁾ それ故に、ロシア工場労働者の社会史を考察しようとする際には、どうしても彼らが生活をした街を取り上げなくてはならないのである。

さて、労働者向きの典型的な居酒屋は2階立てで、1階には台所、便所などがあり、2階が基幹的な食堂であり、大体、ビリヤード室もついていた。2階ではギャンブルや時に売春まで行われた。⁹⁵⁾ 毎日、あるいは給料日などの特定の日に行きつけの居酒屋で同じ仲間たちと飲むのである。そこは情報交換の場であり、特に男の娯楽にとり死活的な中心でもあった。ふつう、飲まない者(女やインテリたち)はここから除外されたが(したがって、居酒屋に女がいることは特別な意味を持つのである)、それは別に特殊ロシア的なことではない。特に小さな食堂などを選んで、内緒の話や非合法文献の受け渡しなどがなされたであろうことを想像すれば、居酒屋は彼らにとり肝要な政治システムですらあったといえるであろう。⁹⁶⁾ 例えば、すでに言及した1872年のクレンゴリム綿工場争議では、戦闘的になった織工たちはいつも集う居酒屋で酒を囲んで行動計画を立て、かなり酔った状態で運動に参加したことが判明している。彼らの一部はそれこそ「酔った勢いで」工場当局宛ての請願書に署名したのである。⁹⁷⁾

人の移動が飲酒を伴ったことも確かである。周辺の村から人びとが流入してくる夏季に飲酒の新たなピークが来る。新米の労働者にとりこれから同僚となるものたちのために酒を購入するのはむしろ義務的な勤めであり、それは「プリヴァーリナヤ (prival'naia)」(接岸の意)、「ヴスプリスク (vsprysk)」(祝宴の意、本来は注射の意)、「マガルイチ (magarych)」(宴会の意、賄賂、袖の下の意もあり)などと呼ばれた。これは一種の通過儀礼に相当するであろうが、新参者にとりここで支出を強いられる2〜3ルーブリは決して安いものではない。しかし、「自覚的な」部分がそれに反対して、金のより有効な使用を訴えたとしても、この局面では何の説得力も持たないであろう。シャボワロフは1884年、13歳で鉄道工場へ見習いに入ったのだが、そこでの労働者たちの飲酒についてこう書いている。吉凶、いずれの場合でも、労働者たちは酒を飲んだ。工場で礼拝が行われた日には特に飲んだ。そこには、アル中が一杯いた。[こうした環境も大いに手伝って]「私は粗野な人間になり、怠け者になり、もはや本も読まないで、タバコや酒の味も知るようになり、醜悪この上ない生粋のロシアの言葉づかいで罵ることを覚えたのである。」⁹⁸⁾

村では飲酒は祝日などに限定されたが、都市では毎日でも可能であった。特定の工場に入れば、信用買いできるヴォトカを置く居酒屋が必ずその周辺にあった。酒場は労働者階級の墮落のシンボルであったかもしれないが、しかし、同時にそこは「教育ある労働者 (obrazovannye rabochie)」が新聞を読む場でもあった。人との新しい出会いをとまなう飲酒は新米にとっても様々に大変に刺激的であったと思われるのである。⁹⁹⁾

1870年代初めのペテルブルグにおける労働者と学生との出会いの場は多くの場合が居酒屋であった。学生たちは労働者を工作しようとして、労働者風の服装をして工場付近の居酒屋に出入りしてその機会を待ったのである。居酒屋での喧騒はむしろ「危険な話」をするためには好都合であったし、酒が新しい人間関係をつくり上げるための有力な手段であることを彼らは良く知っていた。場合によっては、酒につられて学生に近づこうとする労働者もいたであろう。1873年春に葉菸工場の新しい施設がヴァシリエフスキー島にも開設されるとヴィボルク区などからそこに居を移す労働者活動家（S・ヴォールコフ [Volkov], V・オブノルスキー [Obnorskii], D・スミルノフ [Smirnov]）といったこの時期の労働運動で中心的な人たちが、彼らについては後述する）もいて、すぐに新しいサークルができた。彼らの集合場所は通称「風見鶏 (Petushok)」と呼ばれた居酒屋であった。ここは雰囲気的には労働者クラブであって、ビリヤード室があってそこで政治的な話が行われた。さらに、より慎重を期す必要があると考えられる場合には、ヴォールコフやスミルノフらは階上の部屋に集まって、会議をしたのである。そのスミルノフの回想記によれば、1872年か73年の秋に、そこで、同工場の工具製作所の労働者30人ほどが集まり、もはや学生に頼らずに、自己啓発、図書館と相互扶助基金の運営をやることを決めたのであった。¹⁰⁰⁾ 彼自身はこれらはロシア最初の労働者のためではなく労働者による政治組織であったというのであるが、それはともかく、ここではこうした志向性をもつ労働者たちがペテルブルグにいて、かれらが居酒屋をよく活用した事実をみればよいのである。このように労働者たちは居酒屋でその社交性を発揮したのである。

3) 娯楽

余暇の過ごし方のいわば代表格は娯楽であろう。近代ロシアの都市（それも大都会）で代表的な娯楽といってよいのは、野外遊楽（グリュエニエ）である。標準的な概説書は、都市文化は人民の休日を野外遊楽に変えた、と書くほどである。¹⁰¹⁾ ペテルブルグの休日で市民にとり代表的な娯楽であった野外遊楽は、その最大規模のものは四旬大斎前週 (maslenitsa あるいは maslenaia) と復活大祭 (paskha あるいは paskhal'naia) の週に行われた。都心部の広場がレジャーと気晴らしの場になった。そこには芝居小屋 (balagan) などが林立した。そもそもペテルブルグでは、18世紀以来、野外遊楽は氷結したネヴァ川や街角で行われたのであったが、広場に遊戯場所がつくられるようになり、やがて、海軍省前 (Admiralteiskaia) 広場がその中心となって、そこに見世物小屋やメリーゴーランド、人形芝居などが集中的にかけられたのである。¹⁰²⁾ ペテルブルグっ子たちにとり同時にここは出会いの場所であり、風聞や噂

にはじまり各種情報の交換がなされたのである。19世紀中ごろまでに劇のような見世物が非常に盛んになり、芝居小屋めぐりをする野外遊楽の古典的なタイプが成立した。¹⁰³⁾ つまり、それが野外遊楽のいわば顔になったのである。芝居小屋の所有者は最初は外国人が基本であったが、1860年代からロシア人がそれにとり変わるようになった。1884年には興行用の芝居小屋の大きさに関する新しい規則が制定され、長さ25サージュン（1サージュンは約2.1メートル）、横8サージュンまで、小屋の間は10サージュン以上空けることが定められた。¹⁰⁴⁾ つまり、当局が人民の遊び方にまで介入し始めたということである。さらに、ペテルブルグ市会は1880年2月、下層民の精神を発達させるために「一般向きの劇場 (obshchedostupnyi teatr)」をつくるよう提案した。芝居小屋の性格は徐々に変わる過程をたどった。その「人民劇場」を人民啓蒙のために使う話はすでに1870年代からあった。¹⁰⁵⁾ 当局が野外遊楽を啓蒙の一環とすることを思いつくほどに、世の中は啓蒙の時代であったということでもある。セヴァストポリの戦いを絵にしたパノラマが評判になるほどに、多分に愛国心と民族意識を掻き立てようとするものが流行り、しばらく後の1887年には「我が祖国」と銘打ったパノラマが大評判をとったのである。¹⁰⁶⁾ 1880年代になると、プーシキンなどの「古典もの」もかけられるようになった。¹⁰⁷⁾

ここで人民向けに用意されたドラマなどの催し物はいわばハイ・カルチャーとロー・カルチャーの混合物であった。都市の側が（上から）仕掛けたようとした啓蒙的な意図は伝統的な人民（農村農民）文化をいまだ色濃く帯び続けている労働人民を対象にして文化的には混合し複雑化せざるをえない。¹⁰⁸⁾ こうした混合性は娯楽が啓蒙に絡む局面においては必ず発生したのであろう。それは都市がもたらすものと農村から持ち込まれたものとの衝突といった形をとることもありえたのである。すでに述べたように、ペテルブルグの新参者は、特に出稼ぎ農民の場合、都市周縁の工場地区に集まる傾向があったから、スヴィフトは「工場労働者は都市社会 (obshchestvo) の裏庭に住んでいた」と表現するのである。¹⁰⁹⁾ しかも、彼ら大方は他の社会層とのコンタクトに欠けるのが普通であったから、彼らが農村から持ち込む娯楽形態はそこで維持される傾向が認められた。ロシアの大都会では、拡張しつつある大衆文化において農村と工場の伝統が混ざり合ったのである。シリッセリブルグ街道では農村の祝祭日が引き続き観察された。そこでは都会生活における娯楽と混ざりあうであろう。例えば、人民歌は長い間、口頭でなされる「工場労働者たち (zavodskie)」の娯楽文化であり、それは工場で働く季節労働者（農民）の間にも流行ったりした。村から都会へ出てきた者の気晴らしの伝統的形態のひとつに殴りあい (kulachnye boi)

があり、日曜や祝日に必ず隣の工場との間で起きた。それにはすべての「工場労働者たち（zavodskie）」が参加したのであるから、工場世界において都市的なものと農村的なものが並存しようとしたともいいうるのである。¹¹⁰⁾

休日には労働者はよく休まないと後の仕事に差し支えることを深刻に認識した資本家たちは遅くとも1880年代中ごろから、休日のあり方を統制にかかった。彼らは rational recreations を翻案した razumnye razvlechenie（良識ある気晴し）を組織しだしたのである。そこでは講義ものなどは体を使わず格段の疲労をともなわずに済むから大いに推奨された。つまり、規則正しい生活をさせて労働生産性を高めようというのである。政府は1890年代によくこの動きに合流し、禁酒促進などを後援することになる。因みに、1900年に「ペテルブルグ人民禁酒慈善協会」が開設した「皇帝ニコライ二世人民会館（Narodnyi dom imperatora Nikolaia II）」は食堂、喫茶室、図書館、劇場を備えた全3000席を誇るロシア帝国最大級の文化施設であった。¹¹¹⁾

IV. 工場地区と工場労働者

農奴解放の年の9月に、N・V・シェルグーノフは急進的な詩人ミハイル・ミハイロフとともに後年、有名になる非法的な宣言文『若い世代へ（K molodomu pokoleniiu）』を出した。そこで、彼らは農奴解放がロシアの将来の幸福と不幸を分ける第一歩であるとして、この機会を捉えてロシア人民のなかにいわば内蔵されている自治原理の更なる発展を強く望んだ。彼らによれば、無論、「我が農村共同体は〔そのための〕基本的な組織単位であり」、それに政府が触ることがあつてはならないのであった。そして、「あらゆる身分の若い世代から成り立つ人民党（narodnaia partiia）はロシアの希望である」、「2300万の解放された人民〔農奴〕にたいして、1861年2月19日にヨーロッパのプロレタリアートにつながる広い道が開かれたのである」と述べたのである。¹¹²⁾ こうしたメッセージなどからも窺い知ることができるのだが、農奴解放の結果、幸せな将来へ向かうのか、それとも不幸、つまり、政治的経済的なプロレタリアートに成り果てるのかを決するのはわれわれ自身なのだと思ふほどに、当時の進歩的インテリはいまだ選択のための時間はあると考えていた。上に言う「人民党」は特別に労働者党ではありえないし、シェルグーノフにとり、労働問題は本質的には農民問題と直結し、切り離されることなく、むしろそれに埋没していたと思われる。おそらく、かような認識はこの時代の知識人一般に強固に存在していたと思われる。そして、工場労働者はすべて無筆の農民以外の何ものでもないという抜き差しならぬ先入

観の存在を無視しては、この「科学と文化」の時代における工場労働者と知識人とのあいだの緊張したやり取りが持った意味合いを理解することは困難になるであろう。つまり、そうでなければ、プレハーノフが「知的な」労働者に会ったと興奮してわざわざ書き残すような事態は起きなかったであろうということである。¹¹³⁾ 明らかに、そこにあったのは農村共同体とそれに対蹠的に配置された近代的プロレタリアートとにたいする思い入れをともなう「理論武装」によって飾り立てられた典型的な過大評価であった。無論、それらのいずれをもってしても、歴史叙述に代えることはとうていできないのである。

1. 工業化と工場地区

改革派陸相として兵制改革に精を出したD・A・ミリューチンは兵器調達を海外に依存することを決して好ましく思わず、その依存度合いを引き下げて出来るだけ自給する道を探った。そのために彼は鉄鋼はすべて国内生産すべきであることを強調した。実際の所、1866年の普墺戦争のあと、プロシャ軍のあり方に大いに刺激を受けたロシア政府及び軍部は軍事的な自足性にたいする関心と共感を新たにしたのである。さらに、折からの鉄道建設の進展もロシア重工業の発展をうながすところとなった。¹¹⁴⁾ ここでは、関連するロシア工業経済史の展開局面にさらに立ち入る必要はない。この「科学と文化」の時代がその後、本格化した工業化（そして近代化）の端緒に位置したことをひとまず確認すればよいのである。

ここでの問題はそうした工業化が「都市の顔」を変えたことにある。ペテルブルグにおける工場創設は時期的にみると以下のような分布をみせた。¹¹⁵⁾ 1861年以前が137工場、1861～70年が67であったが、つづく1871～80年期に105と増加が始まり、1881～90年には123、そして1891～1900年に209に達した。全体からすれば、比較的に若い工場が多いのだが、本論が主たる対象とする時期は陸続として工場が立ち上がる、経済的にはいわば上向きの時代であった。1862年、ヴィボルグ区にL・ノーベリ（Nobel'）により機械製鋼工場つくられ、翌年、オブホフらにより、オブホフ工場ができた。1868年、ヴィボルグ区にフェニックス機械工場ができ、1873年にはヴァシリエフスキー島に鉄圧延工場が、ナルヴァ区に車輛製造工場がそれぞれ開業し、さらに、1877年、ペテルブルグ区に鉄圧延工場が創設されるといった具合である。¹¹⁶⁾ この間、1867年6月、N・I・プチーロフ（Putilov）は鉄道局との間で国有鉄道用のレールを製造する工場を建設する契約に調印した。ツァーリが認可した法律「ロシアにおけるレール製造を発展させる方策について」が公布されるのはその10年後の76年5月であった。1801年に創業したプチーロフ工場はちょうどこの期間に国

内随一の金属・機械製造工場になるのである。¹¹⁷⁾ 造船・造廠あるいは商業の中心地として、ペテルブルグの経済生活はかなり高度化されたのであるが、それだけに留まらず、繊維、金属の順に発展を重ねたのである。なかでも金属工業が優勢であり（これに続くのが繊維、食糧加工）、造船、機械などにたいする政府からの軍需がその発展に大きな保障を与えた。それに対応して、市内には金属工が急増した。1862年に彼らは周辺部を併せて1万人余りであったが、1881年には3万1400人になった。¹¹⁸⁾ 本論が対象とするのは、このような「金属の時代」でもあったのである。いずれにせよ、こうした仕掛けはそれなりの規模をとめない、都市の風景を変えうるほどのものであったろうから、市民は工場から直感的な衝撃を受けると同時にそれへの関心を日々高めたと考えられる。明らかに、新しい大きな工場の出現は何らかの視覚的な意味合い（visual meanings）をもなったはずであった。

本論が度々、依拠する資料集は市中に出現した工場地帯について凡そ次のように書いている。

年々、オブヴォドヌイ運河沿いに何千人もの労働者を必要とする新しい工場が建てられている（新ネヴァ・マヌファクトゥーラ、ジューコフ工場、ニチャーナヤ・マヌファクトゥーラなど）。そのために周辺は労働人民であふれ、建物は屋根裏といわず地下室まで多くの部屋が労働者たちによって細かく分けられ、住居として塞がれている。その仕切られた角部屋600程に合計すると1万人はいるのではないか。これらの衛生状態は「醜悪の極限（verkh bezobraziia）」をいくものである。かくも住民が密集するので、ここでは工場労働者や御者、そして彼らの子弟の間に非常に伝染病が流行している。アレクサンドル＝ネヴァ区における伝染病の三分の二はこの一帯で起きているのである。水道施設はなく、住民たちは直接、ネヴァ川やオボヴォドヌイ運河の水を利用している。つまり、彼らは「都心部の住人たち（tsentral'nye zhiteli）」が享受している便宜に一切、あずからないでいるのである。¹¹⁹⁾

このように、この観察者は何よりも工場進出に伴って出現した労働者の様相に注意を向け、それを「都心部の住人たち」とは明らかに異なる範疇に入る、いわば新しい「人種」と見なしているかのようである。それは気の毒ではあるが同時に厄介な存在であるとその目に映ったであろう。教育ある都市階級はこの時期によりやく始まった工業化によって必然的にもたらされる現象に巻き込まれる気にはさらさらなれない。1872年、市中に伝染病（天然痘、コレラ）が流行したのだが、それにたいしては、郊外から（つまり、

工場の方から）広まってきたとする風聞が立ったほどであるから、¹²⁰⁾ 明らかに、「都心部の住人たち」一般は新参者に近づきたくはなかったであろうとさえ考えられるのである。そして何より彼らは警察の取締りの対象とされた。つまり、彼らが引き起こすであろう「無秩序」を恐れて、1881年にはペテルブルグ警察本部長のもとに工場問題臨時委員会（Vremennaia komissiia po fabrichnym delam）が設置されたのである。¹²¹⁾ したがって、どのような意図からにしろそれに近づこうとする人間は例外的な存在であったとみなくてはならないし、また実際にそうみられたであろう。

ここで1860年代の区別の工場と雇用労働者の分布を示すと、表4のようである。

表4 区別工場数(1865年, 1869年)と雇用労働者数(1865年)

区 名	1865年	1869年	1865年
Aleksandro-Nevskaya	73	77	2843
Vasil'yevskaya	58	50	3422
Narvskaya	50	73	4192
Peterburgskaya	38	39	2117
Vyborgskaya	29	26	4040
Moskovskaya	31	41	1530
Spasskaya	22	23	579
Kazanskaya	24	15	255
Rozhdestvenskaya	13	13	2316
Admiralteyskaya	10	5	110
Liteynaya	7	15	301
Kolomenskaya	6	10	999

〔典拠〕 Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 217-8, 233.

この表から明らかなように、ナルヴァ、ヴィボルグ、アレクサンドル＝ネヴァの3区とヴァシリエフスキー島をあわせると全労働者のほぼ3分の2、工場数は6割を占める。これらがペテルブルグの工場地区あるいは労働者地区といつてよいであろうが、これら市周縁部のほかに都心部のスパスカヤ区には労働者密集地帯があったから、その一帯にも工場の影は濃かったのである（89頁に掲載した市区分図を参照されたい）。1890年の市センサスによれば、労働者がその住民の40%を超える街区はスパスカヤ第3（54.3%）、アレクサンドル＝ネヴァ第3（52.1）、同第2（47.5）、そしてナルヴァ第3（47.3）であり、30%以上では、スパスカヤ第4、ヴィボルグ第2、ロジェストヴェンスキー第2、ヴァシリエフスキー第2、モスクワ第3であった。¹²²⁾

2. 工場地区の生活

この時期、工場地区における生活で解決を迫られた最大級の課題は住宅問題であった。ペテルブルグはネヴァ河畔の沼沢地を埋め立てて建設されたから、良好な住宅地は限られていた。都心部の快適な宅地は行政に従事などする貴

族ら少数者が独占しており、家賃は非常に高額であった。人口増加はなかば自動的に住宅問題をこの都市にも発生させ、市内各地に過密地帯が出現した。すでに触れたように、悪名高きスバスク区第3街区では、1869年、1 km²あたり実に7万人が密集していた。労働人民も増えたから、彼らの住宅が問題になるのは自然な順序であった。すでに述べたように、彼らは職住近接を図る傾向にあり、工場周辺に蟄集したことが問題をより深刻化させた。ペテルブルグ工場主たちは、モスクワ地方の場合とは大いに異なって、自らが労働者宿舎を建設するような習慣は希薄であったから、労働者たちは独自に宿舎を手当てしなくてはならなかった。ペテルブルグではいわゆる「食費の主人もち(khoziaiskie kharchi)」は未発達であり、工場食堂も同様であった。例えば、バルト工場では昼食を全体のわずか1割ほどの労働者に提供しただけであった。¹²³⁾

工場から遠くない地点に労働者向けの宿舎建築が無秩序に開始された。全体からみると、市の北方側に工場と労働者向き住宅が開発されたのは、そこが商人（これが身分的には資本家であることが多い）などが地主であったことが大きく作用したのである。さらに一帯はネヴァ川沿いで物資の流通に便利であったことも重要な要因である。因みに南部の未開発地は市当局、皇室、正教会などが所有しており、工場建設にはあまり向いていないと考えられたが、それでも工場の建設は進んだ。¹²⁴⁾

居住の仕方では労働者は二分された。つまり、私的に住居を賃貸する部分と工場付設の寄宿舎に住むものとである。小論が多くを依拠する資料集もこの論点を展開している。

前者の賃貸組は生活費がよりかかって、経済状態は後者より悪いのが一般的である。彼らは貸間でさえ得た賃金から少なくとも3ルーブリは払わなくてはならず、それが悪くても部屋になれば5から8ルーブリに跳ね上がったのである。しかし、ここでは自由があり、相部屋の同僚などに誘われて最初は余り気乗りしないままに居酒屋などへ「お茶を少し飲み」(popit' chaiku)」行くのである。そこにはビリヤードなどの娯楽もあるものだから、段々とそうすることが楽しみになる。そうなれば、アル中は目と鼻の先なのである。労働者たちの気晴らしのために、マールイ大通りにはかなりの数の居酒屋などがあり、歩道を行き来する売春婦たちもいる。これらは彼らにとり大きな誘惑である。特に、給料日には工場の門まで労働者の妻たちが出向いてきて、給料が良からぬ方向へ行くことを事前に阻止しようとさえする光景が見られるのである。¹²⁵⁾

このように、大半のペテルブルグ工場労働者は悪質な住

環境といわば引き換えにして自由をえていたとさえ考えられる。例のスバスカヤ区第3街区にやってきた労働者は全部で504の貸間(uglovyie kvartiry)に入ったのだが、それは第1街区には存在せずに、第2街区で5つの建物にある10住居(kvartira)に142人、第3街区で50の建物にある458住居に9545人、第4街区では11の建物の36住居に671人が住んでいた。合計すると、504の住居に(残念のことに、そこにある部屋[komnata]数は不明である)1万358人であるから、1住居当たり21人である(この資料集は住居形態について、さらに劣悪である、部屋の一部を又貸するkoika〔直訳すれば「寝台」であるが、寝るだけの広さを貸すのである〕に関して言及はない)。彼らは極端に狭い住居にはただ「寝に帰る」生活をしていただであらうから、むしろ、そのために彼らの行動範囲は広まることは大いにありえたのである。同上第3街区の場合、労働者たちの主たる「溜り場」として、アブラクシン小路(サドーヴァヤ通りからフォンタンカ運河まで)、ムチノイ小路(グリボエドフ運河からサドーヴァヤ通りまで)、フォンカンカ河岸通りおよびセンナヤ広場周辺の通りが上げられている。¹²⁶⁾ 仕事明けの時刻に、三々五々、労働者たちがこれらに出てきたのであろう。

一方、工場付設の寄宿舎に住むものたちは少し高い賃金を得ており(月に16から28ルーブリ)、前者に比して「良い暮らし」をしているが、同時に彼らは工場当局から絶えず監視されていて、真に自由な時間はないに等しいといわれた。少数の工場では労働者は付属施設でアルテリによって生活しており、その状態は概して良好であった。彼らの宿舎はふつう、兵営のように照明、暖房、換気などは十分に配慮されていた。¹²⁷⁾

『ブロックガウス=エフロン百科事典』によれば、少し時代が下がった19世紀末に、ペテルブルグでは平均すると1住居は4.5の部屋から成り立ち、うち3が台所やトイレではなしに寝起きを使う部屋(こうした部屋をchistyeという)であった。1890年センサスでは、平均して年間に1住居代は426ルーブリ、台所と玄関がついた部屋は79ルーブリである。これらの数字は1881年と比べると低下しているが、1890年からは上昇した。¹²⁸⁾ 平均的な労働者は、無論、1住居を借りることはしない(できない)。彼らはここでいう部屋単位で賃貸した。中でも安価であったのは地下室の借用であったが、そこはすでに言及した通り、ネヴァ川氾濫の影響を最も受けて一ヶ月も水につかることは珍しくなく、伝染病が発生するなど最悪の住環境であった。部屋代は区により大きく上下したが、全体傾向でいえば、都心を離れ周縁部へ行くほど低下した。一部屋代は、1880年代、中心部のアドミラルテイスカヤ区で130~300、カザン区、リテイナヤ区は102~217、スバスク区は90~266、ナルヴァ区が65~144といったところであった(いずれも年額、ルー

ブリ)。それでも、最低ランクのスパスカヤ区で、1860年代、2部屋からなるアパートは家賃が月に9～15ルーブリであったものが、それが90年代には25～36ルーブリへ上昇した。¹²⁹⁾ 世紀転換期になっても、ペテルブルグではベルリン、ヴィーン、パリなどより1アパートに2倍もの人間が入っていたのである。¹³⁰⁾ ペテルブルグが抱えたかような住宅問題にたいして、有志が無料宿泊施設をつくったり、慈善団体が施しを考えるといったこともあったが、そうした善意は自ずから限られたものでしかなく、政府ないし市といった公的機関の対応は全て後手に回ったのである。

次の表は、1869年における一賃貸部屋あたりの区別居住者数を示している。

表5 区別賃貸部屋あたり居住者数（1869年）

区 名	地下室	1 階	3 階	5階およびそれ以上
Admiralteyskaya	5.0	3.6	3.4	5.2
Kazanskaya	5.0	4.9	3.7	4.1
Spasskaya	5.8	5.5	8.6	6.1
Kolomenskaya	5.5	4.7	8.9	3.2
Narvskaya	6.0	6.4	6.2	5.2
Moskovskaya	6.5	6.1	5.2	6.5
Aleksandro-Nevskaya	9.4	7.4	5.8	6.3
Rozhdestvenskaya	5.8	6.2	5.9	5.1
Liteynaya	5.1	4.3	4.5	4.5
Vasil'yevskaya	4.7	4.8	4.0	4.2
Peterburgskaya	4.2	4.0	3.8	2.5
Vyborgskaya	8.2	5.4	10.9	3.0

〔典拠〕 Bater, *St Petersburg*, 174.

労働者たちはアルテリのような農村的な結合体を活用することなどを通して、いわば自衛的にこうした困難な事態に対処しようとした。すでに再三触れたように、同郷人たちが形成することが多いアルテリは都会暮らしをする農民の助け合い（互助会）的な組織であった。時間の経過とともに、これはペテルブルグの街からは消えていく運命にあったことが指摘される（1860年代末までにそうしたものは大変に少なくなり、〔それにしたがって〕公衆道徳の水準は目に見えて低下したといった説がある）ことがあるが、¹³¹⁾ その一方で、例えば、『ブロックハウス＝エフロン百科事典』などは、アルテリ部屋(artel'nye pomeshcheniia)は1897年1月843、98年1月1108、99年1月1256と増加したというのである。¹³²⁾ さらに、本論ですでに工場付設の労働者宿舎がアルテリで運営されていることも紹介した。これらを見るだけでも、その確固たる存在を無視することはできないのである。当該資料集は、ナルヴァ区だけで268のアルテリ部屋があると指摘し、それらを次の二つのカテゴリーに分類している。共通の住居をもち、各構成員が個々に家主に家賃として月に1ルーブリを支払うアルテリとその住居が請負人により賃借されているもののふたつである。後者はさらに家主と

の関係で（賭いの度合いで）3種に分けられ、それぞれどのような職種が多いかを示しているが、細部に渡りすぎるのでここでは紹介を省略する。¹³³⁾ そこでは、カザン区におけるアルテリの事例として次のような記述がある。

そこのヴォトカ製造工場の労働者はアルテリで暮らし、家主の部屋だけを利用している。すべてのアルテリは自分たちに共通する食卓を備え、自腹を切って賄い婦を雇っている。朝、9時に彼らは茶を飲み、パンを食べる。2時にシチーないしスープとカーシャで食事する。夜9時に同じような夕食をする。日に2度ヴォトカを小さなグラスで百分の一ヴェドロ（1ヴェドロは約12.3リットル）ずつ貰っている。¹³⁴⁾

アルテリには政府が承認した規約に則った自立したものとそうでないものとがあった（これは分類のひとつ）。家具運搬人たちのアルテリは自立したものの事例であり、それは30人から成り、各自が大枚300ルーブリの出資金を出し、事務室、台所、住居4室（13人が生活する）からなる。ここに住まない17人は自由に部屋を借り、家族持ち以外は料理店で食事をしている。概して、彼らの生活環境は良好である。非自立的なアルテリは7つを数えるが、うち6つは行政機構に、1つは経営者にそれぞれ依存している。23人の掃除婦（夫）のアルテリは警察署長（gorodskoi komissar）によって統制されている。市側から月に55ルーブリの部屋および薪代が出ている。労働者は月に13から15ルーブリの食費を出し、彼らの一人が食事をつくるなどしているが、部屋は一人当たりわずかに1立方サージェンの広さしかなく、極度に汚らしい（neriashlivo）状態にある。¹³⁵⁾ もうひとつ、アレクサンドル＝ネヴァ区のアルテリは一時的なものと恒常的なそれとに二分されている（これも分類のひとつ）。前者は大工、石工などのアルテリであり、夏の初めにできて、10月の終わりにはなくなるものである。つまり、首都の修繕の時期がはじまる前にやってくる職人や労働者たちがつくるもので、50ほどあり、中には300人という大きなものもあるが、平均するとひとつのアルテリは12人ないし15人から80人ほどで成り立っているのである。後者は御者、屋根葺き職人や工場労働者(rabochie pri zavodakh)などのそれが該当する。¹³⁶⁾ これらの事例からうかがえるのは、この都会でたとえ一時的にであろうと生活しようとした労働人民たちが暮らしに様々な工夫を凝らしていた様子である。ここにあるアルテリの活用形態は農村共同体における生活様式を想像させるものであるかもしれないが、それはまずは公的制度的に保証の限りではなかった都市生活における便宜をはかるためのものであった。

さて、すでに引用したようにH・W・ウィリアムズという人が革命前に『ロシア人のロシア (Russia of the Russians)』という好著を出しているが、その中で彼はこの首都労働者の社会的相貌に関して次のような記事を書いている。少し長くなるが、その触りの部分を引用したい。

ここのほとんどの労働者は農民の出である。毎年毎年、彼らはリャザン、オリョール、ヤロスラヴリ、コストロマー、トヴェーリ、ノヴゴロド、ベルミなどの県から一団となって、鈍行の三等客車に乗るか、あるいは歩いて歩くかしてやってくる。そして、工場労働、辻馬車、門番、床磨き、使い走りなどの職にありつくのだ。女の多くは召使いになる。彼らは貧しいから、精々よくても大きな建物の裏庭にある[日が当たらない]暗くて狭い住居に住むか、郊外にある今にも崩れそうな木造の建物に入るかするぐらいなのだが、悪くすると、1ルーブリ50から2ルーブリも支払って、隅 (corners) [ugol' を訳している]を借りて、すし詰めの中で黒パンとお茶だけで生活することになる。どう見ても、彼らは農民的容貌そのままを保っており、同郷人 (zemliak) と仲良くし、日曜の朝には早くから固まって教会へ行くのだ。そして、天気具合をみながら、「もう草を刈る時だ」とか、「取り入れの頃じゃないか」などと思ったりする。彼らは百姓言葉と農民的な作法を強固に維持しているのだ。当然なことに、彼らは都市では飲む機会が多い。特に日曜日と祝日には千鳥足の彼らと各所で出会うことになる。だが、街はそこに住む者を溶解して平準化する作用を彼らにも及ぼそうとしている。実際に、彼らは居酒屋 [traktirs という言い方] に群れて、それほど強くはない酒を酌み交わしながら、何か大きな出来事の衝撃ですっかり混乱してしまったり、日々の労働の中でしっかりと焼き付いた印象の数々を交換したりするのだ。そして、彼らは段々と都会の安っぽい娯楽に染っていく。「人民の家」とか「人民宮殿」などに行って、非常に安い入場料でその劇やオペラを観賞し、夏の夜や日曜や祝日には公園を野外遊樂する。ペテルブルグ区のペトロフスキー公園ではアベックで歩き、ヒマワリの種を食べ、軍楽隊の音楽を聴き、野外劇場のメロドラマを立見したりする。また、市内各所にあるこれまた安い映画館で血も凍るような悲劇や世界七不思議ものを観たりする。安価な新聞や本が出回るようになり、夜学や人民向けの講義もあり、子供は学校へ通って真の都市民に成長する。そして、あらゆる種類の新しい知識がこの忙しい、可動的で、機敏な、そして休むことなしに話好きな群集の間に急速に広まることになる。彼らはクロンシタットからやって来た神父の説教に熱狂するかと思えば、ややこしい問題や無謀な

期待や苦い失望などから政治的に高揚したりする。そうすると、教会の平司祭がやたら自制するように説教する。すると、何百人かはその弛んだ生活から足を洗い、清い生活をするようになる。だが、民衆のなかを悲観主義の波が通りすぎ、労働人民の自殺が報じられる。男は運河に飛び込み、女は酢酸を飲む。これは農村生活の隣人関係が急速に変容して大都市のそれになる過程で起きることであるが、そうなると混乱し不確かさから、多くの人間が再び悪行に染まり、都市的な俗化は避けられないことになるのである。¹³⁷⁾

この引用には本論ですでに言及した事柄を含め多くの事項がコンパクトにまとめられている。今は、私はここでさらにこれらに逐一、解説を加えようとは思わないが、この著者が殆ど結論的な言い方をもってする、農民たちが段々と「都市的な俗化」に染まるということに関連して、もう一つだけ引用を重ねることを許されたい。それはすでに取り上げているシャボワロフの回想の一節である。彼は1871年、ウクライナにペテルブルグ＝ワルシャワ鉄道従業員の家に生まれたのだが、ペテルブルグの子供時代に「当時、労働者の間で流行していた、いわゆる「ドン百姓」に対する批判的侮蔑的な態度を身に付けた」と自ら告白するような人である。彼の観察によれば、鉄道関係者のうち一番遅れていたのは稼ぎに出てきた火夫と未熟練労働者たちであった。彼らは「最低限の欲をもち、極度の抵抗力を備えた人間であった」が、そうした彼らも金を貯めると、都会風の服装一揃いと、長いピカピカする刺繍が施された長靴と、帯紐付きの真紅のシャツと、「イタリア物の」ハーモニカとを買って村へ帰っていったのである。その一方で、「錠前工、機関手やその助手」ら「労働貴族」の衣服はドイツ人やフィン人と同じようであり、「彼らは知らず知らずそれを真似ていたのである。」¹³⁸⁾ このエピソードは鉄道労働者の間に普遍的にみられた「都市的な俗化」の事例をやはりよく示すであろう。

すでに触れたようにペテルブルグが金属工業を発展させたことから、その工場労働者の賃金は相対的に高い水準にあった。当地の主任工場監督官 Ia・T・ミハイロフスキーの1890年における計算に拠れば、全国平均の労働者の年間賃金は187ルーブリ60カペイカであったが¹³⁹⁾ (年間288労働日、正味12時間労働で計算している。これは1880年代中ごろの全国平均の年間労働日数に等しい。なお、1900年のパリ万博で紹介された数字では、ペテルブルグ県が290日から295日と多く、モスクワなどの中央工業地帯は280日から285日である。¹³⁹⁾ これらから想像されるのは、後者が農村部との繋がりがより強かったこと〔夏季における労働者の農作業への離脱〕、前者により「近代的な」経営主体が存在したことなどである)、ペテルブルグ県は232ルー

ブリと高く、中央工業地帯の167ルーブリを大きく引き離していた。また、1901年で見ると、工場監督管区別ではペテルブルグは273ルーブリと全国一位で、モスクワの175ルーブリをはるかに超えていた。こうしたペテルブルグの「高賃金」を支えた一因は金属加工業が高水準の賃金を誇っていたことである。それは、1879年で全体平均で256ルーブリ、1900年で338ルーブリであった。個別工場では、1884～1886年で、「プチャーロフ」で年間380、「ネヴァ」で357、「イジョーラ」で348、「ペテルブルグ金属」で367ルーブリとこれら大企業ではますます「高賃金」であった。¹⁴⁰⁾ しかしながら、この頃、金属加工業内部においては日給で有資格労働者の2ルーブリから雑役工の30カペイカまでかなりの開きがあった。¹⁴¹⁾

農民のペテルブルグ労働への関与を遥かに中途半端なものにするのに力があつたのは農村共同体の拘束力だけではなかった。首都での生活はなによりも現金を必要とし、高い生活費と住居の劣悪さからして到底、家族を呼ぶ気持ちにはなれなかったであろう。この首都居住者の家族関係を瞥見すると、何よりも特徴的であったのは、すでに言及したように、既婚者が少ないということである。例えば、労働者の中で一人か家族と離れて住む男子はペテルブルグで86.5%、帝国平均で58.4%という世紀末の数字がある。それも辻馬車の御者のようないわゆる非有資格的な業種で結婚率は高く、「典型的な都会人 (tipichnye gorozhane)」といわれた部門、例えば、印刷、金属などでその率が低い傾向があつた。つまり、業種が出稼ぎ的であるかあるいは都市的であるかがこの際の分類基準である。世紀末で、500ルーブリから出来れば600ルーブリの年収がないとペテルブルグでは子供を持ち養育することは困難であり、その一方、農村では家族を遥かに安く養えるといわれたのである。¹⁴²⁾ したがって、ゼルニクがいうように、当時はルーブリの使い出があつたとしても、¹⁴³⁾ いかさまそれは相対的なことであつて、絶対的な不足は如何ともしがたかつたのであり、少なくとも経済的に保障されて家庭生活を営める労働者は極めて限られた存在でしかなかった。

3. 「ザヴォツキエ」の出現

1) 労働者の回想記

V・G・ゲラシーモフはほとんど最初に急進的労働者として回想を執筆した人である。それが刊行されたのは1906年であるから、1892年に出たプレハーノフの有名な労働者(運動)に関わる回想記の方がそれよりかなり前であるのだが、彼は労働者であつたことはない。普通、労働者は自らの社会的相貌に関して進んで記録を残そうとはしない。たとえ労働者が回想を残すことがあつたとしても、それは何らかの外部事情による場合が多い。このことは特にロシ

ア史に関してあてはまることかもしれない。ことのほかソヴィエト史は比類なき事例を提供するであろう。革命後にソヴィエト当局が行ったキャンペーンの中に定まった書式によって労働者回想記を生み出そうとするものであつた。例えば、後に触れる1870年代ペテルブルグの代表的労働運動家であるD・N・スミルノフの回想は彼に向けられた質問に書面で回答する形 (pis'mennye otvety) を採っている。¹⁴⁴⁾ 1920年に組織された「十月革命史および共産党史に関わる資料の収集と研究委員会〔略称「イストパルト」〕」は、V・I・ネフスキーが主導して1922年初頭から革命派労働者の自伝資料の収集に取り掛かり、そのために各地で『回想の夕べ』を開催した。さらに、作家ゴーリキーは『工場史叢書』の刊行に多大な精力を使った。このシリーズの工場史は労働者の革命過程への主体的参加を強調する編集方針の下に置かれた。¹⁴⁵⁾ これらの試みはいずれも何らかの政治的目標があつてのことであつたが、やがて明らかになったことは「プチブルの幻想から革命運動が解放される過程の不可避性」と「革命的マルクス主義と労働運動の融合」を「論証」するためにそれら回想記が活用される傾向であつた。これら括弧で括った文句はかつてソ連史学界においてこの時期の労働運動史研究で指導的立場にあつたコロリチュークが使用したものである。¹⁴⁶⁾ この点で、革命以前に刊行されたゲラシーモフの回想記は微妙な位置にあるのだが、ソヴィエト期に何回か重版されたのは、コロリチュークがいう「論証」にとり便利な面があつたことを想像させるのである。¹⁴⁷⁾ さらに言えば、自伝を執筆する労働者の側には意識的に神話を生み出そうとするいわば「超人」志向が認められることも多いのである。「労働者＝作家」などと呼ばれた彼らが多用した宗教的なイメージがポリシェヴィズムの宗教的性格とよく照応していることに注意を喚起したのがスタインベルグであつた。¹⁴⁸⁾

さて、ゲラシーモフの回想に注目した労働史家ゼルニクはそれをよく読んで解説するだけでなく、全文を英訳までしている。彼はそれを「急進的ないしは革命的な労働者のロシア的な文化的プロトタイプ」であるという。¹⁴⁹⁾ 確かに、従来は、史家の多くはゲールツェンやラヴロフのような代表的な(インテリ)革命家たちを個別に取り上げる一方で、労働大衆を一絡げにして群集として扱う傾向にあつたのだから、ゲラシーモフのようないわば「中間的な(インテリ革命家と群集との中間に位置する)」人物を個々に丁寧に取り上げるようなことはなかつた。この際、ゼルニクはおおよそ次のような枠組みで考えていると推測される。労働大衆の中からインテリのカテゴリーに入ろうとしている人間(ゲラシーモフ)がロシア史において初めて登場した事実がまず着目される。彼らには共通して何らかの考え、知識、つまりイデアにたいして格段に興味を引かれる性向

があり、また、「書かれた言葉 (the written word)」をことのほか愛する向きが認められる。これらのことは、おそらく、平均的な労働者たちとは異なる側面である。彼らが「労働者インテリゲンツィア (rabochaia intelligentsiia)」あるいは「インテリの労働者 (intelligentnyi rabochii)」と称される所以でもある（後に取り上げる「労働者＝インテリ」などといった用語も同様である）。いずれにせよ、彼らの多くは他の労働者たちとともに農民（身分）を両親にしている。したがって、そうした中から「インテリの労働者」などに変身するについては、各自の社会における活動と経験によるところが大であろうと考えられる。しかしながら、社会生活の諸相と当該労働者との緊張した関係のあり方は千差万別であるゆえ、予断をもってその特徴を理解することはできない。まずは個別的事例を丁寧に読み解き、データを集積する必要がある。

確かに、こうした試行に異を差し挟めないほどに私たちは信頼に足る情報を持ち合わせてはいない。しばらくの間、ここに始められた仕事を尊重しなくてはならないであろう。ここで触れたように「書かれた言葉」を偏愛するような性癖をもつ労働者の事例をこの時期に関して取り上げることがそれほど困難ではないであろう。すでに触れた M・オルローフの場合、彼はとくに「学生的」と仲間内でも評判であった人であるからなおさらであろうが、彼が兄へ書いた手紙の一節に次のような箇所がある。

私はもはや農村労働者ではありえない。無論、農民でもありえない。それは私が彼らを受けないからではなく、私自身がもはや農民でいることは出来ないからだ。〔その理由として、高い税金、不作などは小さいことであり〕主としては勉学 (nauka) への愛情であり、わたしはそれが地上で何よりも好きになったのだ。¹⁵⁰⁾

2) 労働者の区分基準

上の引用で勉学とした「ナウカ」は科学とも学問とも訳せる言葉である。労働者のあいだにかくも勉強好きな人物が登場する時代なのである。何度も繰り返すようであるが、本論はかような人間類型が出現したことをロシア社会史において解釈しようとするものである。オルローフのような人を「ザヴォツキエ (zavodskie)」という範疇で呼ぶことはできるし、歴史的にそうすることがよく行われてきたであろう。彼らは基本的に金属加工などの重工業工場（つまり、ザヴォード [zavod]）に従事する場合が多かったから、その言葉から派生した「ザヴォツキエ」という範疇用語は金属工などと置換されることもふつうなされてきたのであろう。たしかに、オルローフ自身はセミヤンニコフ工場に勤務した労働者（事務所の書記？）であった。しかしな

がら、ここで指摘しなくてはならないのは用語上の分類基準になった背景要因はこのような工場の業種ないしは労働者の職種ではないと考えられることである。むしろ、それは、結果的にそうなったといったほうが正確であろう。

確かに、「ザヴォツキエ」という用語はロシア史にあっては近代に初出した社会的カテゴリーである。『ブロックガウス＝エフロン百科事典』に「工場 (zavody)」の項目を執筆したのはかの D・メンデレーエフ (Mendeleev) であるが、彼は同じ工場でも fabrika が発生史的に古いとした上で、それは紡績のように原材料を明らかに目に見えるように加工するが、zavod (zavody は複数形) はそれを金属、ガラス、セメントなどのように人間の目には見えない化学変化をさせるとして物質の変容度合いで両者を区分している。この分類基準はまさしく化学的であって、理論的には用語の適応範囲をすこぶる拡張しうるものである。さらにメンデレーエフは化学知識は現象面で新世界を切り開く力があり、それ故に zavod は新しい価値を生み出しているのだとも力説している。彼の叙述には zavodskie は出てこないが、化学が新世界を切り開く場として zavod を捉えていることから類推すれば、その延長線上に従来の勤労農民とは質的に相違する労働主体が出現するであろうことを予想し、期待していると読めないこともない。¹⁵¹⁾ このように見れば、zavod、そして zavodskie という用語には新しい近代的な（あるいは革命的な）価値観が込められており、それは文化（水準）の差別的分類基準に沿った用語であることは否定しがたい。つまり、本論の主題に照らしていえば、この用語法では「科学と文化」の時代における「文化性 (kul'turnost')」（教養、さらには敢えて民度とも訳しうる言葉であろう）がなによりも問題とされていたと考えられる。この論点に関連して、M・R・ポポフ (Popov) は1870年代初めにペテルブルグで起きたトロントン工場爆発事故に関わって次のような興味深い記述を残している。

労働者のなかでもこの事故に対する抗議に積極的であったのはファブリーチヌイエ・タイプの人たちであった。この点で、彼らはザヴォツキエよりも期待が持てた。前者は余り文化的ではないのだが、ザヴォツキエよりは信用できた。それにザヴォツキエに多い家族持ち労働者はストライキには共感的ではなかった。ファブリーチヌイエは農村とは切れていないか、切れたとしても最近のことであり、古くからあった農村共同体において獲得した共同体的な感情と倫理 (obshchestvennye chuvstva i etiki) をいまだ失ってはいないのである。彼らは村ないし郷の同郷人 (zemliaki) たちとアルテリに住んでいた。現に、トロントン工場のすべての労働者たちはトヴェーリ県の農民出身なのである。これにたいして、ペテルブ

ルグ市のザヴォツキエは多くが同市と郡市の町人 (meshchanin) の出であり、当該工場に共同体的な感情を持ち込むようなことはしないのである。しかも彼らは階級的な感情といったものをいまだ作りえていない。確かに、ザヴォツキエはファブリーチヌイエよりも文化的であるのだが、彼らは「工場労働者の世界 (zavodskaja sreda)」だけが生み出したものではなく、それは「全般的なロシア文化の産物 (produkt obshchei russkoi kul'tury)」なのである (下線強調＝引用者)。¹⁵²⁾

私はこの区分法に着目したい。つまり、これは、ロシア社会全般を「科学と文化」の一大潮流が初めて覆った時に、労働分野で初めて出現した分類法であったともいえるであろう。したがって、別に金属工でなく繊維工であったとしても一定の条件のもとに当該人物は「ザヴォツキエ」として認知されることもありうるのである。この際、私は同時に表面的には職種別の分類がなされていたことを隠そうとは思わない。例えば、シシコーは次のように書いている。

ザヴォツキエ労働者は……当時、すでにそれ自身の基金 (kassa) と図書館をもち、そのうえインテリからなる革命家たちとはファブリーチヌイエ労働者グループよりはるかに自立した関係を保っている、かなりよく組織されたグループを構成していた。……ザヴォツキエ労働者、つまり、機械工場労働者、組立工 (slesari)、金属旋盤工 (tokari po metallu)、鑄造工 (liteishchiki) などは全般的にファブリーチヌイエよりもはるかに高い地位にあって、彼らのために政治経済、歴史、西欧革命運動などに関する系統的な講義が用意されていたのである。¹⁵³⁾

この議論では彼はザヴォツキエを金属関係労働者として、その知的な水準と関心の高さ、そしてインテリゲンツィアにたいする自立性を強調し、さらに何よりももうひとつのファブリーチヌイエと差別する二分法を採用している。シシコーが指摘するような職種にザヴォツキエが多くいたことから、ザヴォツキエといえはそのような労働者をイメージすることが流通するようになったと考えられるが、当然のことに金属工であれば全員が自動的にザヴォツキエとなる訳ではない。私はペテルブルグという軍需工業都市が有した、科学的文化的雰囲気はこの局面でも考慮することが必要であるという立場から本論を展開しようとしている。つまり、どこか別のところにペテルブルグ以上に重工業に特化したような場所があったとしても、そこでザヴォツキエが自動的に出現する保障は何もなかったであろうという

ことである。「文化的な範疇としてのザヴォツキエ」扱いすることが可能であろう繊維工の例として、以下に P・アレクセーエフ (Alekseev) を取り上げてみたい。

3) アレクセーエフの場合

彼は現代ロシア出版史で著名な『偉人伝シリーズ』にも加えられるほどの有名人であり、「ロシア・プロレタリアートの代表者として、ナロードニキ運動にプロレタリア的な首尾一貫性を持ち込んだ」とする最大級の評価がなされる人である。¹⁵⁴⁾ 彼がかくも有名になったのは、モスクワ地方のナロードニキを裁いたいわゆる『50人裁判』で、1877年3月10日に目を見張るような弁論を法廷で展開したからであろう。¹⁵⁵⁾ 彼は1849年にスモレンスク県の国有地貧農の息子に生まれ、9歳で出稼ぎ織工としてモスクワへ出た。容易に予想されるように、彼に関する資料は決定的に不足しているから、想像するほかないが、おそらく少年時代、彼は定められた織布工場と故郷の間を往復して過ごしたに相違ない。1906年に「人民の意志」出版所から出された伝記は、彼は16歳から17歳で教師の助けなしに独学で読み書きを修得したという。¹⁵⁶⁾ しかし、作家たちがこの頃から彼は読み書きの必要性を痛感していたと書くのは単なる思い込みに過ぎないかもしれない。彼が帰郷する際に、本の行商人になったというのもおそらくは同様の感がする。¹⁵⁷⁾ 彼に関する多くの記述の重大な欠陥は、何故に1872年に彼がペテルブルグに移ったかを説明し得ない点であるが、トロントン工場に入ったのである (これもすでに触れたペテルブルグの「吸引力」の現れである)。これは本論でしばしば登場する工場であるが、念のために言えば、羅紗工場であるから fabrika であって、zavod ではない。工場があったネヴァ区にはチャイコフスキー団の中で労働者工作に最も熱心であったシネグープが居住しており、アレクセーエフのほうから彼の部屋へ向ういて無償の教授を求めたといわれる。¹⁵⁸⁾ 彼はすでに読み書きは出来るから、さらに地理と幾何を習いたいと申し出たといわれる。団ではペロフスカヤやチホミーロフも彼に教えたが、やがて団が解体されると、アレクセーエフはラヴローフ派サークル (後出) に接近して、そこでラサールなどを読んだ。つまり、同派の V・イヴァノフスキー (Ivanovskii) などがモナトナヤ通りに組織したコムーナ (コミュニン) がトロントン工場労働者を工作しようとし、さらに同工場の活動家 I・スミルノフ (Smirnov) (後出) がインテリたちに働きかけて、労働者学校を開き、それにアレクセーエフが参加したのである。¹⁵⁹⁾ そこでは、ロシア語、フランス革命史、ラサールとチエルヌイシェフスキーの政治経済学、算数と物理、ロシア史、文学の6種目が教授された。¹⁶⁰⁾ この時、アレクセーエフはナロードニキの N・ツヴィレーネフ (Tsvilenov)

と出合っている。後者は1873年秋に外科医学アカデミーに入学してから、イヴァノフスキーを通じて彼と近づくようになったのである。¹⁶¹⁾ イヴァノフスキーはその年末にアレクセーエフが『あるフランス農民史』を読んでいたと証言しているから、彼はやはり相当な読書家であったのであろう。¹⁶²⁾

後世の伝記作家がアレクセーエフがモスクワは「ファブリーチヌイエの地域」で〔人的〕構成において〔農民的に〕均質であり、より発達してその多くが他者にたいして傲慢なペテルブルグの「ザヴォツキエ分子」よりも宣伝しやすいと考えていたと想像しながら書く場合、¹⁶³⁾ そのとおりであるならば、アレクセーエフが一般的なザヴォツキエから労働者＝革命家の方向へとさらに一步、転身したことを示している。おそらく、彼がそうした感想を吐露したとしても、工業種目による労働者区分は念頭においてはいたはずである。

1874年10月、アレクセーエフはグルジア出身のナロードニキ、I・S・ジャバダリ (Dzhabadari) の「カフカース人サークル (kruzhok kavkaztsev)」に接近し、彼ら二人は意気投合して年末にモスクワへ移動し労働者への宣伝活動を本格化しようとして『全露社会革命組織』の結成をめざしたが、弾圧されて『50人裁判』にかけられたのである。そのジャバダリはアレクセーエフの印象をこう語っている。——アレクセーエフはペテルブルグのザヴォツキエは余りに自己本位的で自分を労働貴族のように思っており、革命的宣伝を受付はしない。それにたいして、モスクワのファブリーチヌイエは感受性に優れていると考えていたようだ。彼はむしろインテリを軽蔑さえているのではないかと感じた。¹⁶⁴⁾ ここで改めて注意してよいのは、アレクセーエフが問題としたのは、ザヴォツキエとファブリーチヌイエの文化的あるいは社会的位相の対比なのであって、別にそれらの職種別などではない。繰り返すが、もし、職種別が考慮すべき要素に加わるとすれば、それはそうした類型の人がその分野に比較的が多い、少ないといった非本質的な話においてであるはずなのである。

この論点に関連して、次に言及するのも無駄ではあるまい。この時代のロシアでは「プロレタリア」、「労働者階級」といった用語はしばしば貧者、下層民一般をさし、かならずしも工場労働者をさす訳ではなかったし、さらにいえば、労働者階級関係用語はしばしば警察の報告書で病気（伝染病）の主要な犠牲者を指す場合に使われていたということである。¹⁶⁵⁾ 用語法の解釈に現在だから操作可能な「精緻さ」を持ち込むことには慎重でありたいのである。

4) カナトチコフの場合

さらに、もう一人の労働者に触れたい。ゼルニクは、「帝政末期ロシアの都市下層階級の生活について最も豊か

な自伝」としてS・I・カナトチコフ (Kantchikov) のそれを取り上げ、さらに丁寧に英訳するまでして、当時の工場労働者の社会心理の発達過程を跡付けようとしている。モスクワ県の典型的な農家に生まれたカナトチコフの都市労働者としての自己形成期は1890年代であるから、本論が直接対象とする時期とは少しずれるのだが、彼の回想記を通して農村から大都会へ入った多くの労働者が備えていた近代ロシア期に共通する社会的相貌の幾つかの面を観察することはできるであろう。カナトチコフをはじめとしてこの時期に出現した「自覚的な」労働者のあいだで顕著であった、人間関係や読書などを通じた知的な視野の拡大は同時にその社交性 (sociability) を増大させたのであり、こうしたことは全体として世紀転換期ロシア社会が有した「極度の可塑性 (extreme plasticity)」をも暗示しているというのが、ゼルニク自らが英訳に付した、社会論に傾斜した「解説」の結論なのである。¹⁶⁶⁾

カナトチコフは、ペテルブルグで給仕として働き50歳ほどで体を壊して帰郷した、少しでも読み書きが出来た「中農」を父として、1879年にモスクワ県ヴォロコラムスク郡に生まれた。県最西端に位置した同郡ではほとんどの農民は地元小営業に吸収されていたが、そこで働き場を見出せない人たちはやおら遠方への出稼ぎを強いられていた。¹⁶⁷⁾ カナトチコフは9歳で最寄の大村に所在した学校へ通ったが、そこには毎週金曜に司祭がきて宗教教師を務めた。彼は帰宅するとその日に習った、ウシンスキーが子供向けに書いた『母語 (Rodnoe slovo)』を父親の前で朗読した。この父は本好きで、「安い新聞」まで取っていた人であった。こうした家庭環境が彼を文字に向かわせたことは大いにありうるであろう。13歳で学校を終えたが、父は息子をすぐにモスクワへ働きに出すことに躊躇したので、カナトチコフは農作業の手伝いをした。その間に母親が死に、その時、彼は詩篇を大声で読み上げたのである（回想記や解説にはこれ以上の言及はないが、それは司祭への支払いを節約するから、農民が読み書きの実効的な効用のひとつとしていたことである）。¹⁶⁸⁾

1895年春、16歳の時、父親はカナトチコフをモスクワへ連れて行き、グスタフ・リスト機械工場の徒弟にした。これはクレムリンに近く、モスクワ川の右岸に所在し、労働者約800人を擁していた。回想は「大都会モスクワ」の第一印象を率直に語る。まず驚いたのは、店舗の多さ、周囲の冷たさと無関心さ、そして外見の華美さ。これらにカナトチコフは言われがたき恐怖心を抱く。敵の只中にいる感じさえする。孤独を感じ、見捨てられ、誰にも相手されないと思う。「私は典型的な農村の若者の身なりをしていた」から、工場の熟練工たちは「私を見下し、『青二才の田舎カボチャ野郎』などと呼んだ」。彼をとりあえず救ったの

は同郷人たちで構成したアルテリであった。この工場の仕事を用意したのも同郷人であったし、15人ほどが共同で宿舍を借りたのもそうであった。カナトチコフはその中に入り、一緒になって「同じ皿から木のスプーンで」食事したのである。

たまにはその何人かと連れ立って美術館や博物館へも出かけたというが(このような「文化的な」ことは生まれて初めてであろう)、このアルテリは工場以外の時間のすべてが流れる場所であったといえる。そこでは通例、代表的な低俗新聞とされることが多い『モスクワ新聞(Moskovskii Listok)』を購読していたから、カナトチコフは文字通り、文化や文字に取り囲まれてモスクワ生活をスタートしたことになる。¹⁶⁹⁾

工場では、彼は鋳型作成部門で未熟練工の下働きとなったが、やがて指物師作業台へ配置換えになり旋盤を修得する機会をえて、日給は25カペイカから40カペイカへと増額された。一年間働いた時に、彼は「自信が出てきて、私はもはや毎日のことや月並みな道徳には批判的な態度を取るようになった」という。¹⁷⁰⁾ この鋳型作成部門は世上、「貴族的な」部門とみられていたが、確かにそこで働く労働者の多くは「都会的」であり、小奇麗にしている、長靴にかかる長さのズボンを穿いてそのシャツは「ファンタジア」スタイルでズボンに挟み込まれ、ネクタイ代わりに色つきのレースがついたカラーを絞めていた。休日には彼らの何人かは山高帽さえ被ったのである。彼らは髪を「ポーランド型」にしていた。つまり、この一団は見た目にもはっきり分かるように、「洒落者」だったのである。¹⁷¹⁾ カナトチコフが後に知り合うことになるモスクワのズバートフ運動活動家であったM・アフナーセフ(Afanasev)もやはり鋳型製作労働者であったが、かれはいつも小奇麗な服装をして、新聞『ロシア報知(Russkie Vedomosti)』を小脇に抱えていたといわれるのである。¹⁷²⁾ 外見からも他と区別がつく、ロシア社会に初登場したこの「洒落者」集団が労働者の世界に新風を吹き込む可能性を秘めていたのである。

カナトチコフが運動の洗礼を受けたのはそこにおいてであった。当時、モスクワ市セルプホフ区に所在したゴッペル(Gopper)工場労働者は先進的な運動で知られていた。労働者の世界ではその鋳型製作労働者は「学生(student)」と呼ばれていたが、その用語には確実に「革命的」という含意があった。労働者側では「学生」にたいしてそうしたイメージが確立していた。その工場からひとりの鋳型製作労働者がカナトチコフの所属した部門に移ってきて、彼はその人から影響を受けることになった。¹⁷³⁾ 回想記は、その後、「猛烈な」読書などを通した外部からの作用に言及している。彼はハウプトマンの『織工(Die Weber)』(1892年)の露訳(1895年に非法法裡に2種類が出た)やポーラ

ンドのアナルコ・サンジカリストであるE・アブラモフスキ(Abramowski)の『個々の労働者は何を知り、理解する必要があるのか』(1895年、ジュネーブの『ロシア社会民主主義者同盟』が刊行)から強い印象を受けたし、さらにブレハーノフの「革命運動におけるロシア労働者」も読んだという。この時期に「手当たり次第に」関連書をその思想的位相を考えることもなく(実際にはそれを出来ずに)、濫読したことが、カナトチコフを「自覚的な」労働者へと変身させることになった。これは文字がそうした力量を持ちえた「科学と文化」の時代性を確認できる好例である。ここにきて、彼は都会生活の入り口で支援を受けたアルテリを見捨てることで、ようやくその「個」を確立して自立しようとする。それは共同体的秩序観からの離脱をも意味しており、農村から都市へと生活基盤を文字通りに本格的に変換することでもあった。彼が次に「一人の同志とともに」住んだのは個室であり、もはや司祭のもとへ告白に行くことは止め、四旬斎の断食日にも「禁ぜられた食べ物」を口にするようになった。しかし、「休日で故郷に戻ったときに、十字を切る習慣を棄てることはなかった」と正直に言うのであるから、この変身にあたって、正教が格闘すべき要素として大きかったことが、少なくとも文言の上からは、判明するのである。¹⁷⁴⁾

カナトチコフは工場生活が長引くにつれて、それに溶け込んでいくような感覚にとらわれるようになった。そして、眠気を催す農村生活の静かで長閑で怠惰でさえある詩情よりも工場労働の仮借のないきびきびとした雰囲気の方に親しみが湧いてくるようになったと述べる。¹⁷⁵⁾ 工場ではクリスマスと復活祭のときに労働者が大量に帰村して休業になる慣習が維持されていたが、彼はその時に帰郷することも止めてしまう。都市生活の世俗的な楽しみの方により強く引き付けられたからだという。¹⁷⁶⁾ 彼が志したのは、自立した生活をして、火酒で身を持ち崩していない若い金属労働者のような服装をすることであった。¹⁷⁷⁾ したがって、先ず第一にカナトチコフを「変えた」のは都市という舞台空間であり、予測されるような特定の思想などでは決してなかったのである。

モスクワでの工場生活に専心することにしたカナトチコフは世紀末に創業したばかりのムイシチェンスク鉄道車輛工場に就職した。それは市内から北西に20キロ余りのところにあり、1903年時点で労働者1300人を数えた中堅工場であった。彼は工場から歩いて30分ほどの村に部屋を借りたが、その家主は以前にゴッペル工場で働いただけでなく、ストライキも体験した男で、教会には行かず、大衆誌『ニーバ(Niva)』(畑の意)を定期購読していた。さらに、工場では一、二の者が「進歩的な」新聞や「傾向的な」本を購読していることに気付いた(括弧書きはカナトチコフによる)。

しかし、彼らは現実の政治からは距離をとっていた。¹⁷⁸⁾ 家主は1860年代の最も知られた急進的作家にして社会評論家であった、「禁止されている」N・V・シェルグーノフをカナトチコフに薦めた。暫くの間、彼はその著作を入手しようと古本屋を捜し歩き、ついにスレテンカ通りの本屋で大枚2ルーブリと50カペイカを支払って大きな2巻本を入手したのである。¹⁷⁹⁾ さらに彼はクレストフスク門付近の機械工場で働いたさいに知り合った友人からは詩人ネクラースフの存在を教えられた。ごくわずかな料金を都市下層民に読書を提供した「人民図書館（narodnaia biblioteka）」ではネクラースフは禁書であったから、彼はわざわざそれを「ツルゲーネフ図書館」へ読みに行った。ネクラースフの詩はその目を開き始めたばかりの労働者にとり力強い宣伝の武器であったというのが彼の評価である。¹⁸⁰⁾ このように、すでに明らかなように、回想者は見聞などした出版物を例示し、書き留めることに格段の配慮を払っている。これは彼が情報伝達手段として文字資料が第一級の価値を有すると認識しえた時代にいたことと無関係ではない。

カナトチコフにとっても労働者＝革命家とインテリ＝革命家の対比的な存在をめぐる問題は大きな関心事項であった。おそらく実体験として、一旦、運動から身を引いたインテリたちの多くは二度と運動に戻ってこないのに対して、労働者のほうは「同志」に囲まれて資本の抑圧と戦い続けなければならない厳しく真剣な環境にあることを身に沁みて悟ったのであった。¹⁸¹⁾ 「労働運動」ではなく、「労働者運動」の独自性といった彼の主張は、おそらくはこうした体験を経ることによって、次第に形を整え、労働者の「成長」とともに確立された志向性であろう。両者の間に横たわるのは、場合によっては逆に働く可能性を秘めたベクトルであり、緊張した関係である。

モスクワで食い詰めてカナトチコフは1898年秋、ベテルブルグへ移った。そこは多くの労働者にとり「約束の地」と思われていたのである（私の言葉でいえば、これがベテルブルグの「吸引力」である）。そこで叔母の家を捜し当て、セミャンニコフ金属工場（これは創業者の名を当てる通称であり、正式にはネヴァ造船機械製造工場である）への就職を頼んだ。彼は新しい首都で金属工として生きようとしたのである。実際に就職できたのは、ヴィボルグ区にある100人ほどの小さな金属工場であったが、そこにはフィン人、エストニア人、ラトビア人などの非ロシア人が多数働いていた。カナトチコフは同僚となったリトアニア人と部屋を借りたが、このカトリック信者はトマス・アキナス、ソクラテス、プラトンなどをよく知る人物であった。その後、彼はヴァシリエフスキー島のジューメンズ・ハルスケ工場に転職した。そこでも働く労働者の多くはドイツ人、スウェーデン人、

エストニア人などの外国人で、しかも高度な資格を有していた。人びとは彼らを一括して「ドイツ人」と呼んでいた（これはドイツがロシアの工業化に多大な影響力を有していたことの表現でもある）。労働条件は良好であった。カナトチコフの時給は14カペイカで、日給にすると2ルーブリほどになった。外国人たちは糊のついたカラーと帽子を着用して出勤してきた。何人かは自転車で通勤してきた。¹⁸²⁾

そこで学生たちとの交流が本格化した。同居した機械工のP・スミルノフ（Smirnov）がイリヤ・シェンドリコフなど学生たちを連れてきて政治を話題とした。これがカナトチコフにとり学生とののはじめての出会いであった。

彼らは〔学生たち〕は異様な人たちで、何でも知っており、すべてのことに対して回答を持っていた。私はそうした彼らを羨んだが、同時に何か疑いというか、不安のようなものを抱いたのである。同僚の労働者たちの間で感じられるような自然さが彼らからは伝わってこなかったのである。¹⁸³⁾

これが彼の偽らざる印象であった。本論で別にも述べるように、労働者と学生とが一つのサークルを形成することは、当時、格段に珍しいことではなかった。学生ダニーロフ（この人は後にポリシェヴィキ党中央委員になるポストロフスキーである）がリーダーとなって、16、7人から成るサークル（学生と労働者それぞれの数は不明）がつくられた。ダニーロフが日曜の朝の学習会で西欧労働運動について講義した。学生の一人がサークルに相互扶助基金を導入するよう提案し、労働者側はそれに余り関心を寄せないまま、たいした議論もなしにそれが決定された。¹⁸⁴⁾ 学生たちはステブニャーク・クラフチンスキー『地下ロシア』を持ってきたが、労働者側にはそれはほとんど理解不能であった。

カナトチコフによれば、ネヴァ区は労働者階級の地区であり、6万人がほとんど何の文化的施設もなしに放置されていた。そこでは、金属工場で最下層の労働に従事する無知で無筆の集団はPskopsies（プスコフ県出身者の意）といわれてその無法性が恐れられていた。¹⁸⁵⁾ 彼は、労働者大衆は政治的に未発達であるから、彼らの間では社会主義的宣伝は注意深く行われなくてはならなかったというのである。この回想記全体を通してうかがえるのは、教養を身につけた労働者が何の疑念も抱かずにそうした大衆に奉仕しようとする強い意思であり、それ故の苦悩である。

カナトチコフは冬季、休日や非番の日に15人から20人ほどの信頼できる若い労働者を招待する「夕べの集い」を開き、会食しながら談話した。そこでは詩が朗読され、革命歌が歌われ、アコーディオンを奏でてフォークダンスが踊られた。さらに、「文化的な楽しみ」として、リベラルで開

こえる家を訪問することもあった。しかし、その場合、その主人が労働者の生活を何も理解していないことを発見することもあった。カナトチコフはいわゆる「経済主義 (ekonomizim)」者たちが出していた新聞『労働者思想 (Rabochaia Mysl')』を大変な関心を持って読んだが、それが労働者のニーズに対応していないという印象を抱いた。¹⁸⁶⁾ さらに、彼はフリーメーソンの会合にまで顔を出したが、そこでの哲学者の話は抽象的で理解できなかったと述べている。彼自身は近くのコルニーロフ夜間学校に熱心に通った。これは1883年に慈善家たちが創設したもので、90年代初頭で通学者は1000人を数えたといわれるから、人々の間にあった学習熱の高さを推し量ることができるであろう。¹⁸⁷⁾

5) 革命諸派の立場

1873年はロシアの革命運動にとり記憶される年となった。当時、影響力を有していた革命諸派がそれぞれ綱領的文書を公表したのである。それは単なる偶然ではありえず、相互に相手を意識して運動の主導権を取ろうとした側面もあったが、ここではこれらが工場労働者たちをどのように捉えようとしていたのかを問題にしてみたい。

地理学が科学全般の理解にとり基準的な位置を占めることを信じたクロポートキンは地理学者としてロシア地理学協会から高い評価を受けていた前途有望な人であったが、チャイコフスキー団員でやはり地理学者であったクレメンツの誘いに応じて革命事業の世界に身を投じるのにさして時間は要らなかった。彼は科学の仕事自体は重要であるが、それよりも緊急を要する課題として社会変革があると考えたのであった。シベリアでの実際的な科学調査が彼を社会変革の道へと強く誘ったのである。1871年、彼は同協会から求められていた事務局長就任を断った。クロポートキンは社会経済的諸関係と地理学の双方に関して、二つの革命を追及しようとしたといつてよいであろう。¹⁸⁸⁾ これが彼にとって「科学と文化」の時代的な意味合いであった。

クロポートキンが求められて団のために実質的な綱領的文書『我々は将来の体制の理想を検討する必要があるのか?』を執筆したのは73年の11月であった。運動実践を扱う第二部で、彼は団の見解を広め、同志を掘り起こす基本テーゼを実現するには「農民階級と工場労働者 (krest'ianstvo i fabrichnye rabochie)」をほとんど専ら対象としなくてはならないと述べた。¹⁸⁹⁾ 彼はここでは「ファブリーチヌイエ (fabrichnye)」という形容詞を使っているが、この文書では、むしろ、「農民階級と都市労働者 (krest'ianstvo i gorodskie rabochie)」とか単に「農民と労働者の層 (krest'ianskaia i rabochaia sreda)」といった表現が多い。その一方で、クロポートキンは「農民ないしファブリー

チヌイエ労働者とザヴォツキエ労働者の状態 (polozhenie krest'ianina ili fabrichnogo i zavodskogo rabocheho)」などと述べて都市労働者を二分することもしている。¹⁹⁰⁾ 彼はロシアの都市労働者に西欧のそれと比べて「幾つかの本質的な相違」を見出し、それに都市労働者の間で活動することの重大な意味合いを付与しようとした。彼は、何らかの定職を持ち、恒常的に都市に居住するザヴォツキエ労働者のほかに、遥かに広大な (obshirnyi) 労働者階級としてすべてが農民から成っていて、ほとんどが若者で、格段の技能もなしに織工として繊維工場に入り込んでいるファブリーチヌイエ労働者がいるという。¹⁹¹⁾ 彼は明らかにその農民的相貌から強烈な印象を受けている。ファブリーチヌイエは故郷に分与地を保有し、同村人といまだ強く結びついている。彼らすべては都市に恒常的に住まず、ロシアの端から一時的にやってきて、1年か2年あるいはよりしばしば仕事が切れたりすると毎年のように帰村し農作業をするのである。彼らは農民層の中の「移動分子 (podvizhnyi element)」であり、家族の保守的な影響から逃れているだけでなく、種々の実生活にも慣れており、社会思想の普及にとり感受性の強い基盤であり、手段でもある。将来、彼らの中から煽動家やインテリを労働者に引き合わせる手助けをする者が出るであろうし、農村においては農民サークルの核となりもするであろう。このように、クロポートキンはファブリーチヌイエを評価し、期待したのである。チャイコフスキー団の中で彼はむしろ例外的に農村に顔を向けた、いわばバクーニン派といえた。¹⁹²⁾

このようにクロポートキンは都市から農村を遥かに見据えて、都市の革命思想を農村へ運搬する者の発見に努めて、その部分の活動に未来の夢を掛けたのであった。さらにこの際、特徴的であったのは、彼が農村から都市へ「共同体精神 (mirskoi dukh)」を持ち込む役割をもファブリーチヌイエに期待していたことである。¹⁹³⁾ 彼は都市と農村を往復するような主体がいまだ、丁度よく存在していることを大いに喜んだに相違ない。歴史的にみてロシアにおいては人の移動は、様々な制約を受けつつも、顕著であったとみなされるであろうが、この時期にはそれが特に工場という近代的組織と結びついたのである。しかしながら、クロポートキンはこのことが（つまり、農民の工場との接触が）新しい人間類型を生み出すかもしれないということについてはひたすら無関心を装っているかのように見える。彼はペテルブルグの機械工たちはジュネーヴの時計熟練工のように普通の工場職工たちを軽蔑してなかなか社会主義を主張する殉教者にはならないと嘆いたのである。¹⁹⁴⁾

結論的なことを先に言えば、ともに国外にいたラヴローフとバクーニンにはロシアの工場労働者に関する特記事項はないに等しかった。1873年8月、ラヴローフは『前進』

創刊号の巻頭に「前進——われわれの綱領」を発表した。よく知られるように、これはインテリの文化的な役割に信を置いて社会問題の解決のために科学と準備を強調する基調で書かれたものである。しかしながら、彼は「特殊ロシア的な目的」として農村共同体を発展させて新しい社会体制の基礎にすることは人民の参加なしにはなしえないことを認める立場にあった。彼にあっては、対象は人民一般であった。彼は「文明化された階級に属する人間」にたいして人民と交信してそれ自らが自らの福祉の向上を果たすためのいわば「触媒」たらんことを求めたのである。その際、そのための補助者としてファブリーチヌイエに期待するようなことはなかった。¹⁹⁵⁾

ロシア国内のラヴローフ派のひとり、別に触れる N・G・クリャプコ・コレツキー (Kuliabko-Koretskii) は、ファブリーチヌイエの大半は無学で野蛮な偏見に満ちており、革命的な宣伝などは受付はしないとする偏見を持つ一方で、ザヴォツキエは農村との関係を断っており、家族を都市へ移して、真のプロレタリア階級になっている。その階級意識は高く、多くは読み書きが出来、宣伝家の話を聞く耳をもつと思い込んでいた人である。¹⁹⁶⁾ このように、ザヴォツキエを高く評価する彼の立場は都市的なものに注目して、その意味で「西欧的」であった。言ってみれば、それは、知識の普及を、クロボートキンのように横（ファブリーチヌイエ）にではなく、縦（ザヴォツキエ）へとますます掘り下げようとするものであった。その先に展望されるのがロシアにおける政党論であろうが、ここではそれに立ち入ることはしない。ここでは、この時代には人民との関係における知識の扱われ方が革命派の立場を分ける重要なメルクマールになっていたことが確認されればよいのである。

バクーニンの場合、彼は人民にたいしてこともあろうに説教を垂れる教師を生み出そうとする啓蒙的かつ文化的な（つまり、ラヴローフ派の）風潮がロシア国内に広まることに重大な疑念を表した人であった。「ラヴローフの綱領には、革命家には真剣な学問の準備教育が必要であろうことが余りに強調され過ぎている。我々は国外に大学でもつくるとでもいうのか」とまでいう人である。彼が『国家制度とアナキー』を書き、ロシア国内の革命家たちのためにその初版（1873年刊）にわざわざ「付録 A」をつけたのは、ネチャーエフ問題、普仏戦争、そしてパリ・コミュンなどが終わった後のことであった。この過程で、彼はネチャーエフの独裁概念と自己の無政府主義との根本的な相違に気づいて、こう述べたのである。

全人民の全人類解放という、一切を呑み込む一つの情熱を彼らの中に意識的に起させ、彼らの頭に、心に、その情熱を強化していくのです。これは新しい唯一の宗教

であり、その力は人の心を揺り動かし、強力な集団の力を生み出すのです。われわれのこれからのプロパガンダはこういった方向に限ります。プロパガンダの近い将来の目的は秘密結社を組織することです。この秘密結社は、人民の外郭的勢力をつくり、全メンバーの道徳教育の実践の場となることを同時に行う組織であらねばなりません。¹⁹⁷⁾

さらに、彼は言う。ロシア国内のロシア農民にたいする家父長制、共同体による個人の併呑、ツァーリ信仰のいわば三点セットの存在が社会革命を困難にしている。ネチャーエフ事件以来、穏健的に「準備」しようとする者もいるが、それは革命の可能性を本当に信じられないからだ。戦闘的の反乱以外に信頼できるものはなにもない。ロシア農民は無学であっても、愚か者ではないのだ。第一、インテリ側の文化は農民には伝達不能なのだ。¹⁹⁸⁾ こうした立場は、革命家と人民との一大関係をいわば異文化コミュニケーション的にとらえようとしたものであった。彼はバリ・コミュンなどを通して、社会革命において労働者が指導的役割を果たすべきこと、そして労働者と農民の同盟が必要であることを感じ取り、農民を啓蒙して社会革命の意味合いを知らしめることを主張した人であったが、この部分はロシアに関しては明らかに異なっていた。彼の立論はおそらくは大局としては正当であろうと思われるが、ロシアの労働の現場において展開される「知」をめぐる環境変化が実際に人間の行き方にもたらす作用を認めることには恐ろしいほどに慎重であったといわなくてはならないであろう。

V. 1870年代ペテルブルグ労働運動

1. サークル運動における労働者

1) サークルの時代

すでに私は本論の前段部分においてサークルの存在に読者の注意を喚起したのだが、そうしたことの背景には、「科学と文化」が人間の結合関係一般に強く作用するようになったとする基本的な認識があった。サークルなどを拠点とした社会的結合はとくに労働者の世界に限らずに多方面に及んだ。労働者サークルの登場はいわばこの「サークルの時代」における現象のひとつであった。この時代のサークルは学習サークルなどの自発的な結社のうごきに示されるように、啓蒙教育活動にその本領を発揮しようとした。¹⁹⁹⁾ したがって、本論で再々触れているアルテリといった特徴的な結合体をサークルとして扱うことはできないし、しないのである。それは農村共同体的な人間関係を都市においても再現するための装置であり、多くの労働者がそれに多分の恩恵を受けていたとしても、その主たるベクトル

が当事者たちが意識するとしなにかかわらず、「反近代的」であったことからすれば、ここで問題にしたい「近代的な」サークルとは性格を大きく違えるものであった。

1870年代初頭、欧露の大都会に居住した青年たちの間では「サークルする (kruzhkovat'sia)」動きは最盛期を迎えた。とくに1873年末から翌年初めにかけて、ペテルブルグでは小集会(skhodki)が大衆的な現象になった。アプテークマンはそれらを「当時の若者のミーティング (mitingimolodezhi togo vremeni)」と呼んだことがある。²⁰⁰⁾ この時期、構成員間の相互扶助にとどまらず、部外者に対する知的精神的な、つまり文化的な支援を目的として私的な有志の集まりであるサークルが多数生まれたのである。サークルは「科学と文化」の時代に生み出された組織体であり、社会的結合体であった。その中には、社会問題、なかんずく労働問題を取り扱い、社会変革を志向するものもあった。従来、史家はこの部分に(のみ)その関心を集中させるくらいであったのであるが、科学的な諸団体が同人的サークルとしてその組織化を開始する時期にあったことについてはすでに触れたし、さらに、専門を違えた者たちの横断的な組織化もそうした流れの中で発生したこと、場合によって「知的統一体 (the intellectual unity)」とでも命名する者がいるほどにかねらの交流ネットワークが急速に整備されたことについても言及した。²⁰¹⁾ これは陸相D・ミリューチンがペテルブルグの改革派諸サークルによく顔を出すような時代であったのである。²⁰²⁾ 碩学イーテンベルグはこの時期における革命的サークル網の全国的な形成さえ指摘するのであるが、しかしながら、明らかにそれは過大評価の誇りを免れえないであろう。²⁰³⁾ そうした全国的なサークル網を指摘したいのなら、科学的諸団体のそれ(学会)を指摘するほうが適切である。

ペテルブルグ市の場合に限ってみても、社会変革をめざすサークル参加者の多くは地方出身者であり、この大学都市へ出てきて先ずは同郷人たちが作るサークルに参加したりしたのである。高等教育機関は図書館、学生食堂などの学生用施設をそのための場所として提供した。学生たちはサークル中心の生活、つまりN・S・ルサーノフがいう「サークル的學生生活 (kruzhovaia studencheskaia zhizn')」²⁰⁴⁾を送った。アプテークマンによれば、とくに図書館は「公然たる政治的アリーナ」²⁰⁵⁾と化し、本論前半で読者に注意を喚起するほどまでに学生運動が盛んであった外科医学アカデミーの図書館ではチャイコフスキー団の書籍普及事業 (knizhnoe delo) が正々堂々と展開されたほどであった。²⁰⁶⁾ 市内各所に学生やインテリたちの「溜まり場」がつくられて、ペテルブルグに限らず、この時期に大都会がその雰囲気を変えて新しい顔を持つようになったこともサークル活動の活性化に大きく寄与したはずなのである。

サークルには画一的な組織原理があったわけではないが、現象的に顕著であったのは同郷関係(zemliachestvo)がそれにかなり作用したことである。それは一義的には不慣れた都市生活の便宜を図るために機能するはずであったが、かならずしもそのためだけではなく、偶然的な要素としても働くことがあったのである。²⁰⁷⁾ ペテルブルグの同郷人サークルで知られるのは「オレンブルグ人サークル (kruzhok orenburzhtsev)」や「サマーラ人サークル (kruzhok samartsev)」などである。後者で中心になったL・ゴロデーツキー (Gorodetskii) の供述によれば、それは元来は1870年代初頭にサマーラ市で中学校の級友たちが専ら読書会と思想の交換を通じて知力の増進を図ることを「唯一の目的」にしたのであったが、このグループが1873年夏にペテルブルグへ出てきて共同生活を始めたのである。²⁰⁸⁾ この年から翌年にかけての飢饉がこの単なる自習サークルに何らかの進化を強うながしたであろうことは容易に想像されるところであるが、ここに見出せるペテルブルグの「吸引力」がどの辺にあったかは、今のところ、不明である。

さて、下里俊行はカラコーゾフ事件に関する論考において、サークルをまずは人間関係のネットワークとして把握すべきことを正当に主張しているが、さらにその性格が一時的な日常的なものから二次的特定なものへと発展したと述べるのは整理が過ぎている印象を受ける。下里は「血縁・同窓関係」と「公務関係」の「二重構造の狭間」でサークルをとらえようとしている。²⁰⁹⁾ ふつう、この時期のサークルは構成員の相互信頼と平等を旨として何の規約も作成しないことを常態とした。それは彼らの間に顕著であった形式主義への嫌悪感から手続き的な約束事を軽視するか軽蔑して、内面的で実質的な全人格の結びつきがより重視された結果でもあろう。彼らは自らのサークルを理想社会のミニアチュールと見なしていたとも思われる。下里のサークル二重構造論はさしあたり参照すべき便利さを有しているが、分析的に過ぎて実態の説明に適應するには不都合な面が多いかもしれない。いずれにせよ、1873年秋までに欧露各地にサークルがつくられたのであり、これは引き続く「ヴ・ナロード」現象を理解するためにも大切なことである。

革命的なサークルはペテルブルグなどの大都市を中心に個別分散的に存在したが、ペテルブルグでは第一次「土地と自由」が消滅した後もそれは存続した。1860年代中ごろにチェルヌイシェフスキー信奉者たちが参謀本部の士官たちの間にもいたように、若い士官クラスがサークルをつくり世の中の改革について議論するだけでなく、社会的行動を起したことはこの時代に特徴的であった。1872年、薬莖工場の装薬部門長補佐であった陸軍中尉 E・E・エメリヤー

ノフ（Emel'ianov）は工場に図書館をつくったが、その蔵書が部外者であるミハイロフ砲兵学校の士官たちによっても利用されるなどした。さらに、彼ら生徒たちが1873年に砲兵サークル（kruzhok artilleristov）を結成したことはよく知られているし、その中のひとりN・N・テプロフ（Teplov）自身は同工場で働いた。サークル・メンバーがエメリヤーノフの部屋に出入りして、そこでは砲兵士官であったステプニャーク＝クラフチンスキー、シシコー、ロガチョーフといったチャイコフスキー団員たちと交流があった。また、エメリヤーノフは工業高専生徒の図書室作りにも大いに協力するなどした。このように、サークルがとかく書物中心に存在し、その管理能力ある者が重要な役回りを果たす傾向が認められたのである。エメリヤーノフが逮捕されて葉茨工場の図書室は壊滅的状态に陥ったが、それは有力な社会的絆の喪失を意味したのであった。²¹⁰⁾

さて、1873年11月18日付の第三部調書に次のような記述がある。

〔ペテルブルグの〕シリッセリブルグ関門付近に居住するスモレンスコエ村〔出身の〕労働者のところへ読み書きを教えようとする部外者が現れた。その一人は貴族身分のセルゲイ・シネグープ（22歳）であり、もう一人が元モスクワ大学生レフ・チホミーロフ（同）である。彼らは逮捕され、家宅捜索により『労働者人民へ』などが発見された。さらに彼らとともに活動している司祭の息子ヴァシーリイ・スタホフスキー（23歳）と医学生コンスタンチン・ボリセーヴィチ（19歳）も逮捕された。彼らは夜半10時から早暁3時まで労働者教育に励んでいるのだ。機械工場で働くマリノフスキー（23歳）を労働者間にラサールの著作を普及した廉で捕らえた。²¹¹⁾

さらに同年11月23日付けの別の調書は「シネグープの夕べ」に参加した労働者の証言を掲載しているが、それによるとマクスウェル工場で働く農民6人が学ぶ学校があり、その教師は上に触れたサタホフシキーとボリセーヴィチらであったが、そこではまず読み書きを教え、つぎにこの世の不公平について話し、唄を歌った。その唄とは例えば、「我等がツァーリは酔い潰れ、この世を苦境に陥れ（tsar' nash p'iany, zatashchil narku na mel'）」といったものである。学習は労働後の夜半11時、時には12時まで行われ、『ステンカ・ラージン』、『エゴール爺さん』、『工場生活概説』といった本が読み聞かされた。²¹²⁾ これら二つの当局文書は1870年代初頭のペテルブルグで展開された「シネグープ＝チホミーロフ・サークル」とも呼ばれた青年学徒と労働者たちの交流物語の一齣をよく映している。実際に読み書きを革命的知識人から学習する労働者たちのサー

クルが存在したことが分かる。そうした人びとは決して多数ではなかったが、あきらかに都市生活にひとつの色彩を加えた部分であった。

先に触れたクレンゴリム争議に参加したゲラシーモフは、その後、1873年にペテルブルグへ移り、グック紡績工場やチェシール織布工場（ヴィボルグ区）で働いた。彼はネヴァ区にあった繊維工を対象とした秘密の「学校」へ行行ってから急進化した。彼がいう「学校」とは労働者サークルのひとつであろう。そこで彼は「S」という「教師」である急進的なインテリゲンツィアと出会ったのである。「S」がチャイコフスキー団のセルゲイ・シネグープであることは確かである。しかしながら、「S」はやがて逮捕されてしまい、ここでの学習は停止する。ゲラシーモフは1874年から翌年にかけての冬に6人の労働者たちとアルテリ生活に入り、その環境の中で彼はチェシール織布工場の織工D・アレクサンドロフと出会い、彼はいまだ20歳であった学生V・ディヤークフ（D'iakov）に引き合わされたのである。その後は彼らの住まいに新しいサークルができ、夜間と日曜にはそこで労働者と学生の出会いがなされるようになった。これが契機となって、ゲラシーモフは専従の宣伝家（生活費は学生側の負担）になったのである。²¹³⁾ 彼はそのアパートや居酒屋で「一般労働者」にたいして、文書を大声で読んで、それにコメントすることをした。²¹⁴⁾

2) 「独学と実践活動サークル規約」

1871年にチャイコフスキー団のモスクワ・グループ員であったV・P・カールポフは自分の部屋で「独学と実践活動サークル（kruzhok samoobrazovaniia i prakticheskoi deiatel'nosti）」を始めた。この人は貴族身分でトゥーラ県に49年頃に生まれ、ギムナジアを中退していた。ここでこのサークルに注目するのは例外的に詳細な内容の規約を残したからである。²¹⁵⁾ それはペテルブルグのチャイコフスキー団で作成されたとする説²¹⁶⁾や同じくペテルブルグのナタンソーン・サークルの作とする説²¹⁷⁾などがあるが、いずれも推測の域を出ない。この規約作成者に関して定説はないが、一読して明らかなように実際にサークル運動に深く関わった当事者（たち）やこの分野の「専門家（たち）」でなければ執筆し得ないであろうと思われるほどの出来栄である。執筆者を特定する手立ては持たないが、ここでは当時のサークル運動の理論的想定を知る有力な手がかりとして、この規約を取り上げてみたい。結社が裏切りにより壊滅させられた時にこの文書が当局の手に渡ったのである。

この規約は全体的には構成に不均衡があつて、必ずしも体裁を良く整えたものではない。その「序」は「われわれの目的はロシア社会のために進歩の条件を実現することに

ある」と述べ、社会進歩を課題としている。そこには個人(lichnost')の発達が肉体的知的精神的に遅れていることを強調したラヴローフ思想の影響を認めることが出来よう。そして、民主的社会主義を掲げる連邦共和国という新しい社会の設立を目指すには、「禁書」の普及、教育、そして国家体制の根本的変革が必至であるとする知識偏重の社会変革論が展開される。²¹⁸⁾ 書物を通じた知識教育と体制変換とのあいだには自ずから大変な距離があるはずだが、当時のロシア社会にはこうしたことを気後れせず正面切って論じ、かつそうすることで周囲の共感が得れるとする思いや雰囲気があったのであろう。宣伝啓蒙活動にはそれらを繋ぐ重大かつ困難な役割が与えられるはずだが、端的に言えば、知識教育と革命事業の安易な連結が結果的にはこの活動にいわば予定調和的な楽観性の不用意な侵入を許すことになったのではないのかという印象を拭いきれない。同時に、こうしたことはこの時期の「科学と文化」の時代的制約のひとつの現れであったのではないのかというのが本論を貫くモチーフなのである。

その「知識と連帯」と題された段落²¹⁹⁾では独自のサークル論が展開されている。周知のラヴローフの用語をそのまま援用して、「批判的に思考する個人」であるロシアの進歩主義者(progressist)は社会のあらゆる階層に対し自治の原則(nachalo samoupravleniia)にとり有用な知識と条件を普及するが、その社会は大きく、①「教育ある部分(obrazovannyi)」, ②「労働部分(rabochii)」, そして③「農村部分(sel'skii)」の三つから成り立つと想定されている(なお、別の箇所をみれば、「部分」は「身分(soslovie)」と言い換えが可能であろう)。①は物質的に恵まれた層であるが、②は肉体労働者(muskul'nye rabotniki)の一部を構成して狭い空間で働かされ、逆に③は広く閑散としたところで勤労している。ともに「肉体労働者」である②と③を一括して全体を二分することもできるであろうが、積極的にそうしないこの三分法は独特である。しかし、「肉体労働者」は空間的分散性で分類され、労働者と農民、あるいは都市と農村といった近代的な類型区分論には立っていない。二分された両者の間に架橋することが絶望的に困難であるとするロシア社会二重論もここでは無縁である。都市労働者と農村農民が平等かつ対等に扱われている。²²⁰⁾ 乱暴に印象的なことを言えば、①が②と③とを「教育的に」嵩上げしさえすれば、所期の目標は達成されるであろうと考えられていた節が感じられる。

このサークルへの参加希望者は事前に「地域サークル(territorial'nyi kruzhok)」で審査と予備的訓練を受けなくてはならず、そこでは直接役立つ科学を学び、本など教育教材を供給し、文庫・読書室をつくり、当該地の統計資料を収集したりするのである。²²¹⁾ これら想定された活動

内容はあたかも学術研究的であって、規約の知識偏重傾向がよく現れている。「独学と実践活動サークル」は部分ごとに存在した3サークルの総称である。3サークル連絡のために、「進歩的実践活動家総会」の結成が予定されていた。以下、部分ごとにみよう。

「教育ある部分」を対象としたサークルに関しては、基金(kassa)運営に多くの言及がなされ、この分野での活動が重視されていたようである。²²²⁾ それは相互扶助的、組合主義的であって、決して戦闘的でなく、ましてや階級的ではありえない。そうしたものは知的に発達した均質な市民たちの成熟した関係の存在を前提にして初めて実現の可能性が云々されうるはずであるから、彼らは西欧を理想化してこれを夢想したに相違なく、ロシア社会にその到来を望んでいたとさえ思われるのである。ここに伺えるのは、すこぶる穏健な改良思想である。

「労働部分」に関する箇所が質的にも量的にも最も充実しており、最重視分野であつたらしい。²²³⁾ ここではいきなり「労働者階級から成る人民党の集まり(sobranie narodnoi partii iz rabocheho klassa)」という表現が登場する。この用語法は全体を通してここだけであり、規約全体の調子からすれば階級論や政党論はむしろ異質であって、他との調和に乏しく無視しうる書き込みでしかない印象を受ける。この分野で肝要な組織として、①「最も傑出した労働者イニシアチヴ・サークル」、②「小さな学校」、③「文庫」、④「貸出基金・相互扶助」、⑤「消費者・生産者アルテリ」などがあげられている。①は工場など各地点につくられ西欧の労働問題の理論的実践的研究を行うのだから、別に「革命的」なものを想定しているわけではない。②は5人から10人ほどの読み書き教育を主とする非公式なものであるが、併記された日曜学校はさらに「知り合うこと(znakomstvo)」を目的としており、学校が出会いの場所としても重視されていたことがよく分かる。③は①と②に付属して、人民向けの本を備える場所である。④は小規模なものから出発して徐々に大きく結合することが予定された。⑤はいかなる分野の労働者を対象とするのか明示されてないが、それはアルテリという組織形態で彼らのほとんどを包摂しうるとみなしていたためであろうと思われる。①と②以下の関係は具体的な言及がないので想像するほかないのだが、おそらく①が頭脳の役割を担って、その「研究成果」を②以下に還元することが予定されていたのではないか。仮にそうだとすれば、ここで志向されたサークル活動の基本線はスマートな西欧化あるいは近代化路線であり、これが「科学と文化」の時代性の社会運動レベルにおける表現形式ということになろう。

次いで、宣伝の成功のために「教育ある部分」が人民と知り合う方法が触れられている。工場・印刷所などで働くこ

と、部屋を労働者たちへ貸し出すこと、教育・医療・弁護などを通して個人的に知り合うこと、居酒屋など労働者がよく行くところへ出掛けることがあげられている。おそらく当時としてはこれらが主たる出会いの契機であったとみなしてよいであろう。宣伝のための準備として、人民向けの本を書くために「人民の言語 (narodnyi iazyk)」を学ぶことが言われている。これらは、すでに本論前段で部分的に触れたように、彼らが労働者と異なる世界にいて交際する機会を持ち得ないできたこと、そのために異なる言語世界に生活していることの告白でもある。彼らは人民とのコミュニケーションに自信をもてないはずであるが、興味深いことに、「人民の言語」で書かれた本を作りさえすれば、人民によってそれは受け入れられて交流は自ずから可能になるだろうと考えていたようなのである。この希望的な発想は上に見た独自のロシア社会三分法に正確に対応している。

宣伝は漸進性 (postepennoost'), つまり段階をおって少しずつ進むことが求められた。一揆や蜂起とは違って、宣伝とは本来そうしたものであろう。次のように宣伝で取り上げられるべき内容が述べられている。高利貸への従属と担保不能 (打開策や対案として示されたのは基金。以下、同様)、小売店主や家主への従属 (消費組合)、経営者や親方への従属 (無償信用、協同組合 [assotsiatsiia]、ストライキ [stachka。使われているこの言葉は同じストライキを意味する zabastovka と比べて、密約、裏取引などのいわば「前近代的」語感をともなうものである]) は一時凌ぎとして退けられる)、政府が行う資本全般への保護と政府自体による略奪 (西欧労働運動を知ること、国内的かつ国際的な労働組合 [rabochie soiuzy]), 無筆 (nevezhestvo) (学校と図書館)。このように、ここに示された宣伝内容は主に都市労働者が強いられている従属的な環境に関してであるが、全体としてはストライキなどの直接的運動よりは労働諸団体による穏健の合法的で手続き的な啓蒙活動が想定されており、しかも西欧型労働運動を理想とした様子がうかがえる。これらに関してもラヴローフの影響を指摘することは可能であろう。

「労働部分」の力をどのように引き出そうとするのか。規約はそのためにつぎを列挙している。貸出し組合、小営業アルテリ、移動アルテリ (podvizhnye arteli)、人材派遣協会 (obshchestvo dostavleniia truda。職業紹介所のようなものであろう)、身を隠すための基金と場所 (kassa i mesto skrybaniia)、学校、書籍普及、本と新聞の発行、政治経済知識の普及、農村教師との結合、農村教師大会・同セミナーへの影響力の行使など。かように列挙項目は様々であるが、全体としては貸出し組合から学校にいたる諸組織を活用して、主に活字をメディアとして社会科学的知識

の流通をはかることでこの部分の力を引き出すことを構想していたようである。こうした発想も極めて啓蒙主義的なものである。さらに、「労働部分」を扱って、「工場」ではなく、むしろ「アルテリ」や「人材派遣協会」が登場している点も改めて注目されよう。端的に言って、この1870年代初頭のロシアで案出された社会変革構想においては、工場の占める位置は大きくはなかったのである。これはロシア社会史研究において大切な論点であり、今後とも多面的で慎重な検討が求められるであろう。また、代わるべきメディアがさほど考えられないとしても、これほどまでの「活字信仰」と知識偏重はやはり当時の一大特徴としてはつきりと認識すべきことであろう。

農村教師が取り上げられていて、この規約が農村にも関心を抱いていたことは分かる。おそらく、それを通して農民へ働きかけるのであろう。しかし、農村農民を正面から相手にしようとはしていない。こうしたことはここだけの話ではなく、この時期に試みられた宣伝活動一般はまずは多分に都市労働者相互のものであって、農村農民はかろうじてその対象になっても決して主体とはならないのであった。この規約では農村住民は最後に触れられている。²²⁴⁾ 「農村住民の間で人民の力を形成する」ことが課題とされ、そのために次のような戦略が考えられた。——何よりも小工場などへの出稼ぎ者に注目し、そこから優れた人材を選らび、その者に出来る限り系統的に現状を批判する自然・社会科学の知識を伝授する。こうして農村住民の進歩的部分から宣伝家を生み出す。出稼ぎ業をアルテリ原理で組織する。これらの人びとの間に日曜学校と本とによって、読み書きと教育を普及する。工業中心地に人材派遣協会と流入者保護所 (priiuta novopribyvaiushchim) をつくる。これらのことから明らかなように、農村にいる農民はやはり宣伝の直接的な対象にはされていない。農村から都市へ出てきた出稼ぎ者に対する啓蒙的な工作について明示的に述べられているが、帰村した彼らが農村農民を宣伝して農村の変革を促進する見通しについても触れられてはいない。かろうじて言及されているのは、一般的な理論教育を修了したあと、農民生活を「研究」するために「人民主義者たちの特別なサークル」をつくることである。農村農民を相手に宣伝しようとして、知識一般以前に何よりも「当地の農民の言葉 (krest'ianskii iazyk po mestnostiam)」が不可欠であることを認識せざるをえないほどであったのだから、客観的に見れば、農村変革などは遥かに手の届かぬ夢のまた夢であったのであろう。このサークル派が選んだ道はまずは農民を研究することでしかなかったのである。かくして、彼らの宣伝はひとまずは都市にいて主として都市住民を相手にするものとして想定されていたとみなくてはならない。こうしたことは当時の都市サークルにひとしく

観察されたといっても格段の誤謬はないであろうと思われる。

さて、この規約が宣伝活動家にもとめたのは自然や社会科学に関する理論的知識、実践性、精神的忍耐力、堅忍不拔、沈着、連帯にたいする無条件的な服従などであった。²²⁵⁾ 繰り返し確認するまでもなく、明瞭なのは知識重視であり、それを一身に装備した活動家が献身的に努力することが求められたのである。こうした「頭でっかちの」活動家は運動上の倫理性までも求められて、彼（女）はさしあたり個別分散的なサークルに身を投じたのである。

3) ラヴローフ派サークル

ここで、我々の議論展開に必要なラヴローフ派のサークルについて触れなくてはならない。何かにつけて「準備」することを重視したラヴローフが文化啓蒙活動に熱心になったのは自然である。彼はそのためにサークルが外部に知的精神的に働きかけることに「文化活動(kul'turnaia deiatel'nost')」という用語を当て、それを奨励したのである。²²⁶⁾ ラヴローフ派の穏健な科学的文化的な啓蒙路線が社会的に評価を高め、ある程度、実践されたのは、本論が強調してきた「科学と文化」の時代相が基底でその力を発揮した結果であると考えられるのであって、すでに多くの論者が一致して指摘するように、²²⁷⁾ これを「ネチャーエフ事件」が与えたネガティブな衝撃に対する反作用とするだけでは十分な説明が覚束ない事柄なのである。当時の社会的雰囲気を思えば、ここでサークルの存在理由とその機能に関してラヴローフの言説を無視することは到底出来ないであろう。それは、「進歩主義者の目的は合理的な科学知識を読み書きできる公衆(gramotnoe obshchestvo)へ、読み書き(gramotnost')を人民へそれぞれ普及することにある」といった文書が家宅搜索を受けたベテルブルグ高等技術専門学校のところから発見される時代であったのである。²²⁸⁾ ロシア史にあって、「読み書き」がこれほどまでに社会的な注目を浴びた時代はいまだかつてなかったと言わなくてはならない。

ベテルブルグに所在したサークルのうちラヴローフ派のそれについて残された、ほとんど唯一のまとまった文献は自分がそのメンバーであったN・G・クリャプコ・コレツキー(Kuliabko-Koretskii)の回想記であるが、²²⁹⁾ それを見ると、このサークルもいかなる規約も持たず、ただラヴローフの「前進——われわれの綱領」をいわば活動指針としていたことがわかる。その綱領案の練り上げ過程ではアナーキズム的色調を強めてバクーニン派の協力を取り付けようとしたこともあったのだが、ラヴローフは一貫して知識と準備を重視する姿勢を崩さなかったのである。人民と革命家がそれぞれ知識と準備を尊重することが革命の

実現を促進するであろうとする強い信念は終生「学問の人」であったラヴローフの真骨頂であった。²³⁰⁾ 上の「前進」は、「ロシア社会の改造は、人民の福祉の目的をもつばかりではなく、人民のためばかりではなく、人民によって行われるべきである」と人民主義的に宣言している。

さて、上の回想者はラヴローフ派サークルの構成員を約30人としているが、ほとんどは学生であった。その医学生部分を代表したのがI・S・ギンズブルグである。彼は1851年生まれで、最も学生運動が盛んであった外科医学アカデミーの学生であり、71年にはフレロフスキーの『社会科学入門』の普及を図った廉で取調べを受け、雑誌『前進』の創刊にも関わった経験があった。74年に医師資格をえてチェルニゴフ県でゼムストヴォ医師となったのが本人にとっての「ヴ・ナロード」であった。²³¹⁾ さらに、このサークルの高等技術専門学校生をリードしたのがA・F・タクシスであった。彼は1852年ごろにボルトワにフランス語教師を父に生まれた。化学学科の学生であったが、74年の夏には穀物の刈り取り手を装ってすぐ後で触れるヴァルザールとともにドン地方に「ヴ・ナロード」したことがあった。もう一人の代表格は帝大生の中心にいたE・S・セミヤノフスキーであったが、この人はキーエフ市の資産家の家に1850年に生まれ、73年にそこの大学法学部を卒業して所有権法の専門家たらんとしていた。この三人がサークルの代表的な顔であったが、後に著名な統計家になるV・E・ヴァルザールも目立つ存在であった。彼は1851年生まれで、キーエフ大学を中退して上京し、高等技術専門学校に入り直したのである。73年に同校からウィーン万博に派遣された際に、彼はラヴローフと接触している。その年にこのサークルの協力を得て、本論前編ですでに触れたように代表的な宣伝用文献のひとつとなった『巧妙な仕掛け(Khitraia mekhanika)』を執筆し、それをジュネーヴの『前進』編集部が出版したのである。ヴァルザールは75年にチェルニゴフ県ゼムストヴォの統計局に入り、統計家人生を開始したのだが、彼の回想記によれば、このサークルは労働者間にサークルを組織すること、労働者や若いインテリ・サークルに合法・非合法の文献を普及すること、雑誌『前進』に寄稿すること、密輸入した非合法文献を翻訳し国内に流布すること、そして「ヴ・ナロード」を試みることなどを目ざしたが、これらの実践活動にもまして彼らが精力を使ったのは、年間少なくとも6000ルーブリはかかった雑誌『前進』の出版費用捻出であった。²³²⁾ 確かに彼らは都市とその労働者に関心の過半を払ったのであるが、それをヴァリツキのように、「農民に失望して労働者へ向かった」とするのは整理が過ぎているように思われる。²³³⁾ このサークルは農村農民をその視野から外すことはなかった。「ヴ・ナロード」を試みてヴァルザールたちは「探検旅行

(ekspeditsiia)」に出かけたのである。²³⁴⁾ このサークルの労働者工作で目立ったのは、1874、5年の段階で、プテツ工場労働者にたいして宣伝活動を行ったことである。その際、中心となった Ia・チーホノフはすでにトロントン工場労働者 I・T・スミルノフと親交があり、造兵廠工場労働者のサークル形成にも関わった人であった。²³⁵⁾ このラヴローフ派サークルは本論が注目しようとしている首都の労働者グループと何らかの関わりがあったのであり、このことはラヴローフの思想がたとえ部分的であれ、彼らに影響を与えていたことをうかがわせるのである。全体として同時代人を含め彼らの実践活動に対する評価は低いのであるが、何よりも部外者にとり印象的であったことは、他のサークルの場合に相違して、メンバーが人民の中へ行く前に学問的な予備知識を周到に仕入れることに熱心であったことである。²³⁶⁾ 彼らは政治革命に強い不信を抱き、革命における知識と準備の必要性を唱えるラヴリズムに忠実であった。

2. 「労働者＝インテリ」をめぐる

1) 「オブノルスキー・パラドックス」

チャイコフスキー団とそれが宣伝工作した労働者たちとの関係が決裂に至る過程では、ニーゾフキンという一人のインテリが重要な役割を果たす一方で、インテリたちの後見を排除しようとする労働者側の自立志向が顕著になった。初期ソヴィエトの優れた歴史家ネフスキーの用語を借用すれば、首都労働者の中から「労働者反対派」を作ろうとする動きが出現したのである。²³⁷⁾ 労働者たちはニーゾフキン個人というよりも、インテリ（宣伝家）全般を信用しようとはせず、それに独自の世界を持つようとする動きをますます見せるようになった。この時期のペテルブルグ労働運動で主要な働きをした I・A・バーチン(Bachin)は、²³⁸⁾ クロポートキン公爵を嘲笑しながら、学生からは本を取り上げるべきだ、もし彼らが戯言を教えようとするれば、彼らをぶちのめすほかないと語るほどであった。²³⁹⁾ ニーゾフキンに言わせれば、労働者たちはいわば「中立層(neutral'naia sreda)」を形成して、彼らは自分たちだけの結合を秘密裏に試みている、これは前例がないことであった。²⁴⁰⁾

そうした労働者たちの結集核となったのは、広くはサークルであったが、なかでもまずは労働者文庫(rabochaia biblioteka)であった。その切っ掛けを作ったのは、皮肉なことに、ニーゾフキンと A・セルジュコフ(Serdiukov)²⁴¹⁾ であったのだが、1873年の春以降、労働者の手によってそれは管理運営されることになった。薬莖工場にあった文庫は全市的なものに発展する勢いを見せ、そこを拠点としてヴァシリエフスキー、ネヴァ、ヴィボルグ、コルピノの4

区を対象とするものが別途にすぐ立ち上がった。重要な役回りをする文庫会計係には V・P・オブノルスキー(Obnorskii), N・クードロフ(Kudrov), そして S・ヴィノグラード(Vinograd) が順番に就任した。当初、蔵書は専ら寄贈に頼ったが、やがて労働者の給与の2%を充てて購入するよう制度化された。文庫管理にはその他数名の労働者たちが参加した。²⁴²⁾ もう一つ、労働者たちは失業基金にも結集したが、薬莖工場のそれは貸付によって多くの労働者を引き付けたといわれる。²⁴³⁾ そもそもこうした文庫や基金は相応の準備と環境があって初めて成り立つ組織であり、従来はインテリが得意とした分野であったが、労働者たちがそれを自己のものにしようとする動きを見せ始めたのである。「科学と文化」の時代の特徴の一つは労働人民をもそうした組織的世界へ誘うところにあった。これは「労働者＝インテリ」という新しい概念が社会に実態をともなって登場する際の背景事情のひとつである。

さて、労働史家ゼルニクが(革命的)インテリと労働者との間の関係をさぐるその研究の主たる関心を両者間のイデオロギー的な作用と反作用ではなく、むしろその前提条件とでもいえる人間的な交際論レベルに置くようになったことに私も共感する。彼は1870年代ペテルブルグの学生たちと金属労働者たちの共に若い世代が相手をそれぞれどのように思っていたのか、人間的で心理的な「従来忘れられてきた局面」を扱おうとしているが、なかでも注目されるのがオブノルスキー個人に係る次のような局面である。1873年3月、ヴァシリエフスキー島に支部を作ろうと薬莖工場労働者サークルがヴィボルグ区から転居した中にオブノルスキーも入っていて、彼の新しい部屋が拠点(支部)になった。²⁴⁴⁾ ヴィボルグ区では、ニーゾフキンなどインテリとの緊張した関係があったが、ここはその意味でも新天地であり、活動は基本的に労働者自身の自由な手に帰したのである(この関係論で言えば、ネヴァ区はこれらの中間に位置するであろう)。さて、ゼルニクはその8月に起きた「鋭い衝突」に注目する。労働者仲間で信望があったオブノルスキーが何の予告もなしに当地を立ち去るという「事件」が起きたのである。学生の A・リソフスキー(Lisovskii) が労働者工作のために彼とともにオデッサへ出発したのだが、オブノルスキーはこのことを同志労働者たちに事前に通告することなしに姿を消したのである。ゼルニクは、このことが労働者たちに衝撃を与え、「極めて否定的でシンボリックな意味合い」を持ち、その後の労働者とインテリとの関係展開にとり広い意味で象徴的な出来事になったというのである。²⁴⁵⁾

この「事件」は幾つかのレベルで理解が可能であろうが、ここでは、ゼルニクがするように、オブノルスキーの人間性に関わる局面を取り上げてみよう。この人は1852年、ヴォ

ゴロド県に下士官を父に生まれたとされ、身分的にはクロンシタットの町人である。当地の郡学校を卒業して、69年からペテルブルグへ出てノーベリ工場や薬莢工場で組立工として働き、72年には、すでに62年から金属工としてペテルブルグに居住し60年代の労働運動を70年代につなぐ貴重な役割を担ったラヴローフ派のS・V・ミトロファーノフ(Mitrofanov、48年ごろ、ヴラジーミル県生まれ)を通じてチャイコフスキー団と一連のかかわりを持つようになったのである。彼が71年末から翌年初頭にA・リソフスキーやニーゾフキンと知り合ったのはこのミトロファーノフを通じてであった。²⁴⁶⁾ 彼は書籍普及運動(knizhnoe delo)に熱心にかかわり、非合法文庫の最初の労働者指導者であるという評もあるほどであるから、²⁴⁷⁾ その「知的な」活動で周囲の目を引いていたのであろう。彼には自分を労働者ではなく、むしろ学生とみなす傾向が時にあったといわれることも否定できないように思われる。

ところで、ニーゾフキンは宣伝家を裁いた「193人裁判」で次のような証言をしている。

無学で文字を読めないファブリーチヌイエはいとも容易に全体がチャイコフスキー団員らの影響に屈してしまった。煽動家のいうことを聞いて、ファブリーチヌイエは彼らの間に広まっている空想的な企みを実現できると完全に信じ切ってしまった。彼らは極めて無分別な計画に何の疑いを抱くでもなしに、むしろそれに有頂天になったのである。実際の所、この一方で知り合いの熟練工(masterovye)たちは革命的で強制的な方策を信じないだけでなく、煽動家たちを公然と嘲笑して、「彼らによって秩序が保たれるとはとても思われず、むしろ彼らが無秩序を生み出すということだ」と確言しているのである。無学なファブリーチヌイエは何も確かな世界観など持っているわけではない。彼らのところではただ空想のみが機能しており、煽動家たちはそれにのみ作用することで粗野な大衆を煽り立てるのである。だが、読むことが出来る熟練工は思考することに慣れており、国家や社会関係に関して確りとした見解を有し、彼らの内では空想が理性を超えることはないのである。革命的な妄想やペトロパブロフスク要塞を奪取するといった計画に簡単に惑わされることはない。検閲された本によって労働者は決して革命家などになることはない。もしも何人かの熟練工、たとえば、オブノルスキーやオルローフが革命思想を受容したとすれば、それは検閲本の読書が原因なのではなくて、彼らの周辺にいる人物の影響からなのである。²⁴⁸⁾

この証言では、ニーゾフキンも労働者に単純な二分法をあてはめ、ファブリーチヌイエを無学者として蔑視する一

方で、熟練工(masterovye)（ここではザヴォツキエという用語は出ないことに注意されたい）にたいして盲目的とも思われる信頼感を寄せている。道を踏み外したとでもいいたいかのような熟練工の代表例として、オブノルスキーらが登場している。さらに、読み書きが果たす機能を信じ、検閲本を用いるなどすれば、それがあたかも操作可能であるかのようにみなしていた節がある。全体的には文化啓蒙を第一として、それを実現かつ操作可能とする楽観論とでもいえるものであろう。

ゼルニクはニーゾフキンの上の証言でいう「(オブノルスキーらの) 周囲にいる人物の影響」論をあたかもなぞるようにして、オブノルスキーが長期間、学生たちとつきあいがあり、労働者の間で「最も学生的」といわれたオルローフやヴィノグラードフと仲が良かったことから、彼自身は労働者の世界から足を洗おうとしていたとまでいうのである。²⁴⁹⁾ つまり、人民(この場合は労働者)の世界から学生・インテリのそれへ実質的に入り込んだ人間としてオブノルスキーをみようというのである。オブノルスキーは容易には架橋しえない(はずの)「向こう岸」へ行ってしまった、そうした意味で彼の無言の出発は労働者側にとりショックであったとみるのであろう。別言すれば、ゼルニクは欧米史学に伝統的なロシア社会二重論を労働史の世界にも適用しようとしていることになる。

ゼルニクがオブノルスキーの個人的な環境や資質に注目するのは研究史上明らかに新味ではあるが、この主張の難点の一つは一旦は労働者を「裏切る」ようにしてまで外国に出たオブノルスキーが帰国して今一度、労働者の世界で非常な影響力を行使し、新しい労働者組織(『ロシア労働者北部同盟』)の代表者となったパラドックスをよく説明しえないことである。おそらく、これは固定的な二重論の枠組みではよく理解し得ないであろう。オブノルスキーのような新しい人間類型は彼だけでなく、いわば「労働者=インテリ」として、たとえ数的にはわずかではあったとしても、一定の位置を都市社会内部に確保するようになったこと、さらに公衆(の一部)がその存在を評価するようになったこと、こうした全般的な社会状況(時代性)の出現を抜きにして、オブノルスキー個人だけを取り出して考えることはむしろ空しいであろうとさえ思われるのである。「労働者=インテリ」といった概念に注目し、敢えて採用することに積極的な意味合いがあるとしたら、それがこのようにして「科学と文化」の時代相をよく反映したからである。

2) 労働者集会と労働者組織

1873年末、労働者D・N・スミルノフの部屋でヨールカ(クリスマス)の集会が行われた。その主導権をとったのは、やはり労働者のS・I・ヴィノグラードフであった。彼は

1850年頃にヤロスラヴリ県に生まれ、ペテルブルグへ出てきて工場労働する中でチャイコフスキー団による宣伝を受けた人である。72, 3年にニーゾフキンのサークルに入り、ヴィボルグ区の部屋で彼と同居するまでした経験を持つ。その集会にはネヴァ、ヴァシリエフスキー島、ヴィボルグの各区から多くの労働者が参加した。ここでは、古い基金を文庫と相互扶助に二分する方針が決められ、後者はレジスタンス基金（kassa soprotivleniia）あるいは抵抗基金（kassa protivodeistviia）と命名された。その基金の目的は何よりも労働者救済（政治的信条、ストライキ、失業を理由とする失職への対応）にあった。構成員は両基金に賃金の1%ずつを拠出することになった。合計して給料の2%であるから、決してどうでもよい金額ではない。これら新しい基金はペテルブルグ労働者による独自の組織化のためのいわば起点となるであろう。選挙でS・K・ヴォールコフとD・N・スミルノフが選ばれて、それぞれ文庫基金の会計係と図書掛になった。相互扶助のほうはA・V・ラヴローフが会計掛になった。²⁵⁰⁾ 労働者たちのこのようなてきぱきとした動きは自立的で理知的な印象さへ受ける。

翌年3月3日にナルヴァ区のイズマイロフスキー連隊を会場にして、これら基金の運営に関わる労働者集会が開かれた。その場で、ニーゾフキンは学生たちインテリとの関係論一般に話を広げ、チャイコフスキー団が一揆主義者（プンターリ）的に労働者に対応しようとしていると非難した。彼は、学生、とくにチャイコフスキー団員のクレメンツと関係が良かった金属工I・A・バーチン（Bachin）を引き合いに出して攻撃し、²⁵¹⁾ その上で労働者たちに独自たれとってその場の共感を得ようとした。ニーゾフキンのほかに、ヴィノグラードフ、ペテルソンが団との関係を終わらせるよう呼びかけ、結局は全会一致でそれは認められることになった。この集会に至るまでに労働者側の意向（独自路線化）はすでに固まっていたとみなせるから、ここでインテリ側（ニーゾフキン）の影響力を過大評価するのは避けなければならない。バーチンに対する個人攻撃に関していえば、バーチンら一部の熟練工が学生たちとは何かと距離をとって逆にその反発を買うまでに自立的になっていたこと²⁵²⁾ にたいする嫌がらせといった側面を否定できず、個人的にはバーチンを甚く傷つけることになった（後の彼の自殺との関連性は検討課題であろう）。そのように見ること、で、「労働者＝インテリ」論を本格的に展開しうる環境が整うであろう。

すでに本節に登場したヴィノグラードフ、ヴォルコフ、スミルノフ、バーチンといった人たちは仮に「ニーゾフキン派」とでも命名しうる労働者群の一部に該当する。この派に共通するのは、さしあたり、次のような社会的相貌である。彼らの大半は1850年前後の生まれで、この時期に20

歳前半と若く、トヴェーリ県やコストロマー県などから出稼ぎのためにペテルブルグ市へ流入した農民身分が多く、上京して工場に入り、そこでチャイコフスキー団による工作を受け、自らも労働者文庫の運営に携わるなど労働者宣伝に従事した人が多い。彼らは等しくラヴローフに共感を寄せていた。しかも、こうしたことがペテルブルグ市の限られた地域で発生したことも特徴的であり、狭い都市空間に初めて成立した濃密な社会諸関係が彼らを「労働者＝インテリ」の道を歩ませる方向に作用したと考えられる。

「ヴ・ナロード」運動が挫折すると、社会運動を取り巻く状況は確実に変化し、革命的インテリたちは戦術の見直しを迫られた。村々を飛び回るような宣伝ではなしに、今度は一箇所に腰をすえる「計画された煽動(planomernaia agitatsiia)」が持ち出された。²⁵³⁾ クラフチンスキーは、実に遅くそれを1878年からと（誤って）いうのであるが、こう書いている。「運動の性格は一変した。広範囲なプロパガンダ、すなわち、あるいは農民たちを蜂起へ立ち上がらせることが出来たかもしれない唯一のものは放棄され、一度定めた土地で、多少とも経験的な活動をするためにそこに住み着く小さなコロニー、いわゆる「入植(poseleniia)」がそれにとって代わった。²⁵⁴⁾ この一方で、「平和的宣伝」を認めず、政治的自由の達成を否定し、一揆主義の旗を高く掲げて、理想としての「自由労働者共同体連合(federatsiia vol'nykh rabochikh obshchin)」の実現に拘り続けるバクーニン主義の根強さも認められたのである。

かくして、都市労働者の間における宣伝活動は後退をはじめたのだが、1874, 75, 76年とペテルブルグでそれをめぐりどのようなことが具体的に進展したのか、依然として知られることは少ない。ただ推測されるのは、労働者と学生インテリとの間で生じた緊張関係が様々な維持され、あるいは強化されたであろうことである。つまり、両者の関係はますます相互に自立（律）的になる方向を辿ったと思われる。次のようなスミルノフとディヤーコフの事例は辛うじてそうした関係を示すものとして注目される。²⁵⁵⁾

I・T・スミルノフはトヴェーリ県に農民身分として1852年（48年説あり）に生まれ、ペテルブルグのトロントン工場に少年工として入り、やがて機械組立工になった工場労働歴の長い人である。どのように修得したかは不明であるが、読み書きが出来たのは周囲の環境のなせる技であつたろう。彼はシネグープと近しかったが、73年の段階で、チャイコフスキー団のペロフスカヤやロガチョーフと知り合い、同工場の労働者組織に従事することになった。同年末にはV・イヴァノフスキー（Ivanovskii）、I・ロジェストヴェンスキー（Rozhestvenskii）、A・セルヂュコフ（Serdiukov）らのサークルに入って、シリッセリブルグ街道で労働者向けの宣伝をした。すでに触れたP・アレク

セーエフ (Alekseev) とも親交があったといわれるから、この首都において労働運動関係者のなかでかなり知れ渡った人物であった。そのこともあって、革命的なインテリたちも彼には厚い信頼を寄せ、V・イヴァノフスキーはスミルノフを外科医学アカデミー図書館の守衛に推薦したが、この話には裏があって、彼は同時に非合法的な学生図書館(室)の保管者 (khranitel') になったのである。これは何よりもスミルノフの知的水準の確かさが認定された結果であったが、このような「有望な労働者」を図書係に充当するところに当時の労働者事業 (rabochee delo) がいかに文書による情報普及を重視していたか、また文書を通じた運動の進展に期待を寄せられていたかが分かるのである。さて、スミルノフの歩みにおいて注目されるのはペテルブルグ帝国大学生 D・ディヤーコフ (D'iakov) との出会いである。ディヤーコフは1854年にヴォゴロド県に生まれ、当地の神学校セミナーを修えて大学に入ったのだが、とくに同郷でセミナーと大学を通じて親交を結んだ A・I・シリャコフ (Siriakov) のほか、労働者の V・ゲラシーモフ (Gerasimov) や D・アレクサンドロフ (Aleksandrov) らと74年12月からヴィボルグ区のチェシェール工場 (fabrika Cheshera) 労働者にたいする宣伝を始めたのである。彼はさらに身銭を切って上京中の農民を故郷に宣伝に向かわせたり、兵営の下級職をもその対象としたりしたのであるが、薬莢工場労働者の宣伝工作を企てていた75年4月に逮捕された。²⁵⁶⁾ ディヤーコフは農村革命を志向し、それにこだわった人であったが、これにたいしてスミルノフは書物を単に労働者が農民を反乱に焚きつけるために用いる手段にするだけでなく、労働者自身がそれによって感化され主体的に変身することを望む人であったし、さらに彼の宣伝は労使関係の理想像を示すことにあったといわれる。²⁵⁷⁾ これは急進的アナーキズムを志向する部分と都市にあって政治問題に対する関心を増大させようとする者との間の緊張した関係として読み取ることができるであろう。

ようやく1875年末から翌年にかけてペテルブルグの労働者組織が本格的に立て直されたことは当局がいわゆる「友人協会 (Obshchestvo družei)」事件をフレーム・アップして、弾圧にかかったことからうなずけるであろう。1877年12月10日付のペテルブルグ控訴院検事の起訴状によれば、それは労働住民を発達させようとして、さまざまな書物を通して、その不利かつ不幸な状態を明らかにし、そうすることで現行政府と諸階級の不平等とを廃絶してより望ましい状態へ移行することを目標としていた。²⁵⁸⁾ このように、明らかに、当局は宣伝の力に敏感になっていた。すぐ後に検討する「カザン・デモ」に関する手稿なるものもこの団体に関連して行われた、禁書発見のための一連の家宅捜索により見出されたとされるのである。この「協会」を含め、上

述した二つの集会に参加したとされる者20人前後の顔触れを検討すると、K・A・イヴァナイン (Ivanainen), A・N・コンドラチェフ (Kondrat'ev), D・N・スミルノフ, A・N・ペテルソン (Peterson) 兄はこれらすべてに顔を出している。既出のスミルノフ以外の者について簡単に言及すると、イヴァナインは1857年生まれのフィン人で薬莢工場の組立工をする「ニーゾフキン派」の有力メンバーである。コンドラチェフはやはり1857年ころの生まれで、海軍工廠で組立工をしている。そして、A・N・ペテルソンは当該期ペテルブルグの労働運動で有名なペテルソン三兄弟の長兄であり、1851年、下士官の息子として生まれ、生地コルピノ (ペテルブルグ県) の工場学校に学んだ後、仕上げ工として薬莢工場工具製造所に勤めた。71年末から運動に参加し、翌年末にはニーゾフキンのサークルに出入りするようになった。73年からは、チャイコフスキー団で最も労働者工作に熱心であったシネグループのサークルにも顔を出した。S・ヴォールコフおよび上のスミルノフと同居し、彼らの部屋が宣伝活動拠点にもなった。すでに触れたように、労働者グループとチャイコフスキー団との決裂提案をニーゾフキンやヴノグラードフと一緒に行ったのは彼である。「193人裁判」のあと、警察の監視下におかれ、自らも関わったとされる「友人協会」事件後は一時、カルーガに逃れ、そこ「土地と自由」結社支部員になり、後出する「北部同盟」にも参加した人である。²⁵⁹⁾ 話がいささか先走ったが、さしあたり、彼ら「労働者＝インテリ」たちがこの時期のペテルブルグ労働者組織再建に中心的な役割を果たした人たちであったとみてよいであろう。

1876年春に、V・ヤコヴレフ [サヴェリエ] が A・カールポフにその部屋をサークル集会に提供するよう依頼して、そこをヴォールコフ、スミルノフ、ペテルソン兄弟、ウシコフ、イヴァナイン、オブルチニコフなどが訪れ、文庫基金創設問題を議論し、会計係を選出するなどした。ここの集会はひと夏、続いた。秋から場所を移した集会には、ハーゾフ、M・ナタンソンも参加した。ナタンソンは労働者の間で宣伝を行った一揆主義者のなかではおそらく最も知られた人物である。彼は外科医学アカデミー学生であった時からの活動家であり、同校を退学になった後、やはりペテルブルグに所在した農業高等専門学校 (Zemledeľ'cheskii Institut) に入り直したが、ベルヴィ＝フレロフスキーの著作普及を図ったかどで首都所払いになり、ようやく76年に戻ってきたのであった。²⁶⁰⁾ したがって、彼とハーゾフはここで運動を再開するのに丁度都合のよい組織を労働者たちの間に見出したことになるであろう。彼は労働者の一部に影響を与え、A・G・ボグダノヴィチ、ポドレフスキー、N・クズネツォフ、L・ザックらが彼と行動をとともにしていた。しかし、ナタンソン (ら) は

その夏に顔を出しただけであった。後に判明することであるが、彼（ら）はこの時、革命諸勢力の統合を模索していたのであり（その結果として登場するのが〔第二次〕「土地と自由」である）、明らかにペテルブルグに止まらない動きと志向性を備えていたのだから、それらは当時の労働者世界の雰囲気とは微妙にずれていたかもしれない。この集会は翌77年3月まで続き、4月にこの組織とは無関係の者をふくむ82人が逮捕される「友人協会」事件として「立件され」、解体したのである。²⁶¹⁾

この新たなサークルに集った労働者は、トロントン工場からの4人の織工を除くと、ほとんどはヴァシリエフスキー島の薬莢工場工具製造所（Instrumental'naia masterskaia）に働く人たちであった。²⁶²⁾ この工場は、ちょうど、1873年に再編されて、6部門制を採用するようになったが、この工具製造所はその1部門であった。労働力配置は特徴的で、他部門ではほとんどがいわば半有資格労働者である工作機械操作工（stanochniki）であったのにたいして、ここには最も専門的技能を有したいわゆる有資格労働者が集中していた。²⁶³⁾

ここでは普通、宣伝は次のようになされていたいわれる。まず、学生とこの工場に働く大砲士官（artilleriiskie ofitsery）がこの部門の「文化的労働者」数百人（neskol'ko sot chelovek）を対象として工作し、その宣伝を受け入れた「文化的労働者」たちが残りの労働者たちにたいして説得を試みたのである。²⁶⁴⁾ ここでいう「文化的労働者」部分から一定数が（「友人協会」のような）独自の労働者組織をつくる動きを見せたと考えられるから、彼らの動向は格段に孤立したものと考えすることはできないであろう。

この他に、このサークルにはプチャーロフ工場からはA・ゲラシーモフ、S・シミット、A・プレスニャコフが、ロシア鉄道会社機械工場からはK・ストーリーベルグ、V・クゾーフコフが、マクフェリソン工場からはカールボフ、シカローフらが、そしてバルト鉄道からはN・リーシンがそれぞれ参加した。彼らは首都各地の労働運動の主要な活動家たちであり、こうした動きを見ると、これは単なるサークルの域を越える組織的中心たらしめていたのかもしれない印象を受ける。²⁶⁵⁾ 彼ら労働者たちがナタンソンらの動きと必ずしも調和的であったとは思われない点も今後の検討課題として残るであろう。

3) 「カザン・デモ」の真相

まだ「友人協会」が活動していた、1876年12月6日、ペテルブルグの都心（ツェントル）にあるカザン大聖堂前広場でいわゆる「カザン・デモ」が発生した。これは近代ロシア史において労働者階級が初めて公然とその姿を誇示したもののとして顕彰されるほどに著名な出来事である。例え

ば、当該分野においてソ連史学界の権威であったコロリチュークは自らが編集したこのデモに関する資料集に「ロシアにおける最初の労働者デモンストレーション」という表題を付けている。²⁶⁶⁾ しかし、残念なことに、私にはそうした規定の仕方は事実関係の認識に始まりその理解に至るまで史的な検証にとうてい耐えることはできないと思われる。ここでは、当時の首都の社会的雰囲気的一端を探ることで本論の展開に資そうと欲して、この事件を取り上げることにはしたい。実の所、コロリチューク編集の資料集は丁寧に読むと大いに役立つ内容を沢山に含んでいるのである（以下、単に資料集という場合はこれを指す）。まず、この事件に関わって裁判にかけられた21名にたいする検察側の起訴状の要旨を箇条書きすることから始めよう。

- 1) この日（12月6日）、月曜日、カザン大聖堂前に集まった150人ほどの若者たちは服装から見てその大半が学生徒であった。
- 2) その中で背の高い金髪が叫ぶようにして、政府の抑圧的姿勢と不正、チェルヌイシェフスキーなど政治犯の流刑、ロシア人民全般の貧困状態などを非難し、集まった者たちはそれに対して「ブラボー、ブラボー」と応えた。
- 3) 「土地と自由」と書かれた赤旗が立ち、直ぐに警衛隊との衝突が生じた。
- 4) デモはネフスキー大通りとカザン広場の角まで〔ごく短距離〕行われて、終わった。（124頁のペテルブルグ都心図を参照されたい）
- 5) その間に次の21名が逮捕され、起訴された。その内訳は、外科医学アカデミー学生19歳、22歳、18歳の3人（氏名も判明するが略す。以下同じ）、交通技師学校生1人（年齢不詳）、帝室芸術アカデミー生1人、21歳、一代名誉市民24歳、21歳、22歳、21歳の4人（うち1人は高等技術専門学校生）、商人身分の息子たち2人、24歳と20歳、町人身分3人、25歳と不詳2人、農民身分3人は16歳、23歳、18歳、貴族身分の娘1人22歳、婦人医学校聴講生で官吏の娘1人21歳、少佐の娘1人20歳、そして商人の娘でユダヤ人1人16歳であった。
- 6) 赤旗を持ったとされる Ia・S・ポターポフについての記述。彼はトヴェーリ県の出身、キーエフで逮捕され、一旦は故郷へ戻ったが、この年（76年）9月にペテルブルグへ来て、かつて働いたことがあるトロントン工場へ入ったと当初の尋問では供述した。しかし、後日、判明したのは、ペテルブルグでは定職がなく住所不定であり、しばらくは同上工場に働く叔父や兄弟の世話になっていたということである。参考までに紹介すれば、検事補は「1876年12月6日、ペテルブルグ中心部にインテリとならんで労働者が出現したことは

説明不能である。パンを求めて働くポターポフとインテリ青年を結びつけるものは何か。彼らに共通する利益は何か。この事態は簡単に見逃すわけにはいかない。」²⁶⁷⁾という。

7) 起訴状後半は一般市民たちの多くの証言を繰り返し紹介するが、それらでは「学生たちが反乱している」という叫び声を聞いたという複数の証言が目立つくらいであり、格段に特記すべきことは見当たらない。²⁶⁸⁾

これらが起訴状の主内容である。裁判官は正確にそれをなぞったうえで、被告たち全員に反政府的見解をともし、カザン広場に結集し群衆となって反国家秩序的な演説を行い、「土地と自由」の赤旗を掲げて広場を行進し、警官に阻止されたことは刑法第252条第2項に違反するとして有罪判決を下した。主犯格の扱いを受けたのは一代名誉市民のボソリュポフという人であり、彼は10年から15年の不定期懲役刑を言い渡された。²⁶⁹⁾

プレハーノフはこの事件を回想して、少し前の同年春〔3月30日〕、看守に殺害されたといわれる学生チェルヌイショーフの葬儀デモをインテリが行い、それを見た労働者たちが自分たちでもデモをしたいと思うようになった。その準備には、「土地と自由」派のインテリが協力したというのである。²⁷⁰⁾ ここには労働者の思いと「土地と自由」革命派と労働者の接触が述べられている。また、この時期の最も信頼するに足る回想記を書いたと評されることが多いアプテークマンは「企みにおいては (po zamysku)、〔それは〕専ら労働者のデモであった」(下線強調は引用者)という。²⁷¹⁾ 彼は、デモに関してその意図と実行のうち、かろうじて労働者の関与を意図のみに限定している。労働者が実行(つまりスト参加)したか否かには触れていないので、これ自体が苦しい言い訳的議論になるのだが、明らかにプレハーノフの方は、すぐ後にみるように、労働者による両方への関与を強弁したいのである。コロリチュクはデモ準備は労働者のみによってなされ、そこにインテリの参加はなかったとみている。²⁷²⁾ いずれにせよ、これらすべての議論は的確な資料的裏づけをもたない。

資料集が紹介する、あるナロードニキの手紙(12月11日付)には「多くの工場で清算解雇された労働者のなかに現状への不満を訴えるためにデモをやろうと考える部分があった。〔そうした雰囲気からか〕インテリの中にはデモに3000人の労働者が参加すると予想する者もいたが、実際には精々50人しか出なかった。」という記述がある。²⁷³⁾ この時期に首都の労働者の間に漠然とした不満が蓄積されていたことは確かのように(このことは上に触れたプレハーノフの話にもうかがえる)、それが革命的なインテリの希望的観測を誘ったことは否定できないであろう。

また、ある告白によれば、11月頃にイサーキ寺院周辺で

〔別の〕デモが予定されていた。²⁷⁴⁾ カザン大聖堂と近距離にあるそこでのデモについては、ある下士官の娘は死亡した国事犯の追悼ミサのためにそこに出向いたといい、²⁷⁵⁾ 12月5日に同所でデモがあるという風聞があったとする断片的な証言や記述が残されているが、²⁷⁶⁾ ここではこの裁判にかけられた高等技術専門学校生 M・チェルナフスキー(Chernavskii)の回想を参照しよう²⁷⁷⁾。彼によれば、12月6日の2、3週間前に「急進的な」学生の間に同寺院前でデモがあるという噂が広まった。これは幾つかのバリエーションをもって市内に流布されたが、そのひとつが〔折からの露土戦争をめぐり〕セルビアにおけるロシア人義勇犠牲者にたいする追悼ミサから〔デモは〕始まるというものであった。5日に彼はそこへ行ってみると、6日のカザン広場よりも多少多い若者が集まっていたが、ミサもデモもなされなかった。〔それ故、そこで〕翌日、カザン大聖堂前でデモをやるといっても人びとは信じなかったであろう、と回想している。そうであれば、プレハーノフがいうように、「全体として人びとは準備していた」などといった話ではとうていありえない。

プレハーノフは、さらに、12月4日夜の集会で活動家たちがスト決行を決めた。そこで人民の理想と要求を最もよく示すものとして「土地と自由」の赤旗を出す考えが出た。5日に労働者たちの住居を回ってデモの予定を知らせた。ラヴローフ派はそれに反対し、一揆主義派労働者は参加した。さらに、港湾労働者と学生もデモによく参加し、建設労働者は不参加であった、という。²⁷⁸⁾ これらのことは、例えば、フィグネルが述べることに基本的に一致しない。彼女は労働者ではなく、「土地と自由」派がデモを企んだことを強調する。同派は労働者を出来るだけ多く参加させようとしたが、〔当日が〕「聖ニコライの日」の前日で休みにあたっており、労働者たちは家にいてデモには青年インテリしか出なかったというのである。²⁷⁹⁾ 旧ソ連史学の場合、デモを「土地と自由」派の企てとする傾向が強かった。例えば、回想記には何の論拠もなしにこのスト組織・主導者を M・A・ナタンソンとするものがある。²⁸⁰⁾ 「土地と自由」派の「中央サークル」によって準備されたが、そのメンバー全員は必ずしもそのことを知らなかったなどと苦し紛れの議論をする人もいる。²⁸¹⁾ 客観的に考えると、私も彼ら革命派の何らかの関与を積極的に否定しようとは思わない。

当日の現場に居合わせた者について、幾つかの証言が残されている。12月6日付けの特別市長官トレーポフがツァーリへあてた報告書は「若い男女約150人」²⁸²⁾、同日の秘密諜報員報告では「男女学生ら約200人」²⁸³⁾、やはり同日付の現場に居た警官に対する尋問調査には「広場群集300から400人の大半は明らかに学生」とあり、²⁸⁴⁾ さらに12月10

日付けの同聖堂関係者の証言は「集まったのは男女学生約150人」²⁸⁵⁾ という。先に引用したチェルナフスキーは150から200人でその中には労働者は大変に少ないとする。²⁸⁶⁾ 私が知る最大の数字は在外の『前進』誌の1000人である。²⁸⁷⁾ すでに見たように、少なくとも逮捕された者を見る限り、参加者は若干の女性をふくむ20歳前後の学生を中心とした青年たちであった。

これらを総合すれば、その時に集まったのは学生を主体とした150人ほどの若者であったということになる。先に見た起訴状が「服装から見て大半が学生」というのは、当時の学生たちがつぎのような特徴的な恰好をしていたことによるのである。「彼らの大半は〔いまだ〕夏服で、一部は格子縞の長いウールの肩掛けをしていた。また多くが眼鏡をかけ、髪は長く肩まで届くほどで、長い胴をしたロシア風の長靴を履いていた。」²⁸⁸⁾

結局、プレハーノフの回想は労働者の主体的なデモ参加を意図的に強調して虚偽の観察を述べるものであり、その真意は史実の復元などにはなかったことはよく分かるのである。しかも、彼の回想にはふつう彼自身が行ったとされる「演説」に対する具体的言及がないのも解せない点の一つである。後年、ソヴィエトの革命史料雑誌は「カザン・デモ」30周年を記念して、デモ直後になされたプレハーノフにたいする家宅捜査資料を紹介して、彼を「有力なデモ組織者のひとり」「デモでの『演説者』」であったことを間接的にでも立証しようとした。その編者であるN・ヤーコヴレフによれば、当日、彼は「同志の労働者たちの支援を得て」逃げ果せたが、ネフスキー大通りで彼の妻であるナターリヤ・スミルノーヴァが逮捕されて、12月10日の家宅捜査となったのである。その搜索調書は押収した「様々な教科書」33点などを列挙するのみで、別に彼のデモ参加を立証するものは全くない。²⁸⁹⁾

近年、このデモ事件の分析でおそらく最高の達成を見せているP・S・マッキンゼイは何よりもそこでのラヴローフ派と一揆主義派の対立に着目している。デモが、プレハーノフのいうように、労働者自身が計画したものであるのなら、何故に労働者の参加は少なかったのかと問題を立て、ラヴローフ派はデモを労働者の利益に反するものとみなし、この考えを労働者側が受け入れたことをその理由のひとつにしている。改めていうまでもないが、これはこの時期の首都におけるラヴローフ派の影響力の大きさを正当に評価したうえでの議論である。「ヴ・ナロード」失敗を従来の宣伝が言葉だけのものであったと認めて、「行動による」それを重視する考えが1875年ごろから首都の革命的インテリを捉え始めたが、ラヴローフ派はその有効性と実行性とを疑い、相変わらず下層民相手の文化啓蒙路線を維持しようとした。当時、首都では最有力ともいえたこの派が反対し

たので、「カザン・デモ」は規模が小さくなり、失敗したのだというのである。「カザン・デモ」は多数の労働者を引き付けることが出来ず、革命的インテリは今一度、農村農民へと向かい、革命的インテリの対立抗争に嫌気がさした労働者の側はますます彼らの影響から自由になろうとした。この意味で、「カザン・デモ」は「決定的な十字路」となり、〔結果的に、皮肉なことに〕真にロシア労働者階級が組織化されるための基礎を置いた（そのための契機となった）と「評価する」のである。こうしたシェーマは一定の説得力もあって、興味深いものであろうが、難点のひとつはラヴローフ派が労働者にたいして有していたという影響力のあり方を何ら具体的に提示していない点にある。²⁹⁰⁾

このデモに関して、私が知る限り、最もバランスがとれて優れた証言を残したのは、Ia・E・グローヴィチ(Gurovich)である。この人はこの裁判で被告とされた一人で、当時18歳で外科医学アカデミー学生であった。デモから暫く後、1882年5月27日付けの彼の「告白」を次に見よう。

1876年11月にペテルブルグ区の労働者（グロモフだったと記憶する）の部屋で、ヴァリペール、コロトフら何人かの労働者たちと会合した。そこでヴァリペールはある国事犯にたいする判決文の読み上げがなされる時にデモをやろうと提案した。コロトフは公開での判決文の読み上げはすでに廃止されているはずだと異を唱えた。他の者も判決の日が分からないなどと述べてその場は終わったが、後日、12月3日、ヴァリペールがまた国事犯のためのデモを持ちかけてきた。彼はデモは様々な陣営の人にとり印象的なものになるであろうと語った。ある人たちはデモの目的を何か愛国的なもの、例えば、セルビアで死亡した義勇兵に対する表敬のようなものと見間違えるかもしれないのである。その日、彼は私のところで〔デモ〕実行準備会を開き、そこにはコロトフ〔コロトフか?〕とブレシチューエフも出席した。彼は政治犯に対する追悼ミサをして、そこでロシア史上の政治犯たちに触れて革命的宣伝という「人民の大義(narodnoe delo)」の継続を呼びかけることを提案した。彼はそのための演説候補として、ポリヴァーノフ、プリヴァーノフ、プレハーノフ、プリュガーノフを挙げた〔これら4人の名が相似していることは検討するに値することかもしれない〕。さらに彼は欲張って出来ることならば、デモ参加者をカザン広場から冬宮前(Dvortsovaia)まで導き、そこで政治犯の釈放を要求したいとも語った。結局、私はこの話を受け入れ、〔12月〕5日に私自身が知人の間を回って6日にデモがあることを知らせたのである。その際、〔相手次第で〕セルビア義勇兵の追悼ミサをやるとも言った。全体として、このデモは思いつきの計画性なしに行わ

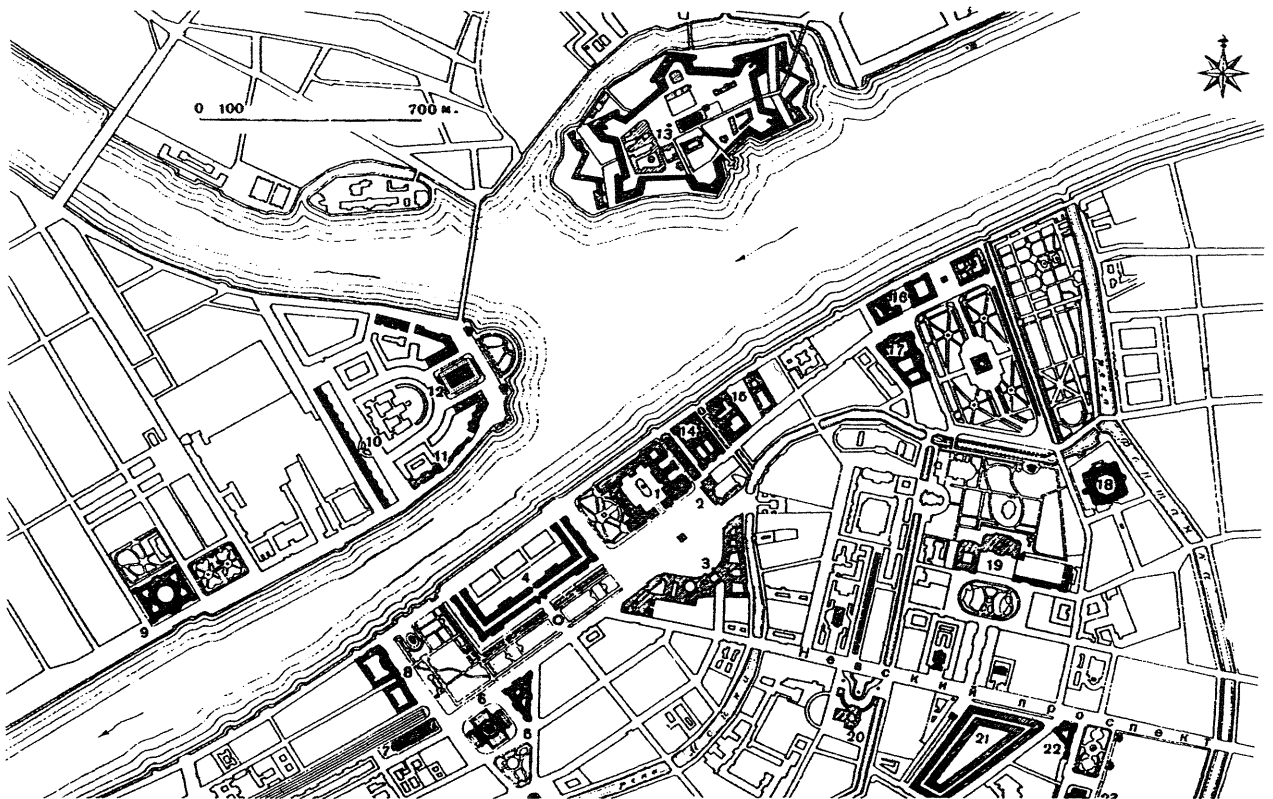
れ、統一性の欠けたものであった。つまり、あるサークルは〔赤〕旗を持って出かけ、別のサークルは政治犯釈放をいうだけのデモをし、第三のものたちは短銃と短剣を持って政府に血の復讐を果たそうとし、そして第四のグループは「セルビアで死んだ義勇兵」の追悼ミサのために出かけたのである。実際に、12月5日にイサーキ寺院で、翌6日にはカザン大聖堂でそれぞれ追悼ミサが計画されていたのであり、デモが5日にあると思った人も多かったであろう。²⁹¹⁾

残念ながら、ここに出てくるヴァリベールら労働者たちについて特定する手掛かりを今の私は持たない。このような証言を残したグローヴィチはその4カ月ほど前に流刑地ヤクーツクで内相に宛てて自分がエカテリノスラフ市の古典ギムナジア生徒だった時、首都からやってきた宣伝家の影響を受けたこと、そしてペテルブルグでは一揆主義派(“Partia deistviia”)に参加したことを告白するような人である。²⁹²⁾ 彼がいうには、「カザン・デモ」は人民の間の宣伝がうまくいかずに沈滞に陥っていた若者に強烈な印象を与えようと企画されたものであった。²⁹³⁾

このように、彼によれば、この「歴史的」デモは労働者ではなく、「ヴ・ナロード」に挫折したナロードニキが仕

掛けたのであり(ナタンソンらの関与の可能性を補強する材料)、プレハーノフは彼らによって考えられた演説候補のひとりであったにすぎない。さらに、このデモは事前に周知徹底されたものでなく、その趣旨も格段に明確に定められたものではなく、折からの露土戦争にたいする愛国的熱狂さえも参加動員に活用しようとするものであった。従って、この「デモ」は労働者階級の独自の旗揚げの示威行為といったものからはほど遠く、より全般的に沈滞に陥っている社会的雰囲気を目覚めさせようとして企てられた一種のイベント(興業)なのであった。「グローヴィチ説」は真剣に検討すべき内容をともない、私は個人的に共感するところが多いのであるが、従来の歴史学はこの存在をほとんど無視してきたのである。

「デモ」の舞台にされた「カザン広場」はペテルブルグの都心部に位置し、周囲にはスミルジーン(Smirdin)書店など当時の主要書店が集まっており、現在でも市民たちが代表的な待ち合わせ場所になっているように、この街にとり真に中心であった。遠くナポレオン戦争の前夜に建設されたカザン大聖堂はロシア教会建築の古典様式をよく伝えるものであり、その周囲には4つの広場が配置されたが、中でも大聖堂前の「カザン広場」は広く、約1万平方サージェンあった。今回の議論に関連してとくに注意すべきな



ペテルブルグ都心図

〔典拠〕 I.A. gorov, *The Architectural Planning of St. Petersburg*, Ohio University Press, 1969, 85. 図中の下側、ネフスキー大通りに面して「カザン大聖堂」(番号20)がある。

のは、その「祖国戦争」勝利を記念して民族の軍事的栄光を讃えるために、1818年のアレクサンドル一世の命により、M・I・クトゥーゾフ（Kutuzov）とM・B・バルクライ＝デートーリ（Barklai-de-Tolli）両将軍の記念碑がこの広場に建立されたことである。²⁹⁴⁾ 言わずとも知られるように、この二人は元帥としてナポレオンとの「祖国戦争」を指導し、勝利に導いた英雄である。もはや想像するほかないが、「デモ」にあたり軍事的愛国心の発露に適したこの場所が選択されたのは、折からの露土戦争熱の存在があつたことであろうとも思われるのである。

【補説】 手稿「1876年12月6日ロシア人民党の集会について」について

「カザン・デモ」に関して、表題の手稿が存在している。執筆者名はなく、末尾に「1877年1月、サンクト・ペテルブルグ」とあるだけである。これはモスクワのN・N・ハーゾフ（Khazov）宅の捜査で発見されたから、彼が作成に何らかの関与をし、文中に「我が人民党(nasha narodnaia partiia)」といった表現が多用されていることから、通例は「土地と自由」結社の中央近くにいて労働者宣伝に従事した者（たち）の手になるであろうと推定されているものである。ハーゾフ個人の作をしては特定しえない。²⁹⁵⁾ ハーゾフは1846年頃にペテルブルグで生まれ、市中のギムナジアに学んで教師資格をえたが、73年にO・カナーノヴァ（Kananova）が指導するグルジア人革命サークルおよびドルゲーシン・サークルに接近し、翌年、禁書普及の嫌で逮捕された。上に触れたように、76年秋からはナタンソンとともにペテルブルグの労働者のあいだで熱心に宣伝活動し、「長老（dedあるいはdedushka）」の渾名を貰った。「友人協会」や「土地と自由」にかかわり、「カザン・デモ」間際の秋口からはカルボフの部屋で行われた「友人協会」の集会によく顔を出していた。「デモ」の後、モスクワに移ったが逮捕され、77年4月からの「友人協会」裁判にかけられたのである。²⁹⁶⁾ 彼のほかに、彼と近かったナタンソンは当然のこととしても、さらにA・ボグダノヴィチ（Bogdanovich）やL・ザーク（Zak）をその作者に上げる場合もある。²⁹⁷⁾ つまり、いわゆる「ナタンソン・グループ」であるが、彼らが何らかの関わりをこの件に持っていたとすれば、この手稿を通して、彼ら一揆主義者たちが首都の1870年代労働運動にどのようなスタンスを取ろうとしていたかを窺い知ることができるであろう。さて、手稿は「カザン・デモ」を引き合いに出して、次のような議論をしている。

12月6日（「カザン・デモ」）には教育ある者と労働者階級とに属する数百人のロシアの人びとが集った。彼らは

政治犯を追憶し、本格的な農民改革を望んで結集したのであり、人民のためによりよい生活条件を実現することが不可避であることを自覚する、より発達した都市労働者たちである。このことは人民解放の事業がいまや人民自身の手に移り、しっかりとしたものになってきたことを示している。ロシアの政治生活における諸運動にロシアの労働階級の自覚的な参加が開始された。（下線強調＝原文）この重大な歴史的事実は、ロシアにおいてヨーロッパ文明の普及の後を追う、経済条件の変化、多様な社会現象の影響と作用だけでなく、人民の利益のために兄弟的な鎖で結ばれた活動家たちの少なくともこの15年間の努力の結果である。ここにインテリと人民が同盟したということである。デモの赤旗「土地と自由」はロシアの〔労働者〕階級の少数だが最も発達した部分や巨大で無教養な大衆のあいだで未来のより良き体制を目指すものである。「12月6日」は生活の新しい精神と古いそれとの衝突である。すでに何人かのロシアの人たちは自由な言葉で語り始めている。この集会は新しい力の産物であり、新しく生命力に溢れた力が立ち上がったのである。ここでは政治的な自由が表明された。ロシアでは政治的に解放された生活の道を行くのはリベラルではなしに夢想家たちである。12月6日のデモの表面的な不首尾さよりもその内面性に着目すべきだ。それはロシアで最初の自由な公然たる政治集会であり、都市住民のあいだで社会主義的宣伝が貫徹した結果でもある。こうした集会は宣伝の有力手段だ。いまや、政治的煽動を企てるべき時だ。更なる発展のために行動綱領を拡充すべきだ。密集している都市労働者の間で宣伝はうまくいっている。しかも、彼らは農村へと社会主義思想を伝播するから、都市労働者重視にわが綱領を改正しなくてはならない。都市労働者を人民解放事業へと引き込むために、人民党はその行動綱領を拡大すべきだ。労働者の側から、12月6日にある程度の（izvestnyi）参加とイニシアがあったことは疑いないのである。²⁹⁸⁾

手稿の要旨は以上のようなものである。明らかなように、これはこのデモを手がかりとして（正当化の根拠として）、政治的自由を自己主張するまでに成長した労働者階級を社会変革事業に引き込もうとする農労（労農にあらず、「農」が主導し中心となる）同盟路線の追求を主張しようとするものである。すでに述べたことに照らして、これは必ずしも実態には正確に対応してはいない認識に立脚するものであり、明らかに手稿作成者（たち）の想像力と構想力の思想的産物である。「カザン・デモ」の実態に係る諸問題とそれを契機にして自己主張しようとする主体の存在（およびその内容）に関する問題系とは必ずから区別されるべきである。

ここで特徴的なことは、都市労働者の活動に依拠して（あるいはそれを補助的手段に使って）、革命戦略を都市から農村へという方向で展望しようとしていることである。つまり、ロシアにおいて（も）、必ずしも農村だけではなしに都市労働者をも巻き込んで全国的な変革を志向しようとする勢力が明瞭に登場してきたということである。「カザン・デモ」がこうした見透しと希望的観測をもつ主体の存在を後世に残す契機になったことには注目すべきであろう。これは「カザン・デモ」の社会史的な大きな意味合いのひとつである。

4)「ロシア労働者北部同盟」の結成

これまで見てきたとおり、1870年代後半、ラヴローフ派はペテルブルグ労働者の間で活動的であった。彼らは75年から諸工場で宣伝をしていたが、77年にはL・S・ギンツブルグ（Gintsburg）とA・タクシス（Taksis）が中心となったグループがシリッセリブルグ街道、プチャーロフ工場、ゴルーベフ（Golubev）工場で宣伝を行った。この年には、A・ブブノフ（Bubunov）、A・ムラシキンツェフ（Murashkintsev）、A・コルシューノフ（Korshunov）、G・ヴィレンツ（Vilents）らがサークルに参加した。²⁹⁹⁾ 外科学アカデミーの学生から革命運動に身を転じて「人民の意志」派の有力活動家になったN・ルサーノフ（Rusanov）によれば、ムラシキンツェフが彼をハルトゥーリン（Kharturin）に引き合わせ、そのハルトゥーリンがさらにK・I・シミット（Shmit）〔あるいはS・A・シミットか？〕とペテルソン兄弟といった労働者活動家たちに引き合わせたというのであるから、³⁰⁰⁾ ハルトゥーリンはラヴローフ派インテリと面識があったことになる。さらにルサーノフは、ハルトゥーリンのような「労働者出身の利口な人たち（liudi umnye iz rabochikh）」には独自に自分たちの党を作る計画があったとまで述べているのである。

ここで議論を進めるにあたって注意すべきは、労働者側にとりラヴローフ派というような組織的あるいはイデオロギー的区分は、一般に厳密性に欠けるだけでなく、運動にあたってさして考慮すべき大きな要因ではなかったということである。次に見る「ロシア労働者北部同盟」（以下、単に「同盟」とする）員のなかにはラヴローフ派にも一揆主義派（ブンターリ）にも惹かれる者がいたのである。³⁰¹⁾ 大雑把な言い方が許されるとすれば、この時期の基本構図は労働者対（革命派）インテリである。これは本稿で革命諸派に関する記述を簡略化した理由のひとつでもある。

さて、本論で「オブノルスキー・パラドックス」として取り上げたオブノルスキーはペテルブルグを離れた後、オデッサ経由でロンドン、パリ、ジュネーヴを回った。特にジュネーヴでは亡命ロシア人革命家たちと親交を結び、ラ

ヴローフと会い、地元労働者たちと知り合い、フランス語を修得して労働者組織関連の文献を読むなどした。彼は74年8月、ペテルブルグに戻るが、当局の追及を逃れるために、翌年2月から一時、アルハンゲリリスク県に身を隠した。その折、同行した男子学生は村娘と結婚するまでして本格的に人民への宣伝に従事しようとしたが、セルビア義勇軍に参加するためすぐに村と妻を見捨てたのである。この小さなエピソードは社会変革を志した者たちを取り巻いていた時代の雰囲気をよく伝えおり、無視できない。³⁰²⁾ 露土戦争の勃発はロシア社会を動揺させ、革命家たちも随分と落ち着かない状態に置かれたのである。³⁰³⁾

オブノルスキーは立ち戻ったペテルブルグやモスクワで76年11月まで労働者工作し、もう一度、77年12月まで西欧へ出た。したがって、彼は「カザン・デモ」には立ち会ってはいない。この時は、ジュネーヴに出来た「ロシアからの政治亡命者救援協会（Obshchestvo posobiia politicheskim izgnannikam iz Rossii）」に参加している。³⁰⁴⁾ 帰国すると、彼はハルトゥーリンとともに労働者向けの新聞創刊を目ざした。彼らは独自の印刷所を持つことを強く望み、さらにジュネーヴ在住のアクセリロードに対してはその新聞編集者への就任を依頼するまでした。³⁰⁵⁾ 彼らは自らの印刷所を確保することに拘った。そうすることが新しい組織を独自なものとするための基礎条件となり、ひいてはその成功を導く有力な手段となると考えたのであろう。彼らは当時、印刷物が有した社会的意義とその波及効果を非常に正確に理解していたと考えられる。この意味で彼らはこの「科学と文化」の時代が生み出した人間であり、周囲の「労働者＝インテリ」たちにとってもそうした志向性は受け入れが可能であったと思われる。モスクワ支部を作る話は展望が開けず、³⁰⁶⁾ 彼らはこの印刷所問題に集中し、オブノルスキーは78年8月にD・F・ザイダー（Zeider）名義の偽造旅券で外国へ出て問題の解決を図ろうとし、彼はペテルブルグの諸サークルの連合体である「同盟」の「代表者」を自ら名乗ったのである。³⁰⁷⁾ そうすることが取引に有利に働くかと判断したものと思われる。明らかに、この発想と機転は「サークルの時代」であったが故に、生み出されたものでもあったであろう。したがって、「同盟」の命名自体は多分に思い付きになされ、その場では組織的構想などをさらに訴える必要もなかったであろうと推測される。したがって、労働者は独自の組織を持たなくてはならない、そのために結成されたのが「同盟」であるとするような議論はむしろ後知恵的な印象を免れ得ない。³⁰⁸⁾ オブノルスキーは警鐘派（nabatovtsy）から印刷所の権利を買い取ることに成功して、ワルシャワ経由で帰国した。³⁰⁹⁾

エスエル党が1903年にロンドンで刊行した史料雑誌は1878年にペテルブルグに戻ったオブノルスキーはハルトゥー

リンら何人かの「宣伝された」労働者と出会う、彼らとともに「同盟」をつくろうとしたと書いていて、³¹⁰⁾ 上に述べたような事由への言及に欠けるきらいがある。P・アクセリロードはより漠然と78年末までに「同盟」の名が付けたというのみであるが、成立の時点に関してはこの時期、つまり78年末を示す文献が多いであろう。³¹¹⁾ これは後に取り上げる同盟の綱領的文書「ロシアの労働者たちへ」が述べることをそのまま追認する立場である。しかし、実態的な存在はもう少し早いようである。極めて少ない「同盟」関係文書のなかで古典的ともいわれる位置を占めたブルツェフの議論では、それは「50人裁判」が終わって「193人裁判」が始まったばかりの「革命的な雰囲気」が非常に活性化して1877年末に形成された。³¹²⁾ としている。プレハーノフなどは、1877年12月9日に葉茨工場信管製作部門で発生した爆発事故の犠牲者（労働者9人死亡）を悼む葬儀がスモレンスク墓地で行われた時にあわせたデモなどを「同盟」形成の契機に見ているから、³¹³⁾ ブールツェフと同じ時期を考えている。しかし、オブノルスキーの存在を重視すれば、すでに述べたように、彼がペテルブルグへ帰還する78年初頭以降の成立を指摘しなくてはならないであろう。すでに触れたアクセリロードの78年末成立説はこれらに比して最も遅い時機を選ぶものである。本論の筆者は77年末から78年初頭あたりに何らかの組織的まとまりを主張する労働者グループがつくられたとみている。

オブノルスキーで何よりも注目されるのは前後3回に渡る外国旅行である。その間の事情に関してはいまだ不明な部分が圧倒的であるが、これら西欧体験が彼に与えた影響は計り知れないほどに大きかったと思われる。正當にもブルツェフはこの点に着目し、オブノルスキーが海外で、政府との政治闘争の必要性を強調する警鐘派と近づきになり、その『労働者（Rabotnik）』編集部と親交を結んだことが彼に多大な作用を及ぼしたと見ている。³¹⁴⁾ つまり、彼に従えば、同派との関係は印刷所の権利売買に留まらず、「同盟」綱領が政治闘争の必要を認めたのに強く作用したかもしれないということである。デイチはジュネーヴでオブノルスキーに出会った印象を「〔彼は〕外見上、西欧の先進的労働者と少しも変わりなかった。とくに彼はドイツの社会民主主義運動がお気に入りであった」と書いている。³¹⁵⁾ ここでデイチがいうことは、明らかにこの時代に近代ロシアが生み出した「労働者＝インテリ」の特徴的な相貌のひとつである。ここでひとつというのは、次のような評の存在を踏まえてのことである。「彼は「同盟」ではD・スミルノフやA・ペテルソンなどの〔これら二人についてはすでに言及した〕先進的労働者のように自らの手で労働者サークルを組織し、日常的活動を行うようなタイプの実践家（rabotnik-praktik）ではなかった。〔同盟の〕指

導的な組織者は〔そうした実践家であった〕ハルトゥーリンであった。〔その一方で〕オブノルスキーは西欧プロレタリアートとロシア労働運動を接触させる役割を果たした。」³¹⁶⁾ これら人物像に関してわずかに触れると、前者は同盟の「綱領」が西欧社会民主主義的色彩を帯びたことからいわば逆算して言及するむきがあるかもしれないこと、後者では、それでも西欧とロシアの労働運動レベルでの接触という現象に触れていることである。1870年代末、ペテルブルグの「労働者＝インテリ」の一部には、彼らの西欧旅行などを經由して、西欧労働運動の成果と経験が流入した。いずれにせよ、そうした内実を備えた「労働者＝インテリ」層の存在がオブノルスキーらの企図にとり共鳴箱となったのである。

オブノルスキーと並んでいわれるハルトゥーリン個人についても言及する必要があるであろう。彼は1857年1月（56年12月説あり）に富農の家に生まれ、郡学校を経て、故郷のヴァトカ県ゼムストヴォが農芸知識の普及を図るために72年に創設した学校に入学し、そこで木工指物に関心を抱くとともに生徒サークルで労働問題の所在を知ったといわれる。³¹⁷⁾ 75年8月、その学校を出て、当時流行っていた「北米行き」を決心したが（その共産コロニーに憧れた）、途中、モスクワで路銀を奪われてあえなくその夢は潰えてしまった。モスクワに留まらざるをえなくなり、鉄道作業場で働いた後、ようやく75年9月、ペテルブルグへ移った。³¹⁸⁾ そこで偶然、ヴァトカの学校の元教師に出会い、彼を通じてナロードニキたちと知り合うことになった。まずラヴローフ派との親交を深め、その労働者文庫に関わった。チホミーロフは彼を回想して、その「かなりの教養」と「正確な書き言葉で話した（govoril pravil'nym literaturnym iazykom）」ことを印象深く語っている。³¹⁹⁾ 76年3月にアレクサンドル機械工場に指物師として入ったが、翌年10月に解雇された。すでに労働者の間で彼の名が知れ渡っていたことが工場当局を苛立たせたのである。78年5月、追及を逃れてヴォルガ地方へ出たが、翌年には再びペテルブルグへ戻り、地下に潜って全市的な労働者文庫の運営に努めたといわれる。ネフスキーがここで言う「文庫の経営」が、時期的に見て「同盟」の活動内容を示していると考えられる。³²⁰⁾ 彼は80年2月にはツァーリ暗殺を試みることになるが、本論にとりこれ以上の言及は必要ないであろう。このように、ハルトゥーリンはこの間に首都の労働運動で格段の役割を果たす位置にはいなかったといえるであろう。

さて、ネフスキーは「同盟」の人的系譜を調べたことがあるが、³²¹⁾ それを私なりにまとめていえば、「同盟」に参加したとされる中心的な活動家の多くは、すでに本論で言及した73年末、74年3月それぞれの集会、そして「友人協会」に顔を出しており、組織の系譜的連続性ないし継続性

は明瞭である。むしろ、オブノルスキーがこの系譜から外れる者として目立つばかりである。「同盟」は組織的な系譜は「由緒正しい」が、この組織者とされた人物は傍系かつ変則的位置にあった。したがって、かくも明瞭な不整合性の所在にもかかわらず、それを当然のようにして、あるいは気に掛けずに、新たな組織的結合へと動いた参加者たちの主体性の存在に着目すべきなのである。このことはもはやオブノフスキーの人間的な個性の局面にばかり還元して説明することはできないであろう。

端的に言って、この組織は運動レベルで格段に顕著な働きをした訳ではない。その有名性の割にはこの部分で伝えられることは余りに少ない。殆ど唯一、目立つとってよいのが、1879年の「新綿紡績」ストライキにたいする関与についてである。1月15日の織工44人の清算解雇がこの争議の発火点になった。労働者の諸要求は「土地と自由」結社の「ペテルブルグ自由印刷所」で秘密裏に刷られた。翌日、シャウ工場の織工代表が共闘を呼びかけに来て、ついに全市的な声明を出すまでに事態は進んだ。24日に「同盟」が出した檄「ロシア労働者北部同盟中央委員会から労働者へ」は「同盟」にはスト支援基金があり、できるかぎり連帯することを表明したのである。³²²⁾ また、この争議の過程で明瞭になったのは、従来、ストライキに批判的であったラヴローフ派の活動家たちがそれを支援するようになったことである。³²³⁾

さて、何よりも「同盟」を有名にしてきたのは、綱領的な文書「ロシアの労働者たちへ (K russkim rabochim)」の存在であったことには大方の同意があるであろう。それは次のような内容である。大よその仮訳を示そう。

1878年12月23日と30日の集会で、ペテルブルグ労働者たちは「全露労働者同盟 (Obshcherusskii Soiuz Rabochikh)」結成の考えに到った。都市と農村の労働住民は力を併せてその利益を追求しなければならない。

「北部同盟」組織は厳しく規定された性格をもたなくてはならない。2名以上の構成員から推薦を受けた労働者のみが成員になれる。それは綱領と社会的教養を事前に弁えていることが求められる。成員は完全に団結し、「同盟」の「共同基金 (obshchiaia kassa)」へ納金しなくてはならない。

「同盟」の事業は10人からなる「選出者委員会 (komitet vybornykh)」が管理し、基金と文庫を備える。毎月1回は総会を開く。この委員会は「同盟」の綱領を採択している地方の諸サークルからなどと関係する。さらに西欧の社会民主主義的諸党派と連携する。

次を諸要求として列挙する。

1. 現存の政治経済体制を打倒するのが最大限目標であ

るが、まずは、経済社会的要求として次を求める。

2. 共同体の自由な人民的連合 (svobodnaia narodnaia federatsiia obshchin)」を創出する。それは労働者の慣習法に立脚して、完全な内部自治と政治的平等性を実現する。

3. 土地所有制度を廃絶し、それを共同体的土地所有に交代する。

4. 労働者のあるべき「連合的組織 (pravil'naia assotsiatsionnaia organizatsiia)」を実現し、生産労働者の手に生産手段と生産物を確保する。

さらに、政治的要求をその社会問題との連携性に留意しながら次のように列挙する。つまり、政治的自由は各自にその信念と行動の自立性を保障し、それは何よりも社会問題の解決を確かなものにするから、次の実現を要求する。

1. 言論・出版・集会の自由

2. 刑事警察と政治犯の廃止

3. 身分的な権利と特権の廃止

4. 義務的な普通教育

5. 常備軍の削減ないしその人民武装への完全な転換

6. 課税規模、土地分与、内部自治などに関する農村共同体の権利

7. 旅券制度の廃止と移動の自由

8. 間接税の廃止と収入及び遺産に相応する直接税の導入

9. 労働時間の制限と児童労働の禁止

10. 「生産協同組合 (proizvoditel'nye assotsiatsii)」の創設、「労働者協同組合 (rabochie assotsiatsii)」と農民共同体にたいする貸付基金と無償信用の創設

「北部同盟」は煽動を行い、これら要求の正当性を労働者たちに分からせなくてはならない。偉大な社会闘争はすでに始まり、わが西欧の兄弟たちはすでに解放の旗を掲げているのだ。われわれには世界を刷新する／復旧する義務がある (na nas lezhit obiazannost' obnovleniia mira)。われわれは世界を刷新しよう／復旧しようとしている。キリストの兄弟と平等にかんする偉大な教義を復活させよう。³²⁴⁾

このようにこの文書は訴えるのであるが、次のような特徴をさしあたり指摘できよう。①全国的な労働者組織の考えが、たとえ端緒的であれ、示されたこと、②都市と農村の労働住民双方に言及して、組織対象を都市の工場労働者に必ずしも限定していないこと、③組織構成員にはかなり高度な資質を求めていること、「社会的教養」をいうのはおそらくこの時代のなせるところであろう。④組織が基金や文庫の維持を通して運営されることも同様に時代性を感じ

じさせること、⑤会費の存在を含めて、組織はある程度、閉鎖的たること、⑥その一方で、西欧労働運動との連帯を模索していること、⑦将来の理想的な体制の基盤に共同体を想定していること、⑧労働のあり方も多分に共同体的であること、⑨政治的要求を仔細に掲げたこと、その基調はブルジョア民主主義的であると同時に人民主義的でもあること、⑩戦術として、宣伝ではなしに、煽動が奨励されていること、⑪「世界を刷新する／復旧する」とした部分について、そこで使用されている obnovenie, obnovit'には新しくするという意味合いとともに蘇らせるというニュアンスもある。いずれに重点をかけて理解するかが問題であるが、ここでは、西欧との連携を求めつつも共同体的世界の十全な実現を望むのが要求の基調であろうから、彼らにとり後者の面に、つまり、「復旧する」ことが本質的ではなかったのか、とする問題提起的な解釈を示しておく。ルサーノフなどはこれは「マルクスの（ラヴロフ的）見解とナロードニキ的なそれが相互に作用しあったなかなか面白い産物」などと評するのであるが、³²⁵⁾ 全体としてはナロードニキ的色彩が優る内容になっていよう。

冒頭にある「1878年12月23日と30日の集会」に前後するか、それらの場でこの文書は作成されたと見るのが自然であろう。これら「集会」に関しては、よくわからないままである。それは「総会」などと称されることもあり、オブノルスキーは23日に欠席し、ようやく30日に出席したらしい。彼はこの組織で言われるほどの存在感はないというのが私の率直な印象である。³²⁶⁾

この檄文はやはり「土地と自由」結社がペテルブルグに持つ秘密印刷所で印刷され、1879年1月24日に世に出た。³²⁷⁾ ソヴィエト期の叙述家ボレヴォーイは1979年に刊行した読み物で、ハルトゥーリンがこの印刷をブレハーノフに依頼したとする一方で、ブレハーノフ、シリャーエフ、ムラシキンツェフらにとりその出現は全く予想しなかったなどと矛盾するようなことをいうのであり、この話自体作り物の感じがする。³²⁸⁾ ただし、「土地と自由」と「同盟」の関係は深かったことは事実である、この場合に限らず、すでに触れたように新綿紡績ストの際、「同盟」から依頼されてその印刷所は檄文「新綿紡績織工から全工場労働者へ」（79年1月16日付）、「シャウ工場労働者から全てのペテルブルグ労働者へ」（79年1月17日付）などを印刷している。³²⁹⁾

VI. 結語

ロシア近代社会の再考をめざした本論の出発点に位置した問題関心はいわゆる「大改革」期が「科学と文化」を前例にないほどまでに尊重した時期であったろうとするものであった。それをヴシニッチの用語を借用して「自主性

(samostoitel'nost')」の時代として捉えることも出来るのではないかと考えたのである。つまり、それは物質的に発展し、社会的に高揚して、新しい知的進歩が模索されようとした時代でもあった。そこでは、科学と文化は構造的な関係におかれ、科学は実用可能な知識の集大成として活用されるべきことがいわれ、さらにそれをあらゆる人が理解する権利があると見なす空気としての文化が社会的に流通したと考えられる。

そうした文化状況は啓蒙全般を社会的に認知し直すことと殆ど同義であった。しかし、その啓蒙の範囲をめぐることは議論があったが、人民一般までそれを普及すべきと考える勢い、つまり人民派が優った。社会変革を目指す者にとり、知識と革命の関係は一時も頭を離れることがない論点となった。政治に頼るべくもない環境で、人民革命をめざすために革命派の多くはそれぞれに「人民研究」に従事した。それは彼らにとり死活的な意味合いを有した。ここでは啓蒙の問題は人民への負債の返済という形を取ったことは特徴的であった。農民の蒙を啓く手段として最も期待された手段がリテラシイであり、読み書き、文字の力がこれほどまでに信じられた時代はロシアにおいて初めてであったろう。それは多分に近代主義的であって、農村農民の価値観と衝突する運命にあった。「ヴ・ナロード」は科学的な確信の下に遂行されたのであり、正しく、それは「科学と文化」の時代ゆえの産物であった。

「ヴ・ナロード」という人民啓蒙運動は都市側のインテリ学徒が農村へ出向くものであったが、この時期の経済環境の変化は人びとの間にことの他に移動を強いることになった。農民は都市への出稼ぎを繰り返して、都市と農村の間を往復したが、全体として、都市化が進行した。彼らが農村から運び込む共同体的観念や伝統的価値観はますます近代化する都市文化（そして、革命家たちを含むその担い手たち）とは緊張した関係におかれた。基本的に、前者を駆逐しようとする度合いの強弱によって、近代ロシアの革命家たちは順序付けることが可能となった。それはマルクス派はより強く、バクーニン派はより弱いといったスペクトルを意味した。「大改革」期は都市と農村は文化レベルでたえず衝突を繰り返したが、それは革命派を巻き込むことになり、彼らはそれとは無縁ではありえなかった。私は本論で都市と農村の関係論を「労働者＝インテリ」の現象化に引き付けて理解しようとした背景にあったのはこの論点であった。

ペテルブルグはここでの科学と文化の最先端を行った町であった。本論でスケッチしてきたその関係論はこの首都で最もよく観察されたといつてよいであろう。私はいまだによく見通せないままにしているのだが、本論で確認したペテルブルグで観察された事柄の中には、ペテルブルグであるが故に現象化したものもあったのかもしれない。それは

どに、この町の存在はこの時代性をよく反映していたと考えられる。ここでは、たしかに地域を限った濃密な人間関係がある「労働者地区」の存在を指摘しうるのである。そこに居住し働く労働者間の関係は、居酒屋などの道具立てを介在することによって、ますますその親密性を増大することができたのであった。こうした場所をロシア帝国で別に見出すことはかなり骨の折れることである。明らかに、そこでは農村のような単線的な時間（農作業のための暦と教会暦とに支配された時間）があったのではなく、日常的に複合的な時間が流れていた。人はそれぞれ自分の時間を持つとしていた。ペテルブルグの一部の労働者たちが彼らを「指導（啓蒙）しよう」とする学生インテリたちの後見を振りほどいて独自の歩みをみせることになったのも、ひとつとしては、こうした時間論で説明がなされるうであろう。組織論的に、サークルがいわば全盛を迎えたのもこの時期であったのだが、そうした結合体を様々に選び出してくることも時間の複合性で説明できない訳でないであろう。

都市に居住したインテリ＝革命家たちにとり、この時期のロシアによりやく本格的に出現した工場とそこで働く労働者たちは「人民」範疇に加わった新しい要素であった。その「取り扱い」をめぐり、彼らは議論し知恵を働かそうとしたことの一端を本論は紹介した。その中で幾つかの論点に関しては、若干の無理を承知の上で、新しいことを言ってみようとした。何度も触れることになった労働者二分論（ファブリーチヌイエとザヴォチキエ）についてもそうした二分論、類型論の拠って立つであろう文化的論拠にまで言及した。私はこの考えを単なる思い付きとしては提示していないつもりである。そうした、分類にたって戦略を構築しようとした、この時代の革命派の置かれた状況の限界性をも提示しなかったのである（書くまでもないことであるが、そうすることは彼らの営為を軽視することを意味しない。人間はすべてその時代の制約の中で生きるのである）。

「ヴ・ナロード」に関して、アクセリロードがそれを「ロシア化」の一環として捉えようとしていたことに本論でわずかに触れた。この論点は大変に興味深いものであるが、本論ではさらに立ち入ることは控えた。この後の議論としたい。

注

- 1) H. W. Williams, *Russia of the Russians*, London, 1915, 389-390.
- 2) ペテルブルグ市史研究において「文化空間 (kul'turnaia prostanstvo)」論はかなりの伝統がある。例えば、次を参照。P. N. Stolpianskii, *Peterburg, Kak voznik, osnovalsia i ros Sankt-peterburg*, SPb., 1995（これは1918年初版の再版である）。それは「ペテルブルグ文化」現象の解明をめざすものであるが、本論の問題関心とは微妙にずれているように思える。この論点は別に議論したい。
- 3) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, SPb., 1899, 311.
- 4) N. V. Iukhneva, *Etnicheskie sostav i etnosotsial'naiia struktura naseleniia Peterburga*, L., 1984, 24, 53.
- 5) シャボワロフ（高山洋吉訳）『マルクス主義への道——ロシアの革命の一労働者の手記』恒文社, 1965年, 27-31頁。
- 6) ゲルツェン（金子幸彦・長縄光男訳）『過去と思索1』筑摩書房, 1998年, 514頁。もっとも、ゲルツェンは「ペテルブルグかぶれ」には批判的であった。「制服と一様性は専制主義の情熱である。流行がペテルブルグほど尊敬をもって守られているところはない。これはわれわれの教養の未完成を証明するものだ。」（同527頁）
- 7) N. Shelgunov, *Ocherki russkoi zhizni*, M., 1895, 551.
- 8) M. F. Frolenko, *Zapiski semigesiatnika*, M., 1927, 28, 30, 32, 41.
- 9) *Iz rabochego dvizhenii za Nevskoi zastavoi v 70-kh i 80-kh godakh, iz vospominanii starogo rabocheho*, Zheneva, 1900, 3.
- 10) Williams, *op. cit.*, 418.
- 11) *Ocherki istorii Leningrada*, t.2, L., 1955, 744, 776.
- 12) James H. Bader, *St Petersburg, Industrialization and Change*, London, 1976, 114.
- 13) R. E. Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia, The Factory Workers of St. Petersburg 1855-1870*, Stanford University Press, 1971, 300.
- 14) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 300.
- 15) R.E.Zelnik, *Law and Disorder on the Narova River——The Kreenholm Strike of 1872*, University of California Press, 1995, 16, 48.
- 16) N. V. Iukhneva, *Ukaz. soch.*, 126.
- 17) N. V. Kleigel's (sost.), *Gorod S.-Peterburg s tochki zreniia megitsinskoi politzii*, SPb, 1897, 710.（以下、Gorod S.-Peterburg と略記する）
- 18) T. T. S. Fedor, *Patterns of Urban Growth in the Russian Empire during the Nineteenth Century*, University of Chicago Press, 1975, 82ff.
- 19) *Ocherki istorii Leningrada*, 127.
- 20) P. Ia. Kan, *Kazanskaia ploshchad'*, L., 1988, 20.
- 21) *Ocherki istorii Leningrada*, 797.
- 22) I. A. Egorov, *The Architectural Planning of St. Petersburg*, Ohio University Press, 1969, 85.
- 23) Bader, *op. cit.*, 324.
- 24) 畠山禎「近代ロシアにおける都市化と建設業」『社会経済史学』第64巻第5号, 1998年, 88頁。
- 25) Bader, *op. cit.*, 327-8.
- 26) *Gorod S.-Peterburg*, 235.
- 27) *Ocherki istorii Leningrada*, 812.
- 28) N. V. Iukhneva, *Ukaz. soch.*, 108.
- 29) *Ocherki istorii Leningrada*, 8.
- 30) *Gorod S.-Peterburg*, iii.
- 31) *Gorod S.-Peterburg*, 544-545.
- 32) Bader, *op. cit.*, 156.
- 33) *Gorod S.-Peterburg*, 435.
- 34) *Gorod S.-Peterburg*, 273-274.
- 35) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 242.
- 36) Bader, *op. cit.*, 166, 321.
- 37) J. B. Bader, *Modernization and Public Health in St. Petersburg, 1890-1914, Forschungen zur Osteuropaischen Geschichte*, 37 (1984), 357-359.
- 38) J. H. Bader, *The Journey to work in St. Petersburg 1860-1914, Journal of Transport History*, 1974, no. 4, 214-233.
- 39) 高田和夫「近代ロシア社会再考」『比較社会文化』第8号, 2002年, 91頁。
- 40) 高田和夫「近代ロシアの労働者と農民」『法政研究』第57巻第1号, 1990年, 77頁。

- 41) K. Vorob'ev, Otkhozhie promysly krest'ianskogo naseleniia Iaroslavskoi gubernii, Iaroslavl', 1903, 3,5.
- 42) E. G. Economakis, Patterns of Migration and Settlement in Prerevolutionary St. Petersburg: Peasants from Iaroslavl and Tver Provinces, *Russian Review*, 56 (Jan. 1997): 8-24.
- 43) K. Vorob'ev, Ukaz. soch., 24.
- 44) Bater, *St Petersburg, Industrialization and Change*, 65.
- 45) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 307.
- 46) J. H. Bater, *Urban Industrialization in the Provincial Towns of Late Imperial Russia*, University of Pittsburgh, 1986, 24-26.
- 47) 畠山, 前掲「近代ロシアにおける都市化と建設業」86, 94頁.
- 48) Bater, *St Petersburg, Industrialization and Change*, 309.
- 49) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 306.
- 50) Ocherki istorii Leningrada, 188.
- 51) Bater, *op. cit.*, 166.
- 52) Ocherki istorii Leningrada, 178.
- 53) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 313.
- 54) 改めてここで言及するまでもないが, ヨーロッパ中世史家はヨーロッパ史において「個人」が生まれた背景事情として, 人に内面が生まれてきたこと(教会での告白義務化)とともに都市が職業選択の可能性を与えたことを指摘するであろう. 阿部謹也『大学論』日本エディタースクール出版部, 1999年, 47-49頁.
- 55) Statisticheskii Vremennik Rossiiskoi imperii, seriia II, vypsk 16, SPb., 1879, 16, 17, 40, 118, 129, 133.
- 56) S. Bernshtein-Kogan, Chislennost', sostav i polozhenie peterburgskikh rabochikh, Opyt statisticheskogo izsledovaniia, SPb., 1910, 65.
- 57) Tam zhe, 70.
- 58) Entsiklopedicheskii slovar', t. XXVII, 311.
- 59) T.A.Parokhomenko, Kul'tura Rossii i prosveshcheniia naroda, M., 2001, 28.
- 60) Tam zhe, 59. 「人民読書会」については, とりあえず, 高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」『法政研究』(九大) 第62巻第1号, 1995年, 第8節を見てほしい.
- 61) K. I. Abramov, Gorodskie publichnye biblioteki Possii: Istoriia stanovleniia 1830-nachalo 1860-kh gg., M., 2001, 79, 83. しかし, ペテルブルグ市当局が無料の人民図書館(bezplatnye narodnye chital'ni-biblioteki)を最初に2館開設するのは1887年まで待たなくてはならなかった. Gorodskie narodnye biblioteki v Peterburge, *Vestnik Vospitaniia*, 1909, no. 8, 44.
- 62) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 173-189.
- 63) この学校については, S. Starynkebich, Vladimirskaia i Nikol'skaia zhenskie voskresnye besplatnye shkoly v Peterburge, *Russkaia Shkola*, 1890, no. 5, 166-172.
- 64) Ocherki istorii Leningrada, 703, 704.
- 65) このようにいう場合, 近年の西川長夫『国民国家論の射程』(柏書房, 1998年)などの「国民国家」論での議論を想起している.
- 66) Parkhomenko, Ukaz. soch., 226 i sl.
- 67) Ocherki istorii Leningrada, 675は1877年とする.
- 68) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 331.
- 69) L. Khavkina-Gamburger, Gorodskie narodnye biblioteki v Peterburge, *Vestnik vospitaniia*, 1909, no. 8, 44.
- 70) R. E. Zelnik, Workers and Intelligentsia in the 1870s: The Politics of Sociability, in Zelnik (ed.), *Workers and Intelligentsia in Late Imperial Russia: Realities, Representations, Reflections*, University of California Press, 1999, 19. 本文で学校が実態的にも用語的にも少なくともペテルブルグ市では現実味を帯びたという場合, たとえば, ロシア技術協会が労働者地区において独自の労働者向け学校網を張りめぐらしたことも想起している. 具体的には, 次を見てほしい. 高田和夫「近代ロシアの労働者教育」『社会科学論集』[九大] 第28号, 1988年, 第6章.
- 71) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 247.
- 72) Bater, *St Petersburg Industrialization and Change*, 202.
- 73) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 256, シャボワロフ, 前掲書, 22-23頁.
- 74) Bater, *op. cit.*, 208.
- 75) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 250-251. 因みにペテルブルグ市民の年間平均飲酒量は, 1885年から94年の間でヴォトカにして一人当たり約30リットル(2.5ヴェドロ)という数字がある. M. H. Kolpakov, K voprosy ob alkogolizme v S.-Peterburge i o merakh obshchestvennoi bor'by s nim v sviazi s ustroistvom spetsial'nykh lechebnits dlia alkogolikov, SPb., 1896, 26.
- 76) *Ibid.*, 252.
- 77) *Ibid.*, 26.
- 78) G. E. Snow, Socialism, Alcoholism, and the Russian Working Classes before 1917, in S. Barrows and R. Room (eds.), *Drinking*, University of California Press, 1991, 243-246.
- 79) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 255.
- 80) Ocherki istorii Leningrada, 207.
- 81) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 248.
- 82) traktir は訳しにくい用語のひとつであるが, 次は cheap eating establishment と言い換えている. P. Herlihy, *The Alcoholic Empire, Vodka and Politics in Late Imperial Russia*, Oxford University Press, 2002, 6. ここではとりあえず居酒屋としておく. 語源的には街路を意味する trakt が元になっている. 単に飲み食いするだけでなく, 出会いの場としてあった. 1870年代になって「人民の間」によりやく普及したのであり, レストランと相違してその「民衆性 demokratizm」が特徴的である. P. Romanov, Zastol'naia istoriia gosydarstva rossiiskogo, M.-SPb., 2002, 318-319. もう一つ同類のものに kabak がある. これは16世紀, 公共の施設として官製の酒あるいは国の許可を受けた酒, 特にスピリッツを販売した. オブリーチナの住民が火酒を飲むことを許された時につくられた特別施設で元来はタタール語である. 18世紀の中ごろには kabak という用語から想像される不快感を払拭するためにその名称を変える命令が出されたともいう. R. E. E. スミス, D. クリスチャン(鈴木健夫ら訳)『パンと塩——ロシア食生活の社会経済史』(平凡社, 1999年), 129, 301頁.
- 83) Ocherki istorii Leningrada, 152.
- 84) この区分のほかに, razdeval'nia, katok, nomer などのいわば非階級的(非階層的)な用語を使う区分法もあるが(P. Romanov, Ukaz. soch., 320.), ここでは採用しない.
- 85) Gorod S.-Peterburg, 60.
- 86) Tam zhe, 186-189.
- 87) Tam zhe, 344-346.
- 88) Iukhneva, Ukaz. soch., 68-69.
- 89) Tam zhe, 68-69.
- 90) Tam zhe, 156, 163.
- 91) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 250.
- 92) L. L. Phillips, *Everyday life in revolutionary Russia: Working-class drinking and taverns in St. Petersburg, 1900-1929*. Ph. D. Thesis, University of Illinois, 1993, 86-97. なお, 労働者の飲酒に関わる邦語文献として, 次を参照. 土屋好古「帝政末期のロシア労働者と労働者文化」, 小沢弘明ら著, 『労働者文化と労働運動』(木鐸社, 1995年)所収. R・E・E・スミス, D・クリスチャン(鈴木健夫ら訳)『パンと塩』(平凡社, 1999年), 第3部第8章.
- 93) L. L. Phillips の前掲書は飲酒行為を社交性 sociability の基本要素とみなし, 居酒屋が労働者階級の生活の中心点である

- ことの意味合いを探ろうとする。さらに次も参照。L.L. Phillips, *Message in a Bottle: Working-Class Culture and the Struggle for Revolutionary Legitimacy, 1900-1929, Russia Review*, 56 (Jan. 1977), 25-43. 彼女の議論は近年のアルコール社会史研究とでもいいうる潮流にあるものであろう。1984年に初めて開催された歴史学者と社会科学者のコンフェレンスに提出された論文を集めた次を見よ。S. Barrows and R. Room (eds.), *Drinking; Behavior and Belief in Modern History*, University of California Press, 1991.
- 94) L. L. Phillips, *op. cit.*, 32-50.
- 95) 通例, 女性の飲酒と売春とは密接に結び付けられて考えられた。おそらく, 実際にもそうであったのであろう。特に近代ロシアにおいて, それが問題とされたことについては, さしあたり, 次の指摘を参照のこと。P. Herlihy, *op. cit.*, 93-94. 売春婦は医務警察委員会により管理されたが, 大半はその目を逃れた「非登録者 (neregistrovannye)」であった。登録売春婦の数を見ると1860年代は2000人ほどと変わらなかったが, 1870年になると4400人に急増した。Gorod S.-Peterburg, 575. Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 251. このことの持つ意味合いについては別に検討したい。スミスたちは, 「飲んだくれは, 売春婦のいない居酒屋へは行かない」と書く。スミスら, 前掲書, 129頁。
- 96) L. L. Phillips, *op. cit.*, 113-143.
- 97) Zelnik, *Law and Disorder*, 94, 96.
- 98) シャボワロフ, 前掲書, 25頁以下。
- 99) E. Svift, *Razvlekatel'naia kul'tura gorodskikh rabochikh kontsa XIX-nachala XX veka, v kn.: Razvlekatel'naia kul'tura Rossii XVIII-XIX vv. Ocherki istorii i teorii*, SPb., 2000, 304.
- 100) D. N. Smirnov, *Na Trubochnom zavode v proshlom, Krasnaia Letopis'*, 1928, no. 2, 218.
- 101) E. E. Keller, *Prazdnichnaia kul'tura Peterburga, ocherki istorii*, SPb., 2001, 65.
- 102) P. N. Stolpianskii, *Ukaz. soch.*, 116.
- 103) A. M. Konechnyi, *Peterburgskie narodnye gulian'ia na maslenoi i paslhal'noi negeliakh, v kn.: N. V. Iukhneva (red.), Peterburg i guberniia, istoriko-etnograficheskie issledovaniia*, L., 1989, 21-30.
- 104) Tam zhe, 36, 37.
- 105) Tam zhe, 39, 40.
- 106) Tam zhe, 42.
- 107) E. Svift, *Ukaz. stat'ia*, 306.
- 108) この二つの文章は次を私なりに解釈し直しているから, Sviftの見解とは必ずしも一致するものではない。Tam zhe, 304-305. なお, 現代ロシアの都市文化研究では, 通例, ペテルブルグ文化の現象として「祝日空間 (prazdnichnoe prostranstvo)」概念が設定される。さらにいえば, それはフランスの「アナール派」の影響を強く受け, 「ペテルブルグ・マンタリテ (peterburgskaia mental'nost')」の解明を目ざしている。そのために, 神話 (mif), 神秘主義 (mistika), 建築空間 (arkhitekturnoe prostranstvo), 首都性 [中心性] (stolichnost') の4方面からの接近が試みられている (Sm. Keller, *Ukaz. soch.*, 25, 34.)。
- 109) Tam zhe, 303.
- 110) Tam zhe, 304. この二つの文章で使われている「工場労働者たち (zavodskie)」という用語法に注意されたい。ここでは「ザヴォツキエ」には一部の有資格労働者あるいは金属工などという含意はないであろう。つまり, 労働者一般を示す用例であるといえる。
- 111) Tam zhe, 306-307.
- 112) この宣言文全文は次に収録されている。N. V. Shelgunov, *Vospominaniia*, M.-L., 1923, 287-302.
- 113) Plekhanov, *Russkii rabochii v revoliutsionnom dvizhenii* (po lichnym vospominaniiam), *Sobranie sochinenii*, t. 3, M.-L., 1923.
- 114) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 207, 212, 213.
- 115) Ocherki istorii Leningrada, 74.
- 116) Tam zhe, 99-100. 本文に若干の補足をすれば, 18世紀初頭からバルト艦隊の建造に貢献してきた「海軍工廠イジョーラ工場」は1877年に新しい製鉄工場を設置し, 海軍力の増強に励むことになった (Admiralteiskie Izhorskie zavody, kratkii istoricheskii ocherk, SPb., 1903, 118, 119.)。さらに, N・I・ブチーロフを介して「ブチーロフ工場」とはいわば姉妹関係にあった「オブホフ工場」はクリミア戦後のとくに海軍建て直しに尽力するよう要請され, 1886年には国有化されて海軍省の管轄になった (Istoriia Obukhovskogo staleliteinogo zavoda v sviazi s progressom artilleriiskom tekhniki, SPb., 1903, 24, 25, 33, 61, 145.)。
- 117) B. P. Usanov, Nikolai Ivanovich Putilov, *Uchenyi, inzhener, predprinimatel'*, SPb., 2000, 56, 70, 73.
- 118) Ocherki istorii Leningrada, 184-185.
- 119) Gorod S.-Peterburg, 547-549.
- 120) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 254.
- 121) Istoriia rabochikh Leningrada, t. 1, L., 1972, 131. この委員会は1880年代中ごろに521工場調査を行い, 何とか満足できる状態にあるものを135とし, 残りは基本的な要求にさえ対応していないと評価した。Tam zhe, 139. 本論の問題関心は工場を取り巻く社会環境にあり, ここでは工場内部の諸様相に立ち入ることは控える。
- 122) Istoriia rabochikh Leningrada, t. 1, L., 1972, 142.
- 123) Iu. I. Kir'ianov, *Zhiznennyi uroven' rabochikh Rossii*, M., 1979, 156-157.
- 124) Bater, *St Petersburg, Industrialization and Change*, 252.
- 125) Gorod S.-Peterburg, 631-632.
- 126) Tam zhe, 313.
- 127) Tam zhe, 700.
- 128) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 319.
- 129) Ocherki istorii Leningrada, 202-3.
- 130) M. F. Hamm, *The City in Late Imperial Russia*, Indiana University Press, 1986, 56.
- 131) Bater, *op. cit.*, 201.
- 132) Entsiklopedicheskii slovar', t.XXVII, 323.
- 133) Gorod S.-Peterburg, 463.
- 134) Tam zhe, 219.
- 135) Tam zhe, 314-316.
- 136) Tam zhe, 588.
- 137) Williams, *Russia of the Russians*, 420-422.
- 138) シャボワロフ, 前掲書, 17, 29頁。
- 139) Kir'ianov, *Ukaz. soch.*, 72-73.
- 140) Tam zhe, 104, 108-109, 114, 124.
- 141) Istoriia rabochikh Leningrada, t. 1, 136.
- 142) S. Bernshtein-Kogan, *Chislennost', sostav i polozhenie peterburgskikh rabochikh. Opyt statisticheskogo izsledovaniia*, SPb., 1910, 51-55.
- 143) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 56.
- 144) D. N. Smirnov, *Na Trubochnom zavode v proshlom, Krasnaia Letopis'*, 1928, no. 2. E. A. Kolol'chuk (sost.), *V nachale puti, vospominaniia peterburgskikh rabochikh 1872-1897 gg.*, L., 1975, 381.
- 145) 高田和夫「M.ゴーリキーと『工場史叢書』」, 和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社, 1986年所収。S. V. Zhuravlev, *Femomen "Istorii fabrik i zavodov", Gor'kovskoe nachnanie v kontekste epokhi 1930-kh godov*, M., 1997.
- 146) E. A. Korol'chuk (red.), *Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii*, M.-L., 1927, 4, 13.
- 147) V. G. Gerasimov, *Zhizn' russkogo rabocheho polveka*

- tomu nazad, Zapiski sotsialista-rabocheho Vasiliia Gerasimova, M., 1924. Ego zhe, Zhizn' russkogo rabocheho, Vospominaniia, M., 1959.
- 148) M. D. Steingerg, Worker-authors and the Cult of the Person, in S. P. Frank and M. D. Steinberg (eds.), *Cultures in Flux: Lower-class Values, Practices, and Resistance in Late Imperial Russia*, Princeton University Press, 1994. さらにこの議論に批判的な次も参照のこと. R. L. Hernandez, The Confessions of Semen Kanatchikov: A Bolishevik Memoir as Spittitual Autobiography, *Russian Review*, v. 60 (Janunary 2001), 13-35. なお, 基本的に対象は革命後に限られるが, ロシア芸術アカデミーの「革命文学展覧会委員会 (Komitet vystavki revoliutsionnoi literatury) が1926年に刊行した『労働者=農民作家』は「作家」約200名とそれらの作品およそ1500点を集めた便利な便覧である. Raboche-Krest'ianskie pisateli, M.-L., 1926.
- 149) Zelnik, *Law and Disorder*, 224.
- 150) Zelnik, *Workers and Intelligentsia in the 1870s*, 35.
- 151) Entsiklopedicheskii slovar', t. XII, Spb., 1897, 476.
- 152) Revoliutsionnaia rol' razlichnykh grupp peterburgskikh rabochikh, *Katorga i Ssylka*, 1923, no. 6, 41-42.
- 153) Shishko, *Sobranie sochinenii*, t. IV, 146, 209.
- 154) N. S. Karzhanskii, *Moskovskii tkach Peter Alekseev*, M., 1954, 14.
- 155) Sm. Rech' P. A. Alekseeva, Zheneva, 1889.
- 156) この話は初期パンフレットの類では必ず触れられる, 数少ない「事実関係」のひとつとされるものである. 次のようなものを見よ. Russkii Tkach Peter Alekseevich Alekseev, Tipografiia "Rabochago Znameni", 1900, 8. F. Volkhovskii, Tkach Petr Alekseevich Alekseev, SPb., 1906, 3.
- 157) N. S. Karzhanskii, Ukaz. soch. 27. この時期の本の行商人の社会的な意味合いについて, 前掲の高田「ロシア農民とリテラシイ」第7節を見れば, ここでそれをいうのが格段に突飛なことではないことがわかるであろう.
- 158) S. S. Sinegub, Vospominanie chaikovtsa, *Byloe*, 1906, no. 9, 109-110.
- 159) R. Otto, A Note on the speech of Peter Alekseev, *Slavic Review*, v. 38, no. 4, 1979, 651.
- 160) Pis'ma Peter Alekseeva iz ssylki, *Katorga i Ssylka*, 1924, no.13, 168.
- 161) Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii, Bibliograficheskii slovar', t. 2, vyp. 1, M., 1929, 347-349.
- 162) N. Tsvilenev, Revoliutsioner-rabochii Peter Alekseev, M., 1928, 6.
- 163) Tam zhe, 6-7.
- 164) I. S. Dzhabadari, Protsess "50", *Byloe*, 1907, no. 9, 168, 188.
- 165) この問題に正当な配慮をしている一例として, 次を参照のこと. Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 246, 253.
- 166) *A Radical Worker in Tsarist Russia; the autobiography of Semen Ivanovich Kanatochikov*, translated and edited by Reginald E. Zelnik, Stanford University Press, 1986. これは次を訳している. S. I. Kanatchikov, Iz istorii moego bytiia, M.-L., 1929. Ego zhe, Istoriia moego bytiia, M., 1932を併せて, 1934年に29年版と同じタイトルで刊行されたもの.
- 167) 高田和夫「近代ロシアの労働者と農民」『法政研究』第57巻第1号, 1990年, 46-48頁.
- 168) Zelnik (ed.), *A Radical Worker in Tsarist Russia*, 1-6. 農民が抱いていた読み書きの効用観については, とりあえず, 前掲の高田「ロシア農民とリテラシイ」第5節を参照されたい.
- 169) *Ibid.*, 6-13.
- 170) *Ibid.*, 19.
- 171) *Ibid.*, 14-20.
- 172) *Ibid.*, 38.
- 173) *Ibid.*, 27.
- 174) *Ibid.*, 34.
- 175) *Ibid.*, 51.
- 176) *Ibid.*, 60.
- 177) *Ibid.*, 71.
- 178) *Ibid.*, 66-67.
- 179) *Ibid.*, 69.
- 180) *Ibid.*, 75-76.
- 181) *Ibid.*, 68.
- 182) *Ibid.*, 83-90.
- 183) *Ibid.*, 91.
- 184) *Ibid.*, 91-92, 100.
- 185) *Ibid.*, 415. こうした名称とプスコフ県識字率が帝国最下位であったことは何らかの関係があったとみたほうがよい. 1897年センサスによれば, エストランド77.9%, ペテルブルグ55.1%などに対して, プスコフは14.6%でしかないのである.
- 186) *Ibid.*, 98.
- 187) *Ibid.*, 102-120. 1900年1月末, カナトコフらのサークルは逮捕される. この後, 回想記は首都を離れ, 流刑の日々を扱うことになる (彼が最も活躍するのはサラトフ市においてである).
- 188) M. M. Breitbart, Peter Kropotkin, the Anarchist Geographer, in R. Stoddart (ed.), *Geography, Ideology and Social Concern*, Oxford, 1981, 135-136.
- 189) Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, t. 1, 93.
- 190) Tam zhe, 96.
- 191) Tam zhe, 102.
- 192) G. Woodsock and I. Avakumovic, *The Anarchist Prince, A Biographical Study of Peter Kropotkin*, London, 1950, 122, 127.
- 193) Kropotkin, Zapiski, t. 1, 1929, 351.
- 194) P. クロボトキン (藤本良造訳) 『一革命家の思い出』筑摩書房, 1962年, 265頁.
- 195) Peredovaia stat'ia, t. 1, zhurnala "Vpered!", v kn.: Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, t. 1, M., 1964. ラヴロフ「前進—われわれの綱領」1873年8月, 『前進』第1号, 田坂昴編訳『人民のなかへ ロシア・ナロードニキ運動資料集 I』新泉社, 1976年.
- 196) Kuliabko-Koretskii, Iz davbykh let, vospominaniia lavrista, 131-132.
- 197) H. M. ビルーモヴァ (佐野努訳) 『バクーニン伝 (下)』三一書房, 1973年, 135頁.
- 198) Pribavlenie "A" k knige M. A. Bakunina "Gosudarstvennost' i anarkhiia", v kn.: Revoliutsionnoe narodnichestvo 70-kh godov XIX veka, t. 1, バクーニン『国家制度とアナキー』付録A〔左近毅訳〕, 『バクーニン著作集』6, 白水社, 1973年, 298, 304頁.
- 199) ロシアにおいて, サークルはかなり古い伝統を有する. ゲールツェンは, 1830年代のそれ, つまり, スタンケーヴィチたちのもの, スラヴ主義者のもの, それに彼ら自身のものなどについてこう特徴づけている. 「官製のロシアから, また, まわりの環境からの深い疎外感である。」(前掲のゲルツェン『過去と思索 1』, 508頁。)明らかにこれらは本論で扱うものとは異なり, ごく一部インテリたちの, むしろ閉じられて内向きの性格をもつものである. 普通, ゲールツェンはこれらにグループという名称をあてるが, 私は史的な連続性が気になる. E. H. カーはそのバクーニン論の中でこれらに対して正当にもサークルを使っており, なおかつ, 彼はそれが当時の学生用語であったことにも触れている. E. H. カー (大沢正道訳)

- 『バクーニン (上)』現代思想社, 1965年, 45頁.
- 200) O. V. Aptekman, *Obshchestvo Zemlia i Volia* 70-kh gg. po lichinyim vospominaniyam, 2-oe izd., Petrograd, 1924, 128.
- 201) 高田和夫, 前掲「近代ロシア社会再考」105-106頁などを参照.
- 202) Zelnik, *Labor and Society in Tsarist Russia*, 89.
- 203) B. S. Itenberg, *Dvizhenie revoliutsionnogo narodnichestva*, 172.
- 204) N. S. Rusanov, *Iz moikh vospominanii*, kniga pervaiia, Berlin, 1923, 137.
- 205) O. V. Aptekman, *Ukaz. soch.*, 61.
- 206) Tam zhe, 63.
- 207) ルサーノフはオリョール市の事例をあげて, それが中央部ロシアで宣伝家たちの集合に資したことを指摘している. Rusanov, *Ukaz. soch.*, 84.
- 208) *Revoliutsionnoe narodnichestvo* 70-kh godov XIX veka, t. 1, 252-3, 297-8. 前掲『人民のなかへ』192, 213頁.
- 209) 下里俊行「カラコーゾフ事件とロシアの社会運動 (1866年)」『一橋論叢』第113巻第2号, 1995年. ここでは私はサークルに「公務」を出すと, それはサークルではなくなるという立場をとっている. これは, 例えば, 次のような鶴見俊輔の見方に近いと思う. 「サークルの価値観はむしろ, 過程でいろいろの力がたがいに会うことであり, ちがう価値観が結びついて全体の総和がゼロになるようなくらか虚無的な極相をつねに心にもって動いているように思える.」「サークルの独自の活力は, 書かれた理論のせまさをつきぬけて, 縦横に動き回る精神のための社会的空間を用意することにあると思う.」思想の科学研究会編『共同研究 集団 サークルの戦後思想史』平凡社, 1976年, 10, 17頁.
- 210) [M. Bortnik,] *V 70-e i 80-e gody na Trubochnom zavode, Krasnaia Letopis'*, 1928, no. 2, 178-179.
- 211) *Rabochee dvizhenie v Rossii v XIX veke*, t. 2, ch. 1, M., 1950, 423-424.
- 212) Tam zhe, 425.
- 213) D'iakov サークルとその綱領については, F. Venturi, *Roots of Revolution*, London, 1960, 536-538.
- 214) V. G. Gerasimov, *Zhizn' russkogo rabochego, vospominaiia*, M., 1959, 46-49. サークルに関してその後の展開にわずかに触れれば, 1880年代の主要な革命党派である「人民の意志」派もサークルを重視した. その労働者向け綱領(1880年11月)は諸サークルの結びつきを強調したし, 81年末, ペテルブルグにおける同派系の労働者革命組織が85人事件として訴追された時に検察により明らかにされたのは, 「第一級サークル」「第二級サークル」「革命教育サークル」そして「中央煽動グループ」といった諸サークルを中心とした組織論であった. (『人民の中へ ロシア・ナロードニキ運動資料集Ⅱ』, 236頁以下). これにはサークルから政党へいたる道が一つの可能性として考えられていたふしがある.
- 215) 規約は次を参照. [Ia. D. B.] *Programma dlia kruzhek samoobrazovaniia i prakticheskoi deiatel'nosti, Katorga i Ssylka*, 1930, no. 67, 89-100.
- 216) Tam zhe, 95.
- 217) N. A. Troitskii, *O pervoi programme revoliutsionnogo narodnichestva* 1870-kh godov, *Voprosy Istorii*, 1961, no. 6, 208-210.
- 218) *Programma dlia kruzhek samoobrazovaniia i prakticheskoi deiatel'nosti*, 95-97.
- 219) Tam zhe, 98-100.
- 220) 因みに, 後にアクセリロードは当時の余り進んでいない学生たちは都市労働者と農民を一纏めにする傾向にあった, などと悪口を言っている. P. Aksel'rod, *Perezhitoe i peredumanno*, Berlin, 1932, 72.
- 221) *Programma dlia kruzhek samoobrazovaniia i prakticheskoi deiatel'nosti*, 100-101.
- 222) Tam zhe, 101-103.
- 223) Tam zhe, 103-105.
- 224) Tam zhe, 105-106.
- 225) Tam zhe, 105.
- 226) P. L. Lavrov, *Narodniki-propagandisty* 1873-78 godov, SPb., 1907, 33.
- 227) 例えば, 次を見よ. F. Venturi, *Roots of Revolution*, 354. A. Walicki, *A History of Russian Thought*, Stanford University Press, 1979, 177.
- 228) B. S. Itenberg, *Dvizhenie revoliutsionnogo narodnichestva*, 155.
- 229) N. G. Kuliabko-Koretskii, *Iz davnykh let, Vospominania lavrista*, M., 1931.
- 230) 佐々木照史『ラヴローフのナロードニキ主義歴史哲学』彩流社, 2001年, 8, 13, 15, 174, 279, 291頁などを参照.
- 231) *Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii*, t. 2, vyp. 1, M., 1929, stol. 264.
- 232) V. E. Varzar, *Vospominaniia starogo statistika*, Rostov-na-Donu, 1924, 114.
- 233) Walicki, *op. cit.*, 236.
- 234) V. E. Varzar, *Ukaz. soch.*, 131.
- 235) E. A. Korol'chuk, "Severnyi Soiuz Russkikh Rabochikh" i revoliutsionnoe rabochee dvizhenie 70-kh godokh XIX v. v Peterburge, L., 1946, 71.
- 236) *Revoliutsionnoe narodnichestvo* 70-kh godov XIX veka, t. 1, 305-306, 前掲『人民のなかへ』224頁.
- 237) V. I. Nevskii, *Ot "Zemli i Voli" k gruppe "Osvobozhdeni e Truda"*, M., 1930, 149.
- 238) *Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii*, t.2, vyp. 1, stol. 92-93.
- 239) V. I. Nevskii, *Ukaz. soch.*, 151.
- 240) Tam zhe, 152.
- 241) *Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii*, t. 2, vyp., 3, M., 1931, stol. 1468-1471.
- 242) V. I. Nevskii, *Ukaz. soch.*, 153に彼らの名前がある.
- 243) Tam zhe, 152.
- 244) R. Zelnik, *Rabochie i intelligentsiia v 1870-kh gg.*, v kn.: *Rabochie i intelligentsiia Rossii v epokhu reform i revoliutsii* 1861-fevral' 1917 g., SPb., 1997, 475-476.
- 245) *Ibid.*, 477-478.
- 246) E. A. Korol'chuk, *Ukaz. soch.*, 152.
- 247) Iu. Z. Polevoi, *Stepan Khalturin*, M., 1979, 27.
- 248) V. Nevskii, *Viktor Pavlovich Obnorskii*, v kn.: *Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik*, t. 3, M.-L., 1926, 14..
- 249) Zelnik, *Rabochie i intelligentsiia v 1870-kh gg.*, 478.
- 250) *Ibid.*, 483.
- 251) *Ibid.*
- 252) *K biografii ognogo iz osnovatelei "Severo-Russkogo Rabochego Soiuza"*; I. A. Bachin i ego drama, *Katorga i Ssylka*, 1924, no. 13, 52. マッキンゼイはこの事実関係を議論の展開の核心に据えている. P. S. McKinsey, *From City Workers to Peasantry: The Beginning of the Russian Movement "To the People"*, *Slavic Review*, v. 38, no. 4 (Dec. 1979), 636-637.
- 253) E. A. Korol'chuk (sost.), *Pervaiia rabochaia demonstratsiia v Rossii*, M.-L., 1927, 8.
- 254) Stepniak, *Underground Russia*, London, 1883, 30. M. Stepniak-Kravchinskii, *Podpol'naia Rossiia*, Petrograd, 1917, 15.
- 255) F. Venturi, *Roots of Revolution*, 536-538.
- 256) *Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii*, t. 2, vyp., 3, stol. 1534-1536.

- 257) “Vpered!” no. 31, 1876, 226 i sl.
- 258) Iz istorii propagandy sredi rabochikh Peterburga vo vtoroi polovine 70-kh godov, v kn.: Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik, t. 3, M.-L., 1926, 63-107.
- 259) Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii, t. 2, vyp. 3, stol. 1530-1532.
- 260) Tam zhe, stol.1002-1004. Iz istorii propagandy sredi rabochikh Peterburga vo vtoroi polovine 70-kh godov, 53 i sl., Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 8.
- 261) Korol'chuk, Ukaz. soch., 135.
- 262) Iz istorii propagandy sredi rabochikh Peterburga vo vtoroi polovine 70-kh godov, 54.
- 263) V 70-e i 80-e gody na Trubochnom zavode, *Krasnaia Letopis'*, 1928, no. 2, 176-177. 葉茨工場全体平均で1870年代末の読み書き率は66.2%という数字がある。Istoriia rabochikh Leningrada, t. 1, 145.
- 264) Tam zhe, 177-178.
- 265) プレハーノフは、労働者自身はこのサークルをあくまで自習サークル (kruzhoki samoobrazovaniia) としてみていたという。彼自身はいまだ若く、労働者に影響力を行使しうる立場にはなかった。Plekhanov, Russkii rabochii v revoliutsionnom dvizhenii (po lichnym vospominaniiam), Sobranie sochinenii, t. 3, 125.
- 266) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, M.-L., 1927.
- 267) Tam zhe, 3.
- 268) Tam zhe, 38, 41.
- 269) 起訴状全文は、Tam zhe, 32 i sl.
- 270) Plekhanov, Sobranie sochinenii, t. 3, 149.
- 271) Aptekman, Ukaz. soch., 189.
- 272) Korol'chuk, Ukaz. soch., 117-118.
- 273) Tam zhe, 12.
- 274) Plekhanov, Sobranie sochinenii, t. 3, 149.
- 275) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 31.
- 276) Tam zhe, 13.
- 277) M. Chernavskii, Aleksandr Nikolaevich Bibergal', *Katorga i Ssylka*, 1926, no. 1, 213-214.
- 278) Plekhanov, Sobranie sochinenii, t. 3, 150-151.
- 279) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 11-12.
- 280) M. M. Chernavskii, Demonstratsiia 6 dekabr' 1876 goda, *Katorga i Ssylka*, 1926, no. 7/8, 7, N. Bibergal', Vospominaniia o demonstratsii na Kazanskoi ploschadi, *Katorga i Ssylka*, 1926, no. 7/8, 22. さらに、次はデモの主たる組織者としてナタンソン、プレハーノフ、ハーゾフの三人をあげる。D. Kuz'min, Kazanskaia demonstratsiia 1876 g. i G. V. Plekhanov, *Katorga i Ssylka*, 1928, no.5, 9.
- 281) P. S. Tkachenko, Revoliutsionnaia narodniceskaia organizatsiia “Zemlia i Volia” (1876-1879 gg.), M., 1961, 158.
- 282) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 45.
- 283) Tam zhe, 20.
- 284) Tam zhe, 21-22.
- 285) Tam zhe, 24.
- 286) *Katorga i Ssylka*, 1926, no. 1, 214. しかし、この人は同じ史料雑誌がカザン・デモ50周年記念特集を組んだ時に、労働者は「大変に目立った (ochen' zametno)」というのである。*Katorga i Ssylka*, 1926, no. 7/8, 16. この間に何があったかは想像するしかないが、これが大変に「微妙な」論点であったことはうかがえるであろう。
- 287) *Vpered!*, no. 48, 31 (19) Dekabria, 1876 g., Chto delaetsia na Rodine? 欄
- 288) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 26. 帝政ロシアの大学生が目立つ恰好をしていたことは、例えば、ゲールツェンの回想にも次のように出てくる。「(モスクワ大の) 学生たちは登校する時には、狐騎兵もどきの制限のフロックではなく、思い思いの奇抜な風変わりな服を着て、長髪の上に辛うじてのっているきわめて小さな帽子を被っていた。」前掲『過去と思索 1』, 139頁。
- 289) Obysk u G. V. Plekhanova 10 Dekabria 1876 g. i svidetel'skie pokazaniia o demonstratsii na Kazanskoi Ploschadi 6 Dekabria 1876 g. (K 30-letiiu “Kazanskoi” demonstratsii), *Krasnaia Letopis'*, 1926, no. 6, 164-171. 最近、このデモ参加者に対する裁判における弁護士と弁護士の論争が刊行されたが、そこでは何の証拠物件もないことを弁護の要にしている。“Mnogo shumu iz pustiakov...”, Rech' prisiazhnogo poverennogo G. V. Bardovskogo na protsesse po delu o Kazanskoi demonstratsii 6 dekabria 1876 g., *Istoricheskii Arkhiv*, 2002, no. 1, 191.
- 290) P. S. McKinsey, The Kazan Square Demonstration and the Conflict Between Russian Workers and Intelligenty, *Slavic Review*, 1985, v. 44, no. 1, 83-103.
- 291) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 61-63.
- 292) Tam zhe, 51.
- 293) Tam zhe, 52.
- 294) Gorod S.-Peterburg, 84. P. Ia. Kan, Kazanskaia ploschad', L., 1988, 5, 53. 81. P. N. Stolpianskii, Ukaz. soch., 241-242. K. G. Sokol, Monumenty imperii, M., 1999, 130. この本は2001年にも再刊された。Ego zhe, Monumenty imperii, M., 2001, 244-245.
- 295) Iz istorii propagandy sredi rabochikh Peterburga vo vtoroi polovine 70-kh godov, 57.
- 296) Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii, t. 2, vyp. 3, stol. 1862-4.
- 297) E. A. Korol'chuk, Pervaia rabochaia demonstratsiia v Rossii, 9.
- 298) 手稿テキスト全文は、Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik, T. 3, M.-L., 1926, 107-117.
- 299) ここで初出する彼らについて少しだけ触れれば、ブノフは1871年にベテルブルグ大学から外科医学アカデミーへ転学した学生であり、コルシュノーフは測量士、ヴィレンツは外科医学アカデミー自由聴講生である。Deiateli revoliutsionnogo dvizheniia v Rossii の当該箇所を参照。
- 300) Iz istorii propagandy sredi rabochikh Peterburga vo vtoroi polovine 70-kh godov, 56. Rusanov, Iz moikh vospominanii, t.1.
- 301) V 70-kh i 80-kh gody na Trubochnom zavode, *Krasnaia Letopis'*, 1928, no. 2, 207-208.
- 302) V. Nevskii, Viktor Pavlovich Obnorskii, v kn.: Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik, t. 3, M.-L., 1926, 20-22.
- 303) 高田和夫「露土戦争とロシア・ナショナリズム」『法政研究』(九大) 第68巻第3号, 2000年を参照。
- 304) Korol'chuk, Ukaz. soch., 156.
- 305) A. Asher, *Pavel Axelrod and the Development of Menshevism*, Harvard University Press, 1972, 42.
- 306) V. Burtsev, Severnyi Soiuz Russkikh Rabochikh, *Byloe*, 1906, no. 1, 171.
- 307) Akselrod, Perezhitoe i Peredumannoe, t. 1, Berlin, 1923, 299.
- 308) こうした議論はその後、多くなったのだが、その端緒的なひとつは次である。L. Deich, Viktor Obnorskii, *Proletarskaia Revoliutsiia*, 1921, no. 3, 50.
- 309) L. Deich, Viktor Obnorskii, 44-61, R. Kantor, K bibliografii V. P. Obnorskogo, *Krasnaia Letopis'*, 1923,

- no. 5, 348-353, V. Nevskii, V. P. Obnorskii, Istoriko-Revoliutsionnyi Sbornik, t. 3, 1926, V. Levitskii, Biktor Obnorskii, Osnovatel' "Severnogo Soiuz Russkikh Rabochikh", M., 1929.
- 310) O severno-russkom rabochem souuze, *Byloe* [London edition], 1903, no. 3, 199.
- 311) V. Nevskii, V. P. Obnorskii, 27, V. 70-kh i 80-kh gody na Trubochnom zavode, 204, S. Mitskevich, Moskovskie revoliutsionnye kruzhki 2-i polovine 1870-kh godov, *Katorga i Ssylka*, 1924, no. 11, 60.
- 312) V. Burtsev, Severnyi Soiuz Russkikh, 171.
- 313) Plekhanov, Sobranie sochinenii, t. 3, 156-157.
- 314) V. Burtsev, Severnyi Soiuz Russkikh, 171-172.
- 315) L. Deich, Viktor Obnorskii, 51.
- 316) Korol'chuk, Ukaz. soch., 158-159.
- 317) Detstvo i otrochestvo Stepana Kharturina, *Proletarskaia Revoliutsiia*, 1921, no. 3, 41-42.
- 318) V. Nevskii, V. P. Obnorskii, 25. ネフスキーはハルトウーリンのペテルブルグ「登場」が遅かったことから、彼の運動指導性を低く扱う傾向が認められる。むしろ指摘さるべきは、ここにも示されたペテルブルグの「吸引力」である。
- 319) Lev Tikhomirov, Teni proshlom, *Katorga i Ssylka*, 1926, no. 4, 84.
- 320) G. A. Kuklin, Severnyi Soiuz russkikh rabochikh i Stepan Khalturin, 1878-1882 g. Zheneva, 1904, 3, 5, 21は、「同盟」は1878年末に指物師 (stoliar) ハルトウーリンと彼の補佐者である組立工オブノルスキーの熱意によって創設された。オブノルスキーが同年にペテルブルグへ帰還したとき、前者はすでに「宣伝された (raspropagandirovannye) 労働者のサークル」をつくっていた。さらに「同盟」には労働者約200人が参加し、そこには「中央委員会」まであったなど一方的にいう、宣伝文書の類である。
- 321) V. I. Nevskii, Ot "Zemli i Voli" k gruppe "Osvobozhdenie Truda", M., 1930, 158, 163.
- 322) Korol'chuk, Ukaz. soch., 186.
- 323) 1879年「新綿紡績」ストについては、さしあたり, Rabochee dvizhenie v Rossii XIX veke, t. 2, ch. 2, M., 1950, 307以下を見よ。
- 324) テキスト全文は, V. I. Nevskii (red.), Ot "Zemli i Voli" k gruppe "Osvobozhdenii Truda", M., 1930, 385-388. Burtsev, Severnyi Soiuz Russkikh, 175-178.
- 325) N. S. Rusanov, Iz moikh vospominanii, kn. Pervaia, Berlin, 1923, 243.
- 326) Sm. Mitskevich, Moskovskie revoliutsionnye kruzhki 2-oi poloviny 1870-kh godov, *Katorga i Ssylka*, 1924, no. 11, 72.
- 327) Polevoi, Stepan Kharturin, M., 1979, 61.
- 328) Tam zhe, 64, 76.
- 329) Burtsev, Severnyi Soiuz Russkikh, 179-182.
- [付記] この続編では、前号目次で予告した構成内容を変更している。ご了承ください。